見つけよう自然のなかま
―ならやまの木々たち―

見つけよう自然のなかま

―ならやまの木々たち―

表紙のデザインは、奈良市立佐保台小学校と佐保川小学校の児童、そして会員のお孫さんたちの応募作品の中から、選考委員会で最優秀賞に選ばれた佐保台小学校の中野里々花さん(1年)の作品です。

掲載している挿絵は、ならやまプロジェクト(景観整備)活動の一コマ一コマを描いています。会員の岩崎雅子さんの作画です。

目 次　＆　索 引(さくいん)

木々たちとの出あい	1	ウワミズザクラ	36
ならやまはだれのもの	2	ウンシュウミカン	131
ならやまってこんなところ	4	エゴノキ	37
葉(葉のつくり・複葉) (葉のつき方)	5	エノキ	38
		オオシマザクラ	40
アオキ	12	オニグルミ	41
アオツヅラフジ	13	カキノキ	42
アオモジ	14	カクレミノ	43
アカマツ	15	カスミザクラ	44
アカメガシワ	17	カナメモチ	45
アキグミ	18	カマツカ	46
アケビ	19	ガマズミ	47
アジサイ	20	カラスザンショウ	48
アセビ	21	カンヒザクラ	39
アベマキ	22	キヅタ	49
アラカシ	23	キリ	50
イソノキ	24	キンモクセイ	51
イチジク	25	クサイチゴ	52
イチョウ	26	クサギ	53
イヌザンショウ	27	クスノキ	54
イヌツゲ	28	クチナシ	55
イヌマキ	29	クヌギ	56
イロハモミジ	30	クリ	57
ウスノキ	31	クロバイ	58
ウツギ	32	クロモジ	59
ウバメガシ	33	ケヤキ	60
ウメ	34	コウヤボウキ	61
ウメモドキ	35	コシアブラ	62

コナラ	6	ズミ	88
コノテガシワ	64	センダン	89
コバノガマズミ	65	センリョウ	90
コバノミツバツツジ	66	ソヨゴ	91
コマツナギ	29	タイサンボク	92
サカキ	67	タカノツメ	62
ササ類	68	タチバナ	131
サザンカ	69	タチヤナギ	93
サトザクラ	40	タラノキ	94
サルトリイバラ	70	タラヨウ	95
サワフタギ	71	ダイオウグミ	96
サンゴジュ	72	チャノキ	97
サンシュユ	73	ツクバネウツギ	98
サンショウ	74	ツクバネガシ	99
ザイフリボク	75	トウネズミモチ	100
シモツケ	76	トベラ	101
シャシャンボ	77	ナツハゼ	102
ジャヤナギ	29	ナツフジ	103
シャリンバイ	78	ナワシログミ	104
シュロ	79	ナンキンハゼ	105
シラカシ	80	ナンテン	106
シリブカガシ	81	ニッケイ	13
シロシキブ	82	ヌルデ	107
シロミノカラタチバナ	83	ネジキ	108
ジンチョウゲ	84	ネズミサシ	109
スイカズラ	85	ネズミモチ	110
スギ	86	ネムノキ	111
スダチ	131	ノイバラ	112
スモモ	87	ノブドウ	113

ハッサク	130	ヤマコウバシ	143
ハリエンジュ	114	ヤマザクラ	144
ハンノキ	115	ヤマハギ	13
ヒイラギ	116	ヤマハゼ	145
ヒサカキ	117	ヤマフジ	146
ヒノキ	118	ヤマボウシ	147
ヒメウツギ	119	ヤマモモ	148
フジウツギ	120	ユキヤナギ	149
フユイチゴ	121	ユズ	131
ブルーベリー	122	ユズリハ	150
ボタンクサギ	123	ラクウショウ	151
マグワ	124	リキュウバイ	152
マダケ	125	リョウブ	153
マユミ	126	レンギョウ	152
マルバアオダモ	127	ロウバイ	154
マルバヤナギ	128	こもれび・虫えい	155
マンリョウ	129	こもれび・葉痕	161
ミツマタ	132	こもれび・冬芽	163
ミツバアケビ	133	森の灯台	165
ムラサキシキブ	134	・森が地球の生物の生命を守る	
メタセコイア	135		
モウソウチク	136	・木々たちの働き	166
モチツツジ	137	・森と林の違いって	167
ヤクシマオナガカエデ	138	・常緑樹と落葉樹	168
ヤツデ	139	・針葉樹と広葉樹	169
ヤブコウジ	140	・日本の文化は木の文化	170
ヤブツバキ	141	・どうして年輪があるの？	171
ヤマアジサイ	20	木々たちとともに	172
ヤマウルシ	142	裏表紙	

木々たちとの出あい

ならやまは標高百メートルほどの小山です。平城宮跡（へいじょうきゅうせき）の北の端（はし）に位置しています。一歩足を踏（ふ）み入れてください。のどかな昔の日本の風景を目のあたりにするでしょう。

鮮（あざ）やかに彩（いろ）どる若（わか）い木々を背に、古代米の稲穂（いなほ）の波、大和伝統野菜をはじめ昔から伝わる野菜の畑や花畑が広がります。麓（ふもと）にはハチの巣箱や薪（まき）を積む棚（たな）、淡水魚(たんすいぎょ)が育つ池。奈良・人と自然の会の仲間たちが、全ての生き物に愛情(あいじょう)を注ぎ、「ならやま里山林」は自然を取りもどしたのです。

かつて、里山は人々の生活の場でした。薪は燃料（ねんりょう）、山菜は食材でした。植林に力を注ぎ、緑のダムと呼（よ）ばれるほどの保水力で、人々を災害（さいがい）から守ったのです。そこには自然の不思議さ、大切さが実感できる営(いとな)みがありました。しかし、国土の半分近くを占（し）める里山の多くが放置されました。ならやまも例外ではありません。当会が2007年、初めて訪（おとず）れた時、コナラが大木になりすぎて、太陽の光をさえぎっていました。若い木は育たず、倒木（とうぼく）だらけ、麓は竹やぶに覆（おお）われ、ごみ捨(す)て場になっていました。

竹やぶや倒木の整理から始めました。山水の水路を引く人、シイタケ菌（きん）を打つ人、特用林産物の育成に挑(いど)む人。地道な活動は15年になります。平均年齢(ねんれい)70歳(さい)のボランティア会員は170人に達しました。人の手が入り、多くの生物と共に過（す）ごしてこそ里山です。

150種以上の木々が育ちました。健康チェックをし、次の世代につなぐ資料(しりょう)として1冊にまとめました。木々の説明のほかに、みなさんが里山を巡り、多くの木々たちとの出あいから、木々たちと私たちとは自然のなかまとして、広く深く調べるきっかけになるようなテーマを「森の灯台」として記しています。お読みください。自然と木々が持つ底力に驚(おどろ)かされますよ。

ならやまはだれのもの

奈良・人と自然の会が取り組む里山再生(さいせい)活動は、昔ながらの日本の風景を取りもどし、次の世代へ引きつぐことを最大の使命にしています。ならやまは歴史(れきし)的風土保全(ほぜん)地区です。きびしい条件(じょうけん)を守りながらの活動の場であり、自然との共生の学びの場でもあります。

半世紀(はんせいき)以上前までは薪(まき)を切り出し、枯れ枝(かれえだ)や落ち葉は肥料(ひりょう)にするため、家族ぐるみで山仕事に出たものです。白米に梅干(うめぼし)がひとつ、ささやかな日の丸弁当(べんとう)ですが、採(と)りたての焼きマツタケがついていたのも遠い昔のことになりました。いつも人の手が入り、里山は生き生きとしていたのです。

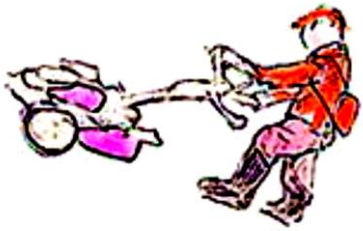
がらりと風景が変わったのは、いわゆる燃料革命(ねんりょうかくめい)です。昭和30年代の高度経済(こうどけいざい)成長期にエネルギー源(げん)の転かんが急速に進みました。薪は石炭に、肥料(ひりょう)は化学製品(せいひん)になり、人が山に入らなくなったのです。山林の荒廃(こうはい)と土地開発で、里山が次第に都市型(としがた)の住宅(じゅうたく)地へと風景を変えました。ならやまも例外ではありません。里山は放置され、周辺の開発が進みました。

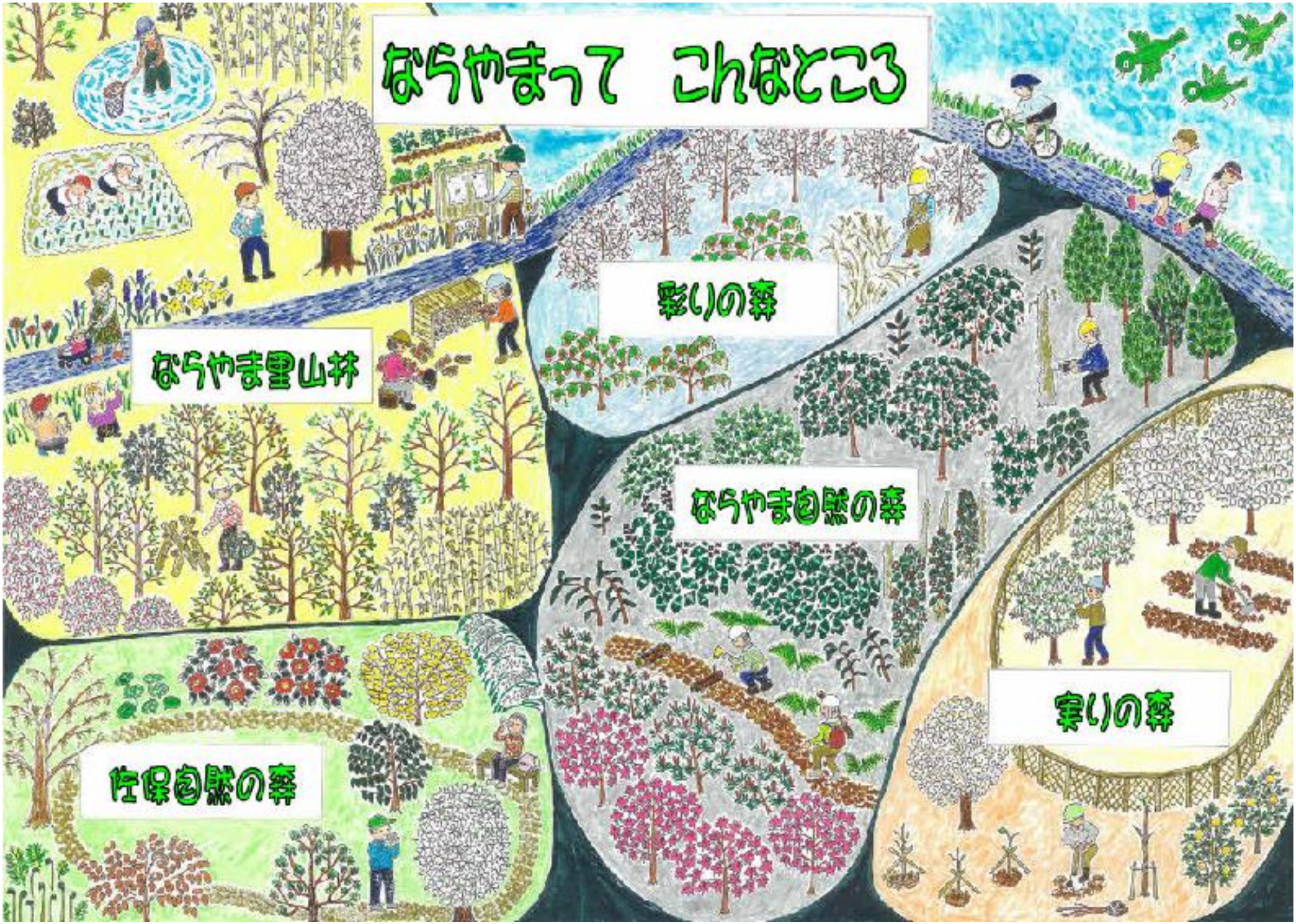
歴史遺産(れきしいさん)や文化資産(しさん)、それに周辺の自然環境(かんきょう)を守ろうという機運の高まりで、昭和41年に古都保存法(ことほぞんほう)が生まれ、乱(らん)開発に一定の歯止めがかかりました。しかし、荒(あ)れ果てた風景の整備(せいび)までは手が届かなかったようです。ならやまは奈良県の風致保全(ふうちほぜん)地区でもあります。県が景観整備(せいび)計画を発表し、整備活動のボランティアを募集(ぼしゅう)しました。当会が名乗り出て、次の3点を県と合意、里山再生(さいせい)計画に取り組んだのは平成19年4月です。①山は人の手を入れることで健全が保(たも)てる②「手入れ」と「活用」は一体③山林、

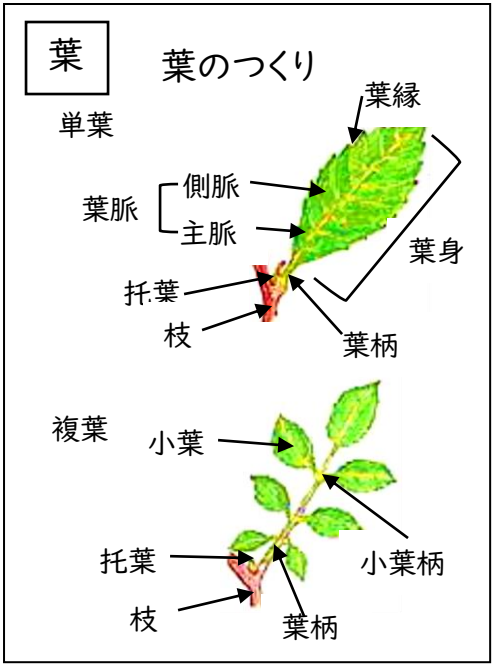
竹林、田畑跡（あと）、サイクリングロード周辺の全体を景観ととらえ、自然に調和した整備(せいび)に取り組んでいます。

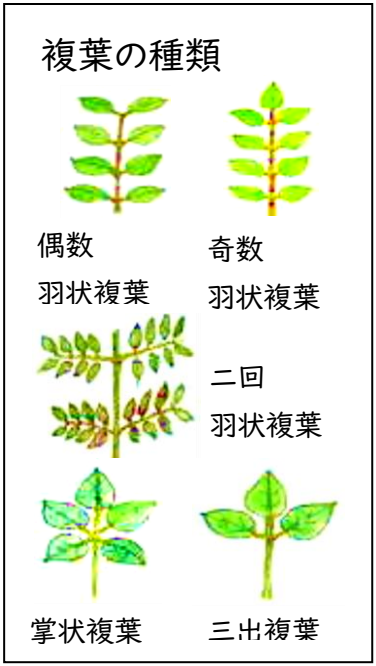
活動開始にあたり、木々、草花、昆虫（こんちゅう）、水生植物などの基礎調査（きそちょうさ）をしました。松林はほとんど枯(か)れ、主役を引きつぐはずのコナラやクヌギも多くは老木でした。常緑樹（じょうりょくじゅ）に覆（おお）われた暗い森になりつつありました。まず、山林への進入路を切り開き、山林の健康状態(じょうたい)を調べた後、人と共にすごす拠点(きょてん)を観察路で結びました。「学びの森」「遊びの広場」「鳥観（とりみ）の丘(おか)」「たけのこ平」イタケ栽培（さいばい）場」「薪(まき)作り場」などです。

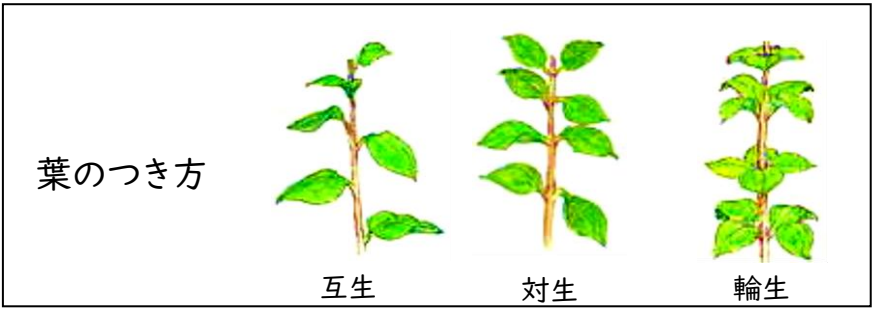
里地には田畑、草原、ため池を作り、水田をうるおす水路をひきました。全体が多様な生き物の住み家になりつつあります。里山が生まれ変わることで、生き物の世界を守ることを学びました。里山再生(さいせい)活動が人々の自然への関心を深め、環境(かんきょう)を大切にする気持を高めることになればと思います。この美しい自然は、次世代の子どもたちからの預(あず)かり物であることを忘(わす)れずに、努力を続けていきます。

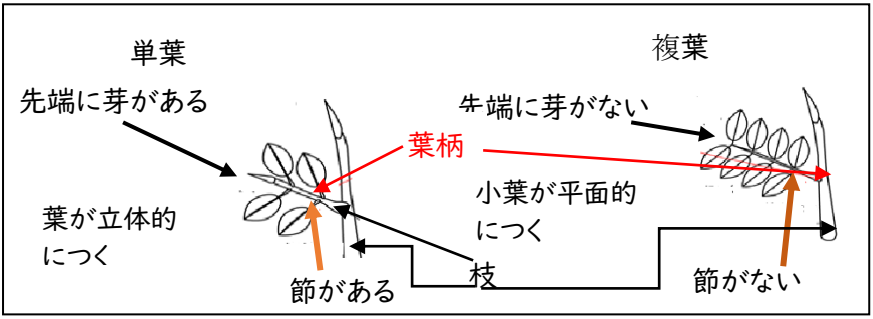



ならやまって　こんなところ
彩りの森
ならやま里山林
ならやま自然の森
実りの森
佐保自然の森









樹木図鑑作家・林将之さんは、「樹木は、葉や実がなくても葉っぱだけでも見分けることができるので、なるべく葉っぱで覚えたほうがよいですよ」と。

コナラ　(ブナ科)

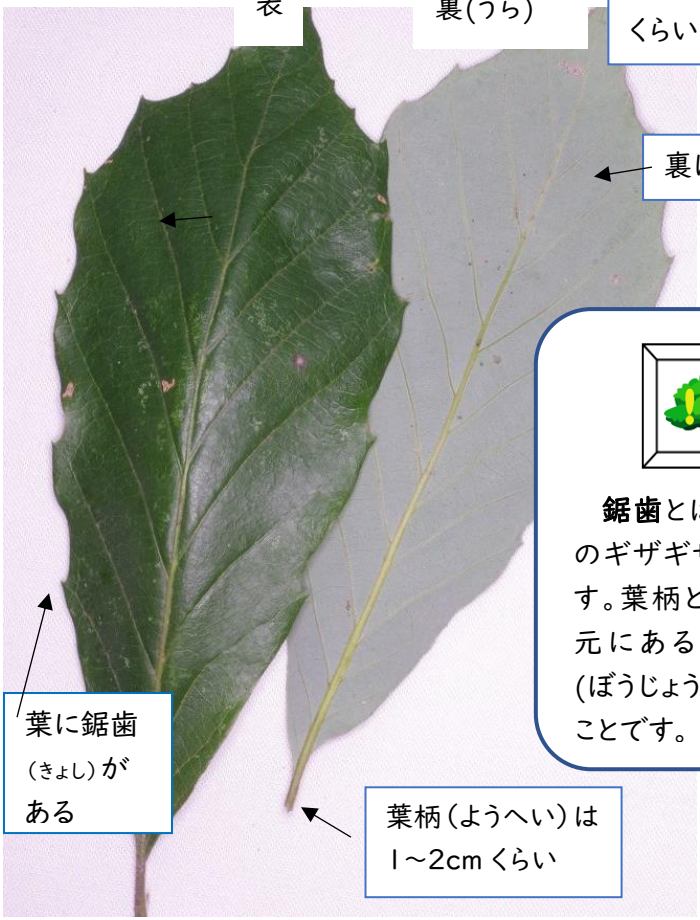
▲春のならやま里山林

ならやまを代表する木

ならやまには、あちらこちらにコナラが生えています。大人の両手でも、かかえられないほど太いのもあれば、細くて背(せ)の低いのもあります。太いのは樹齢(じゅれい)おそらく数十年、細いのは生育数年以内でしょう。特に私(わたし)たちがならやま里山林と呼(よ)んでいる所は、コナラがたくさん生えていて、気持ちのよい所です。

コナラの林の春は明るくて、日の光が地面までよく届(とど)きます。出始めの葉は黄緑色でやわらかいですが、夏には濃(こ)い緑色のかたくじょうぶな葉になり、日かげをつくってくれます。秋にはどんぐりを実らせ、晩秋(ばんしゅう)には美しい紅葉(こうよう)で山をいろどります。やがて落ち葉を降(ふ)り積もらせ、ふんわりやわらかい観察路ができます。

コナラの葉



鋸歯とは葉の周りのギザギザのことです。葉柄とは葉の根元にある細い棒状(ぼうじょう)の部分のことです。

コナラは日当たりのよい所に生えます。春から夏に葉を茂(しげ)らせ、秋には葉を落とす落葉樹(らくようじゅ)です。大きくなると、直径 60cm、高さ 20m ぐらいにもなります。木の幹(みき)はでこぼこで、灰色(はいいろ)と褐色(かっしょく)の縦(たて)じま模様(もよう)です。

新芽：春、暖(あたた)かくなると、新芽が出てきます。ふんわりと毛におおわれていて白っぽく見えます。そしてならやまは、だんだんと鮮(あざ)やかな林になります。

花：葉が出たらまもなく花が咲(さ)きます。雄(お)花と雌(め)花の両方が同じ木に咲きます。ひらひらとかんざしのような長い花は、雄花です。風にゆれて花粉(かふん)を飛ばします。雌花は短い棒(ぼう)のような形で、見つけるのは難(むずか)しいです。

夏の葉：日光をたっぷり浴び、山の水分や栄養分を吸(す)ってどんどん大きくなります。葉がたくさんしげり、暑い夏の日差しをさえぎってくれるので、木かげは涼(すず)しいです。

どんぐり：秋にはどんぐりが実ります。春に咲いた棒のような雌花が受粉(じゅふん)して大きくなり、どんぐりになりました。殻斗（かくと）は、つぶつぶの模様(もよう)です。

殻斗とはどんぐりの帽子(ぼうし)のことです。

紅葉(こうよう)：秋のならやまは、美しい紅葉でいろどられます。コナラの紅葉は真っ赤ではなくて、オレンジ色です。

落ち葉：晩秋(ばんしゅう)、落ち葉が降(ふ)り積もります。落ち葉には、太陽エネルギーがたくわえられているので、寒い冬でも里山はちょっと暖(あたた)かいのです。ここは生き物たちの、絶好(ぜっこう)の冬眠(とうみん)の場所です。

キノコの生えたコナラ：山の片(かた)すみに、枯(か)れたコナラがありました。キノコがびっしり生えていて、もうすぐたおれそうです。こうして木は土になります。

発芽：どんぐりから芽が出ました。小さなコナラの木が育っていきます。

虫こぶ：春のある日、観察路を歩いていると足元にピンク色の丸い物を見つけました。「コナラの木に小さなリンゴがなっている!?」と思ったら、虫こぶ・ナラメリンゴフシでした。

(P.157参照)

シイタケ栽培(さいばい)：

ならやまでは、コナラを利用してシイタケの原木栽培(さいばい)を行っています。11月下旬(げじゅん)にコナラを伐採(ばっさい)し、長さ1mの原木を作ります。

シイタケ菌(きん)を植え付ける植菌作業は、2 月下旬(げじゅん)にします。子どもたちを集めて、シイタケ菌打ちイベントをしています。

植菌したほだ木は林内でシイタケ菌の成長を待ちます。2度の夏が経過(けいか)したあとの秋、シイタケが顔を出し、その後3～4 年は秋から春にかけて収穫(しゅうかく)できます。

▲カシノナガキクイムシ

▲卵(たまご)と幼虫(ようちゅう)

ナラ枯(か)れ：ナラ枯れは、カシノナガキクイムシ（体長約5㎜）がもたらす病原菌によって、主にナラ類に起こる伝染病(でんせんびょう)です。1990 年ごろから全国各地でミズナラやコナラに被害(ひがい)が目立つようになり、ならやまでは2012 年からの5年間で、コナラのおよそ半数が枯れてしまいました。

枯れ木をそのまま放置しておくと、枝(えだ)が落ちたり、倒木(とうぼく)の危険(きけん)があります。そのため、一時は、枯れ木や倒木の処理(しょり)に追われる日々でした。処理した一部は薪（まき）の材料として有効(ゆうこう)利用しています。

薪(まき)づくり:

コナラの木はよい薪(まき)になります。活動を始めたころは、斧(おの)で割(わ)っていたので、とても力と技術(ぎじゅつ)のいる重労働でした。体力のある人にしかできず、一度に大量につくることはできませんでした。

今では薪割(まきわ)り機を用いるようになり、それほど力を入れなくても、次々につくることができるようになりました。ただし、山からふもとまで丸太を下ろして、機械にのせ、でき上がった薪を薪棚(だな)に並(なら)べるのは、やはり力仕事で疲れます。

しかし、きれいに積まれた薪棚は、里山の景観によくなじみます。また、薪で炊(た)いたご飯やおみそ汁(しる)は、とてもおいしいです。

植樹(しょくじゅ):

古い木を伐採(ばっさい)した後には植樹をします。コナラのどんぐりを植えて苗(なえ)を育て、その苗木を山に植えます。ならやまの親子イベントの時に、参加した親子に植えてもらっています。地面に穴(あな)をほり、苗を植え、土をかぶせ、支柱(しちゅう)をたててひもで結びます。植樹記念の名札に、自分の名前を書いてでき上がり。そして親子の笑顔・・・・。

その後、下草かりなどの手入れを続けています。若(わか)い木が育つことで、森が若返るのです。

アオキ　(アオキ科)

葉は濃(こ)い緑色ですが、枝(えだ)や幹(みき)まで緑色であることから名づけられたといわれています。日陰(ひかげ)を好む低木で、葉は1年中つやのある緑色です。野山のあちらこちらで見かけますし、庭先にもよく植えられています。陽の光が強く当たるところは、葉っぱが黒くなったりし、嫌(きら)います。押(お)し葉にしても葉が黒くなります。

冬に2㎝ほどの赤い実を付けよく目立ちます。鳥たちにとって餌(えさ)が少ない冬ですから、とくにヒヨドリたちはこの赤い実をよく食べます。そして種をフンといっしょに地面に落とします。植物は一度芽を出すと動くことができないので、鳥たちに種を運んでもらいます。アオキは乾燥(かんそう)に弱いので、少し湿(しめ)った育つのに適した所に落とされた種が芽生えて育ちます。 アオキは雄株(おかぶ)と雌株(めかぶ)が別々で、春先に黒紫色(くろむらさきいろ)の目立たない花を咲(さ)かせます。

実は秋ごろは緑色ですが冬には赤くなり、鳥たちに「もう食べられますよ」とサインを送ります。実の中には赤く熟(じゅく)さずにゆがんだ形の青い実が残っていて、中に虫がいることがあります。虫はそのまま初夏に羽が生え成虫になります。この寄生虫(きせいちゅう)が実と共に鳥に食べられてしまわないように「食べられませんよ！ おいしくないよ！」と実を赤く熟させず形をゆがめて鳥たちに知らせているのです。虫にとっては生きていく工夫をしているようです。

アオツヅラフジ　(ツヅラフジ科)

つる性(せい)の落葉樹(じゅ)です。夏に黄白色の目立たない小花がたくさん咲(さ)き、秋には藍色(あいいろ)の実ができます。実のつき方は少しブドウに似(に)ています。

有毒(ゆうどく)の植物ですが、実、茎(くき)、根は利尿(りにょう=おしっこを出やすくする)、鎮痛(ちんつう=痛くいた〉みを静める)の漢方薬の原料になります。

ニッケイ　(クスノキ科)

常緑(じょうりょく)の高木です。葉はクスノキとよく似ており、3本に分かれた太い葉脈(ようみゃく)が特徴(とくちょう)です。良い香りがします。

6月ごろに薄(うす)い黄緑色の目立たない花が咲き、10～12月には黒紫色(くろむらさきいろ)の小さい楕円形(だえんけい)の実ができます。樹皮(じゅひ)は、お菓子(かし)の香りつけの原料になります。

ヤマハギ　(マメ科)

落葉の半低木です。秋の七草で有名な萩(はぎ)はこの植物です。半低木とは低木と多年草の両方の性質(せいしつ)を持つという意味です。

花は紫紅色(しこうしょく)で枝(えだ)いっぱいにつき、7～10月まで咲き続けます。万葉集にもたくさんよまれています。近縁種(きんえんしゅ=近い親類)や園芸種がたくさんあり、庭園などにもよく植えられています。

アオモジ　(クスノキ科)

緑褐色(りょくかっしょく)の枝(えだ)から若々(わかわか)しい緑色の葉を茂(しげ)らせ、里山林をさわやかに彩(いろど)る美しい木です。同じ仲間のクロモジ（P.59）は黒い樹皮(じゅひ)なのですが、緑色(＝アオ) の樹皮(じゅひ)なのでアオモジと呼(よ)ばれます。(昔は緑も青も両方ともアオといっていました)

ならやまでは、2019 年ごろから若い木を見かけるようになりました。

里山整備(せいび)の結果、太陽の光が当たり、芽生えたものと思われます。 早春の2、3月ごろ、白い小さな花を、枝(えだ)の端(はし)から順に並(なら)ぶようにつけます。枝からぶら下がったつぼみから数個(こ)の花が出て、華(はな)やかです。くるりと曲がっている花柄(かへい)も面白いです。観察に訪(おとず)れた人たちから歓声(かんせい)があがります。

花が終わると葉は大きくなり、長さ 15cm ほどの、先のとがった細長い葉になります。クロモジ同様に葉から良い香(かお)りがします。

アカマツ（マツ科）

北海道を除(のぞ)く日本の全域（ぜんいき）で見られます。樹皮（じゅひ）が赤みがかっているのが名前の由来です。やせているけど、ちょっぴり養分があり、日当たりもよい土地に生えています。養分の豊（ゆたか）な山裾(やますそ)や中腹（ちゅうふく）ではなく、他の生き物と生存（せいぞん）競争が少なくてすむ尾根（おね）などに広がっています。

ならやま里山林一帯は半世紀以上前、アカマツが生(お)い茂(しげ)っていました。松林の落ち葉や枝(えだ)は燃料（ねんりょう）になりました。人の手で、ほどほどの日当たりを保（たも）ち、松林が守られてきました。しかし、燃料が木から電気やガスにかわり、人が里山から遠ざかるようになると、木々の枝葉が茂り林の中が暗くなり、落ち葉が堆積し養分も過多になり、次第にアカマツは姿(すがた)を消していきました。

2007年から里山林の再生(さいせい)に力を入れて取り組み、少しずつ松林が広がりつつあります。

葉は細くて柔（やわら）かく、2本1組、長さは7～12㎝ほど。目立ちませんが4～5月に花が咲(さ)きます。花は雌雄（しゆう）があり、雄花(お

ばな)は黄色く、若い枝(えだ)の下に複数(ふくすう)咲(さ)き、咲き終えるころ、赤紫色(あかむらさきいろ)の雌花(めばな)が日の当たる枝の先に1～3個(こ)咲きます。

松やにを多くふくんでいます。水のなかの保存性(ほぞんせい)が高く、杭(くい)などに利用されます。火が付くと強い炎(ほのお)がでるので、薪(まき)になります。建築材料(けんちくざいりょう)としては、梁(はり)や敷居(しきい)、床柱(とこばしら)に使用されています。

▲雄花

▲雌花

▲マツボックリ
(松笠=まつかさ)

マツタケは、アカマツの周りに菌(きん)たちの住む家「シロ」を作ります。マツタケはアカマツの根に寄生(きせい)する菌根菌(きんこんきん)とよばれる菌で、菌糸(きんし)が地上に伸(の)びてキノコになったものです。だから、マツが生(は)えていないところにはマツタケはありません。マツタケはマツが土から水分や養分(ようぶん)を吸収(きゅうしゅう)するのを助(たす)け、かわりにマツから炭水化物(たんすいかぶつ)をもらって生活しています。

アカメガシワ　(トウダイグサ科)

若葉(わかば)には赤い毛がたくさん生えています。食べ物を包むのにも使われることがあります。このことからアカメガシワと名がついたようです。赤い若葉を白い紙などにこすりつけると下から緑色が出てきます。紙の上には赤みが残ります。この赤い毛は、葉が大きくなると取れてゆきます。

葉についている長い柄(へい)は長さが違(ちが)っています。これは葉が重ならないようにし、日の光をできるだけたくさん受けようとする工夫です。木が若い間の葉は三つのとんがりがありますが、大きくなるとなくなります。同じ木なのですが、葉の形が違(ちが)うことがあります。葉は秋に黄色く変わり、やがて枝(えだ)から離(はな)れます。

この木の種は、土の中で 20～80年も眠(ねむ)り続けることができます。温度センサー機能(きのう)があり、太陽に照らされて地面の温度が上がると目覚めて芽を出すのです。そのため荒(あ)れ地や空(あき)地に真っ先に雑草(ざっそう)のように芽を出し、早く成長します。ならやまでも木を切ったあとの土地にたくさん芽生えてきました。6～7 月にかけて小さな淡黄色(たんおうしょく)の花をたくさんつけます。

アキグミ　(グミ科)

かつて、ならやまの実りの森に、数本のかなり大きい木がありましたが、この区域(くいき)を整理する時にまちがって切り倒(たお)されてしまい、がっかりしていました。しかし、うれしいことに、そのあとに数株(かぶ)の幼木(ようぼく)が生えてきたので大切に保護(ほご)しています。

落葉低木で、高さは2～3m程度(ていど)。葉の表面は白っぽい緑色、裏面(りめん)は銀白色です。葉の形は少し長い楕(だ)円形で、先は尖(とが)っています。4～5月ごろに白い小さな花が咲(さ)き、9～10月ごろに赤くて丸い、直径6～8mm くらいの実ができます。ほかのグミは、春（ナワシログミ）や夏（トウグミ）に実りますが、アキグミは秋に実るのでアキグミといいます。少し黒ずむくらいに完全に熟(じゅく)すと食べられます。少し渋(しぶ)みがありますが、野生の味として楽しめます。果実酒にも利用できます。

▲熟しつつある実

▲保護している幼木

アケビ　(アケビ科)

落葉性(せい)のつる植物で、他の樹木(じゅもく)などに巻(ま)きつき、はい上がります。葉は掌状（しょうじょう＝手の平形）複葉(ふくよう)で、小葉は5枚の長楕円形(ちょうだえんけい)または長楕円状(ちょうだえんじょう)、倒卵形（とうらんけい＝卵〈たまご〉の逆立〈さかだ〉ち形）です。小葉の長さは3～6cm、幅(はば)は 1.5～3cm で先は少しくぼんでいます。

雌雄同株(しゆうどうしゅ)で、花は白色または淡(あわ)い紅色(べにいろ)で4～5月に咲(さ)きます。雌花(めばな)は大きく、雄花(おばな)は小さくて数が多いです。

実ができ、10月に熟(じゅく)します。実は楕円ないし長楕円形、長さは5～10cm、径3～4cm、赤紫色(あかむらさきいろ)です。熟すと縦(たて)に割(わ)れ、中のゼリー状の果肉が見えるようになります。種子は果肉に包まれており、果肉はとても甘(あま)く、食べられます。

アケビのつるは篭（かご）の材料になり、民芸品的な「あけびかご」として珍重(ちんちょう)されています。

アケビにはアケビコノハというガの幼虫(ようちゅう)がよくいますが、野鳥がこわがる姿(すがた)に擬態（ぎたい＝似せること）しています。

▲アケビコノハの幼虫

アジサイ（ユキノシタ科）

ヤマアジサイ

アジサイ

ガクアジサイ

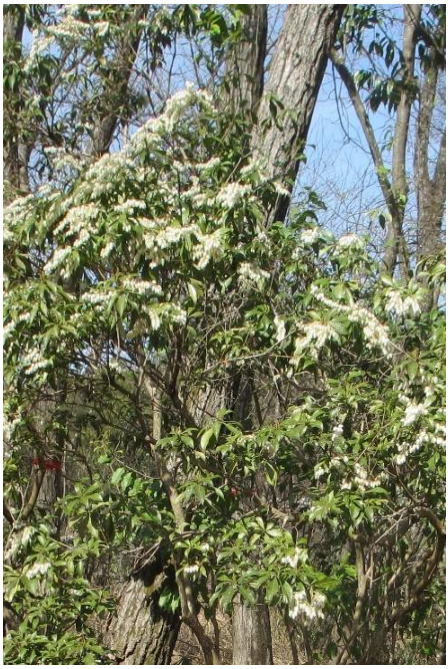
ならやまのアジサイは、すべてさし木でふやしたものです。もともと日本にはアジサイは自生(じせい)していません。野生(やせい)のガクアジサイの両性花(りょうせいか)が、すべて装飾花(そうしょくか)に変化(へんか)したのを人工的(じんこうてき)に栽培(さいばい)したものです。

手まりのような花の花びらに見えるのは、すべてガクが発達(はったつ)したものです。ですから実も種(たね)もできません。ふやすのはさし木と株(かぶ)　分けです。

落葉樹(らくようじゅ)で芽(め)だけで冬をこし、春に葉をのばし6～7月に花を咲(さ)かせます。葉は対生(たいせい)で幅(はば)が広い楕円形(だえんけい)ですが、ヤマアジサイは少し細長いです。葉と根に毒(どく)があります。

土の酸性度(さんせいど)によって、酸性が強いと青く、反対にアルカリ性が強いと赤く、花の色が変(か)わるといわれますが、急(きゅう)には変わらず、少し赤や青がかったぼけた色になります。

アセビ　(ツツジ科)



万葉集にも歌われているほど、古くから親しまれている花木です。公園や庭園ではサツキやツツジのように植えこみに使われることも多く、ならやまでも普通(ふつう)に見られます。

早春、枝(えだ)先にスズランに似(に)た白っぽい花をいっぱい咲(さ)かせてくれます。春を早めに感じたい人におすすめです。高さ3mほどになる常緑低木(じょうりょくていぼく)です。葉は枝先に固まってついているように見えますが互生(ごせい)です。濃(こ)い緑色でつやがあります。新葉は赤みを帯び、花が終わった後も木がにぎわいます。

葉や茎(くき)には強い毒性(どくせい)があり、馬が食べると酔(よ)ったような足取りになることから漢字で「馬酔木」という字があてられました。昔は葉の煮汁(にじる)を農作物の殺虫剤(さっちゅうざい)として利用してきました。奈良公園では、鹿がこの木を食べないため、あちらこちらで群生しています。浄瑠璃寺(じょうるりじ＝木津川市加茂町西小札場)とともにアセビの名所です。

アベマキ（ブナ科）

アベとは岡山地方の方言でアバタ(病気のため顔の皮膚〈ひふ〉に残ったぶつぶつ)のこと。樹皮(じゅひ)がアバタのようにボコボコしていて、よく薪(まき)に使われたのでアベマキの名がつきました。樹皮は弾力(だんりょく)のあるコルク層(そう)でできているので、別名コルククヌギともいわれています。

クヌギの同じ仲間で、葉やドングリの形など見わけがつかないほどそっくりです。比較的(ひかくてき)暖(あたた)かいところが好きで、関東には少なく、西日本に多い木です。

ならやまでクヌギと思われていた木にもアベマキがまざっています。

特徴(とくちょう)は樹皮のほかに、葉の裏(うら)側に細かい毛が生(は)えていることです。特に落ち葉となった枯(か)れ葉の裏は、そのため白っぽさが目立ちます。ドングリの頭の先のとがった部分が細くて短いのがクヌギ、太くて長いのがアベマキで、二つならべてみると違(ちが)いがよくわかります。

アラカシ（ブナ科）

庭木や公園によく植えられ、身近な山野でも見かけます。ドングリのできる木です。あたたかい土地を好み、関東地方より関西地方に多いようです。

ならやまでは、鳥がドングリを運んできたのか観察路ぞいの所どころで見かけます。枝(えだ)はまばらに出るので「荒(あ)れたカシ」からアラカシとなったようです。

シラカシとおなじ仲間で似(に)ていますが、アラカシの葉のうらがわには細かい毛があり、ほこりがついたように白っぽくみえます。シラカシには毛はなく、淡(あわ)い緑色をしています。逆(ぎゃく)に、ドングリの頭の部分はシラカシの方が少し白っぽくなっています。アラカシはつるりとした感じで見分けがつきます。どちらのドングリもしぶみが強く食べられません。鹿は両方とも大好物です。

シラカシとの共通点は、いずれも常緑樹（じょうりょくじゅ）であること。風が花粉(かふん)を運ぶ「風媒花（ふうばいか）」であること。それに、ドングリの花は春に咲(さ)き、秋にドングリがなる「１年なり」であることがあげられます。どちらも花粉がうまく風に運ばれるように、花は下向きに垂(た)れる傾向(けいこう)にあります。

イソノキ　(クロウメモドキ科)

ならやまでは数の少ない木です。湿(しめ)ったところが好きなので、池のまわりなどで見つかります。

海岸などの磯（いそ）にはえていることが多いので、「磯の木」と名前がついたといわれています。

木の高さは 3mで、落葉樹(らくようじゅ)です。葉の長さは 6～12cm、葉の先は短くとがっています。表には毛がなく、裏側(うらがわ)に葉脈(ようみゃく)がつき出しています。

6～7月に枝(えだ)の先の方に、黄色の花が 10～20 個(こ)ほどかたまってつきます。実は、はじめは赤色、そのあとで黒色になります。食べられません。

－葉のつきかたを見てください。とてもおもしろいですよ。－

並(なら)び方が右→右→左→左なのです。

まるでスキップしているようです。

イチジク　（クワ科）

アラビアが原産の木。1万年も前から栽培（さいばい）され、南ヨーロッパに広がりました。日本には江戸（えど）時代に入ってきました。

高さ3～10mぐらいの落葉高木。葉は互生（ごせい）で長さ15～30cm、3～5か所の切れ込（こ）みがあり、ざらざらしています。葉や枝（えだ）を傷（きず）つけると白い汁（しる）が出てきます。

夏のはじめ、葉のつけ根にツボ形の実がつきます。これを花嚢（かのう）といい、実のなかにたくさんの花が入っています。花は実のなかで咲（さ）くのです。

皆さんが食べているところは、花がついている台です。花托（かたく）といいます。夏から秋にかけて、青い実が濃（こ）い赤紫色(あかむらさきいろ)になり、さわってみて柔（やわ）らかくなっていたらOKです。生で食べるだけでなく、ジャムにしたり乾燥（かんそう）させたりしてお菓子（かし）や料理にも使われています。

▲葉

▲若い果実

▲熟した果実

イチジクの枝は根が出やすいので、挿（さ）し木で増（ふ）やせます。
みなさんも植木鉢（ばち）で育ててみませんか。

イチョウ（イチョウ科）

公園や学校や並木道（なみきみち）で見かける木です。秋に葉が明るい黄色になる落葉樹（らくようじゅ）です。30m にもなり、1000 年も長生きする木もあります。秋に直径3㎝くらいの黄色の実がなります。銀杏（ぎんなん）といって、中の種は食用になります。

幹(みき)と枝(えだ)を観察しましょう。幹は灰色(はいいろ)、デコボコで、たての筋(すじ)があります。

枝には、長さ5cm ぐらいの短い枝が、いくつもついています。葉や実はこの短い枝につきます。

次に葉を観察します。扇子(せんす)のようですね。この形はイチョウだけのものです。葉にはすじ(葉脈〈ようみゃく〉)が平行になっています。

イチョウには、実のなる雌木（めぎ）と、実がつかない雄木（おぎ）とがあります。

イヌザンショウ（ミカン科）

川原や雑木林(ぞうきばやし)、特に伐採跡(ばっさいあと)などで見られる高さ3mほどの落葉低木です。姿(すがた)や形はサンショウにそっくりですが、サンショウに比(くら)べて香りが悪く、役に立たないということから、植物であまり役に立たないものにつける「イヌ」という言葉が被(かぶ)せられ、イヌザンショウと名づけられました。

葉は奇数羽状複葉(きすううじょうふくよう)でサンショウに似(に)ていますが、やや大きいのが一般的(いっぱんてき)です。サンショウと同じように枝(えだ)にはトゲがあります。サンショウのトゲは向かい合ってつく対生ですが、イヌザンショウは互(たが)い違(ちが)いにつくため容易(よういに見分けられます。

花は小さな黄緑色で、サンショウと似ていますが、開花時期が違います。サンショウが4月ごろ開花するのに対し、イヌザンショウは8月ごろ開花します。

ミカン科の樹木(じゅもく)といえば、アゲハチョウの仲間のえさとなる木です。イヌザンショウを見つけやすい伐採跡は、カラスザンショウやサンショウも生えやすく、アゲハチョウの幼虫(ようちゅう)を捕(つか)まえることや、幼虫のえさを探(さが)したりしやすい場所といえます。

イヌツゲ（モチノキ科）

あまり大きくならず日当たりが悪くても生きられる木です。高さは5mほどにもなりますが、刈(か)り込(こ)んでも良く枝分(えだわ)かれし枝葉(えだは)が茂(しげ)るので、庭や垣根(かきね)など形を整えてよく見かけます。ならやまではあちこちで見かけます。

葉は小さく 1～3cmで、縁(ふち)は少しゆったりとしたぎざぎざがあります。葉はいつも緑色です、真ん中の筋(すじ)は明るい色でよく目立ちますが、葉の裏(うら)はほとんど筋が見えません。また雄木(おぎ)と雌木(めぎ)があり、6～7月にかけて黄白色の小さな花をつけ、秋に7㎜ほどの黒い果実をつけます。葉のつき方は互生（ごせい）です。よく似(に)た木で「ツゲ」がありますが、そちらの葉は対生で、縁(ふち)がなめらかなので区別できます。ツゲ科で別の種類です。

「イヌ」という言葉について：植物の場合ちょっと見るとよく似(に)ているのですが 本物より少し何かが劣(おと)る時に使われます。イヌツゲはツゲより木の質(しつ)が柔(やわ)らかいのです。

イヌザクラ、イヌザンショウ、イヌビワなどと使われています。本物のサクラ、サンショウ、ビワそれぞれとどんな違(ちが)いがあるのかな？

イヌマキ　(マキ科)

針葉樹(しんようじゅ)の仲間で常緑(じょうりょく)の高木です。

葉は針葉樹とはいえ幅(はば)の広いのが特徴(とくちょう)です。長さ10～15cm、幅(はば)約1cm、白っぽい緑色です。 庭木や生け垣(がき)にもよく用いられています。

コマツナギ　(マメ科)

落葉低木で、ハギに似(に)た姿(すがた)や花からクサハギなどの別名があります。花は薄(うす)いピンク色で、開花期は7～8月です。

名前の由来は、コマ（駒＝馬）をつなぎ止められるほどしっかりした根があるからとか、馬はこの葉が好きで、食べだすとその場所を離(はな)れないから、などという説があります。

ジャヤナギ　(ヤナギ科)

落葉高木で、雌雄異株(しゆういしゅ)です。わが国では雌株(めかぶ)しか見つかっていません。高さ 5～10m、幹(みき)の直径は 25～30cmです。 葉は互生(ごせい)で細い楕円形(だえんけい)です。鋸歯(きょし)があり、先端(せんたん)はとがっています。 長さ10～16cm、幅1～2.5cmです。3月に短い穂(ほ)のような花が咲(さ)きます。

名前を漢字で表すと「蛇柳(じゃやなぎ)」ですが、奇妙(きみょう)な名前です。和歌山県の高野山に伝わる伝説に由来する名前だそうです。

イロハモミジ（ムクロジ科）

葉には5～7つの切れこみがあり、7つのものが多く”いろはにほへと”と数えるとピッタリあうのでイロハモミジと名がつきました。モミジとは赤色をもみだすという意味で、秋に紅葉（こうよう）するカエデ属(ぞく)の木の名前に多くつけられます。葉の形がカエルの手に似（に）ているのでイロハカエデとも呼(よ)ばれます。カエデ属の木のほとんどは葉を対生につけますが、葉の縁(ふち)の鋸歯（きょし）にそれぞれ特徴（とくちょう）があります。イロハモミジの葉の縁をよく見ると、あらい鋸歯の縁にさらにこまかい鋸歯がつく重鋸歯(じゅうきょし)と呼(よ)ばれる形になっています。

春になると黄緑色の花びら５枚(まい)の小さな花を枝先(えださき)に10～20個(こ)つけ、夏にはプロペラ形の実をつけます。イロハモミジの実の翼（つばさ）は水平にちかい形になるのが特徴（とくちょう）です。

▲イロハモミジの花

▲プロペラ形の実

同じカエデ属でも種類によってプロペラの翼の角度がちがうので観察してみてください。プロペラは落ちるとき、そのままではうまく回転してくれません。半分にわるとそれぞれがうまく回転して落ちてくれるので一度ためしてみてください。

ウスノキ　(ツツジ科)

高さ 30cm～1mくらいの落葉低木です。大きな木の間の隙間(すきま)や、観察路沿(ぞ)いの、こもれびの当たるような所に生えています。

春に黄緑色で楕円形(だえんけい)の、長さ 5cm ほどの葉をのばします。花は鐘形(かねがた)で 5mm ぐらい、葉の下に隠(かく)れるように枝(えだ)から垂(た)れ下がって咲(さ)きます。見つけにくいので、腰(こし)をかがめて、のぞきながら探(さが)してください。花の色は少し緑色がかった白で、部分的にほんのり赤味を帯びます。

夏には赤い実がなります。形は球状(きゅうじょう＝ボールのように丸い)というより、五角柱といった方がいいでしょう。下を向いていた花は、いつの間にか上を向いて実になっています。実の先がくぼんでいます。このユニークな形から臼(うす)の木と名づけられました。食べてみると、甘(あま)くも、酸(す)っぱくもなく、おいしくありませんでした。そんなにたくさんなる実ではないので、見るだけにしておいたほうがいいですね。 枝も葉も、花も実も、何もかも小さくてかわいい木です。

ウツギ　(アジサイ科)

ウツギの漢字は「空木(うつぎ)」です。枝(えだ)が中空（ちゅうくう=くりぬいたように空っぽ）になっているので、この名前がついています。

「卯(う)の花」という別の呼(よ)び名があります。昔のこよみ、太陰暦(たいいんれき)の4月は卯月(うづき)といいますが、このころに花が咲(さ)くからです。太陰暦の4月は、今のこよみ、太陽暦(たいようれき)の5月中旬(ちゅうじゅん)から6月上旬(じょうじゅん)ごろに当たります。白い小さな花ですが、枝いっぱいに咲き、みごとです。

「♪卯の花の匂(にお)う垣根(かきね)に　時鳥（ほととぎす）早も来(き)鳴きて…♪」という童謡(どうよう)『夏は来ぬ』でよく知られています。

落葉低木です。高さは2mくらいになります。ウツギには近縁(きんえん)のなかまや園芸種がたくさんあり、庭園などでもよく見かけます。

ウバメガシ（ブナ科）

褐色（かっしょく）をおびた若葉(わかば)が老婆（ろうば＝年をとった女性〈じょせい〉）という意味の姥（うば）の目に似(に)ているからウバメガシと名づけられたとか、馬の目に似ているからウマメガシからウバメガシとなったとかいわれています。

材は水につけると沈(しず)むくらい密度(みつど)が高くてかたく、良質(りょうしつ)な炭を作るのに適(てき)しており、最高級の備長炭（びんちょうたん）の材料になっています。

ドングリの木の仲間にはコナラやクヌギのように冬に葉を落とす落葉樹（らくようじゅ）もありますが、ウバメガシは冬でも緑の葉をつける常緑樹（じょうりょくじゅ）で、角がりの頭のように刈(か)り込(こ)まれても耐（た）えるので、車道の植え込（うえこ）みや生垣（いけがき）に好んで使われます。

ウバメガシのドングリは渡（わた）り鳥の「オシドリ」の大好物です。ならやま近くのウワナベ古墳(こふん)には、毎年冬場このウバメガシのドングリを目当てにオシドリがつがいでやってきます。

ウメ　(バラ科)

「ウメ」は、バラ科の落葉小高木で、5mほどの木になります。寒い冬、ほかの木々がまだ眠(ねむ)っているとき花を咲(さ)かせます。香りもたいへんよいので、昔から歌によまれたり絵に描(か)かれています。ウメの木は、中国から渡(わた)ってきたもので、古くから栽培(さいばい)され、500種以上の品種があるといわれています。

ウメの花は、白、ピンク、赤色があり、1～3cmほどの大きさで、5枚の花びらがあります。花は一節に 1～2個(こ)つき、1月の終わりごろから咲き始めて、3月にかけて咲きます。

ウメの葉は、花が咲いた後で出てきます。長さ4～8cm、幅3～6cm ほどで、枝(えだ)から互(たが)い違(ちが)いにつきます。卵形(たまごがた)で葉の先が細く突(つ)き出し、縁(ふち)には細かな鋸歯（きょし＝ギザギザ）があります。花のあと青い実ができて、6 月ごろに黄色くうれます。実は、2～3㎝のほぼ球形で、実の片側に浅い溝(みぞ)があります。

ウメの実は熟(じゅく)してもすっぱくてそのままでは食べられません。梅干しや梅ジュースなどに加工されますが、調味料や薬としても古くから利用されてきました。梅の実の生産量は、和歌山県が日本一ですが、奈良県も3 番目に多い県になっています。

ウメモドキ（モチノキ科）

「もどき」というのは、何かに似(に)ているという意味。ウメモドキという名前は葉がウメに似ているからとも、花は小さいがウメの花に似ているからともいわれています。

花はごく薄(うす)いピンク色で5～7月ごろに咲(さ)きます。9月ごろから実が赤く色づきます。葉は12月ごろに散りますが、赤い実はそのまま枝(えだ)に残るので、冬枯(ふゆが)れの林でよく目立ちます。

落葉低木です。高さは2～3m、雌雄異株(しゆういしゅ)です。葉は互生(ごせい)、長さは3～8cm、幅(はば)1.5～3cmの楕円形(だえんけい)で、先端(せんたん)はとがり、縁(ふち)には細かい鋸歯(きょし)があります。

▲花

▲夏の姿
（葉と未熟〈みじゅく〉の実）

▲秋の姿(すがた)
（実と葉）

▲冬の姿（実だけ）

ウワミズザクラ（バラ科）

日本人にとってサクラはとても人気のある木で各地にたくさん植えられています。花びらが5枚でほとんど下を向いて咲(さ)きます。ところがウワミズザクラは白い花をブラシ状(じょう)に多数つけるという大きく違(ちが)った形をしています。また花が咲く時期が他のサクラより遅(おそ)く5月ごろになります。

葉っぱがそろって開きその後にこの変わった形をした花を咲かせます。この「ならやま」にもたくさんあります。これも桜(さくら)だ！ とわかって注意して見ることが大切です。ぜひ探(さが)してください。実が木の下に落ち、芽を出しても親木の回りでは育たないので、やがて枯(か)れてしまいます。鳥が食べフンと一緒(いっしょ)に地面に落とします。（鳥散布〈とりさんぷ〉といいます）親木から離(はな)れたところで芽を出せば育ちます。

実は、若(わか)い内に木から取れば食べられますが、黒く熟(じゅく)すとにがくなり、おいしくありません。実が実るほどにがみがふえる珍(めずら)しい木の一つです。暗い林の中でもすこしずつ大きくなりますが日の光を十分に受けることができるようになると、とてもはやく大きくなります。

エゴノキ (エゴノキ科)

5～6月にかけて、釣鐘型(つりがねがた)の白い花をびっしりつけます。ラグビーボールに似(に)た青い実は、長い柄(え)をつけて枝(えだ)いっぱいにぶら下がります。美しい花とともに独特(どくとく)の特徴(とくちょう)を持つ木で人気があります。

卵形(たまごがた)に近い葉が互生(ごせい)し、根元から「ひこばえ」という萌芽(ほうが)を出すことが多く、幹(みき)は黒っぽいのが特徴。果皮には、のどを刺激(しげき)するサポニンという毒(どく)を含(ふく)み、食べると胃腸障害(いちょうしょうがい)を起こすことがあります。実をかむと、えぐいのでエゴノキという名がついたそうです。

えぐみは虫も鳥も嫌(きら)いますが、鳥のヤマガラだけは上手に食べます。実をついばんで皮をむき、実を割(わ)るのです。秋に熟(じゅく)したとき、貯食(ちょしょく)行動を見せます。冬に備(そな)えて枯葉(かれは)の下などにため込(こ)むのです。食べ残されたり、隠(かく)し場所を忘(わす)れられたりすると、春に実の中から芽を出します。ですから、エゴノキの赤ちゃんは、ヤマガラの手伝いで誕生(たんじょう)するともいえます。

サポニンを苦にしない虫もいます。若芽(わかめ)に寄生(きせい)するアブラムシです。バナナの房(ふさ)のような虫こぶを作ります。エゴノネコアシともいい、中にエゴノネコアシアブラムシがいるのです。

▲虫こぶ

エノキ　(ニレ科)

落葉高木で、大きいのは高さ20m、幹(みき)の直径1mにもなります。神社や寺の境内(けいだい)、公園、山野で普通(ふつう)に見かけます。建築材(けんちくざい)としても知られ、古くから人の生活に近い木です。ならやまではベースキャンプの畑の真ん中で、いばっています。

葉は長さ6cmぐらいの卵形(たまごがた) 。縁(ふち)にはノコギリのようなギザギザがあります。新芽が伸(の)びだす4月ごろ、葉のつけ根に小さな緑色の花が咲(さ)きます。高い木の上なので、めったに見ることはないでしょう。丸い実の直径は5～6mm。秋、褐色(かっしょく)に色づきます。口にすると、ちょっぴり甘(あま)いです。

昆虫(こんちゅう)たちには、住まいや食料を与(あた)えてくれる大切な木です。日本の国蝶(こくちょう＝国を代表する蝶)、オオムラサキの幼虫(ようちゅう)もエノキで育つのです。ならやまには残念ながらいません。かわりに、ゴマダラチョウやタマムシが住みついています。

▲実

▼花

サクラのなかま(バラ科)

サクラの仲間の特徴(とくちょう)は、花びらの先が少し切れ込(こ)みへこんでいること、花柄(かへい)が長いこと、一つの花芽から出る花数が多いことで、開花の時期には同じバラ科のウメやモモとも区別ができます。

その他の特徴としては、落葉広葉樹(らくようこうようじゅ)であり、鋸歯(きょし)のある互生(ごせい)の葉は秋に紅葉(こうよう)すること、葉柄(ようへい)にイボ状(じょう)の花外蜜腺（かがいみつせん）が一対あることなどがあげられます。花外蜜腺とは花以外で蜜（みつ）をだすところで、それによりアリをおびき寄(よ)せ、アブラムシなどの害虫から葉を守ってもらう作戦を取っています。

「ならやま」では、他のページで紹介(しょうかい)されたウワミズザクラ、カスミザクラ、ヤマザクラ以外にもたくさんな種類のサクラが見られます。こちらではその中からカンヒザクラ、オオシマザクラ、サトザクラを紹介します。

カンヒザクラは、その名の通り 1～3月ごろのまだ寒い時期に赤みの強い緋色（ひいろ）の花を咲(さ)かせます。他のサクラのように平らに開くことはなく、つぼみのままのように見える花が下向きに咲きます。散るときは他のサクラのように花弁(かべん)がバラバラに散るのではなく、ガクといっしょに花ごと散る、サクラの仲間のなかでも変わりだねです。ガクの色も花びらと同じで赤みをおびています。雄(お)しべが長いことも特徴です。葉の両面、葉の柄(え)、花の柄に毛はありません。

オオシマザクラは、校庭などによく植えられているソメイヨシノと同じく4月上旬(じょうじゅん)に、大形の多少白っぽい花を咲かせます。もともとは伊豆(いず)大島に分布(ぶんぷ)していたサクラでこの名がつきました。

サトザクラはじめ、このオオシマザクラを原種として多くの栽培種(さいばいしゅ)が作られました。ソメイヨシノもその一つで、オオシマザクラとエドヒガンを掛(か)け合わせて江戸(えど)時代に作られたサクラです。

ソメイヨシノやエドヒガンの花柄(かへい)、葉柄には毛がありますが、オオシマザクラには毛がありません。葉の両面も無毛で食用に適(てき)し塩漬(しおづ)けにした葉は桜餅(さくらもち)を包む葉に使われます。

サトザクラという品種のサクラはありません。オオシマザクラを中心にオオヤマザクラ、ヤマザクラ、カスミザクラなどが交雑(こうざつ)してできた栽培(さいばい)品種の総称(そうしょう)です。オオシマザクラの性質(せいしつ)を引きつぐものが多くそのことが特徴(とくちょう)となっています。全体的な特徴としては、葉はおおむねオオシマザクラに似(に)ていますが、葉の裏(うら)が白みを帯びるものが多いです。八重咲(やえざき)のものはヤエザクラとも呼(よ)ばれ、花の時期はソメイヨシノよりも遅(おそ)く4月後半です。

「ならやま」のベースキャンプにあるサトザクラは一重で開花時期も 4月の初めです。オオシマザクラに近い品種ですが、細かい点（花のガクや花柄の付け根にあるホウの形など）ではオオシマザクラと異(こと)なり、園芸用に改良された栽培品種(さいばいひんしゅ)と思われます。

オニグルミ　(クルミ科)

日本に古くからある木で、実は栄養分がたくさんあります。皆(みな)さんの知っているカシグルミ(菓子胡桃〈かしぐるみ〉のこと)より小さく、とても堅(かた)い殻(から)につつまれています。

春の終わりに花が咲(さ)きます。雄(お)花はヒモのような形でぶら下がり、赤い雌(め)花は雄花の上の方で花粉(かふん)を待ち受けています。秋に毛のある緑色の皮を付けた実がなります。熟(じゅく)すと下に落ち、

黒くなった皮をめくるとクルミの形をした実がでてきます。野ネズミやリスが大好きです。持ち帰って冬の食糧(しょくりょう)にします。ほとんど食べられてしまうのですが、埋(う)めた場所を忘(わす)れたり食べ残したりすると、そこから春に芽を出して新しい木が育ちます。川の近くで育つと実は水に流され新しい土地をみつけます。湿(しめ)ったところが好きで、光が当たると早く成長します。光には敏感(びんかん)で、土の深いところからでも芽を出します。

葉は奇数羽状複葉（きすううじょうふくよう）といって、一枚(まい)の葉は左右にある葉っぱ 5～9枚(まい)と先っぽの1枚からできています。葉の裏(うら)は毛がありザラザラしています。

冬には葉を落とす落葉樹(らくようじゅ)です。葉の落ちた跡(あと)は何に見えるかな？ 葉痕（ようこん）のページを見てください。(P.161)

カキノキ　(カキノキ科)

秋の代表的な果物の柿(カキ)の実がなる木です。日本各地で古くから果樹(かじゅ)として植えられています。奈良県は日本でも柿の生産量の多いところで、「刀根早生（とねわせ）」「平核無（ひらたねなし）」「富有(ふゆう)」などの品種が有名です。

品種はたいへん多いですが、甘柿(あまがき)と渋柿(しぶがき)があります。甘柿はそのまま食べられますが、渋柿は渋抜（しぶぬ）きをしたり干し柿にしたりして甘くして食べます。

落葉樹(らくようじゅ)で5～15mの高い木になります。葉は楕円形(だえんけい)で鋸歯(きょし)がなく、厚(あつ)めで光沢(こうたく)があります。5月の終わりから6月にかけて白黄色の花をつけ、秋になると実が柿色に熟(じゅく)します。

花は雌(め)花と雄(お)花があります。雌花は一つずつはなれてつきます。雄花はたくさん集まってつきます。雌花をよく見ると、めしべの先が四つに分かれています。これは柿の実の先端(せんたん)に残っています。

▲冬芽

▲雄花

▲雌花

あぶない！ 木登りはダメ

カキノキは大木になります。太い枝(えだ)でも折れやすいので、決して登らないでください。

カクレミノ（ウコギ科）

鳥が実を運んできたのか、ならやま里山林内の観察路沿(ぞ)いでポツリポツリと見かけます。冬でも青々とした葉をつける常緑樹（じょうりょくじゅ）ですが、古い葉は世代交代（せだいこうたい）で秋に赤く色づき落ちます。黄緑色の小さな花を咲(さ)かせ、秋に黒紫色(くろむらさきいろ)に熟(じゅく)した実をつけます。

この木の特徴(とくちょう)は、なんといっても葉の形です。特に若(わか)い木の葉は３ 裂(れつ)の深い切れこみが入り、手を広げたパーの形に見えます。ほかにもよく探(さが)すと切れこみ一つのチョキの形をしたものや、切れこみのないグーの形をしたものまで見つけることができ、別名「ジャンケンノキ」と呼(よ)ばれています。

カクレミノとは身に着けると姿(すがた)が消えるという昔話に出てくる想像上(そうぞうじょう)の蓑（みの）のことです。

カクレミノの名前の由来は、３裂した葉の形がその蓑のかたちに似（に）ているからとも、木全体をおおいかくすように葉をつけた樹形（じゅけい）からともいわれています。

実際(じっさい)、葉の柄（え）の長さを観察すると、すべての葉に太陽の光がうまくあたるよう、それぞれ長さをちがえ、木全体をおおう感じになっているのがわかります。みなさんも観察してみてください。

カスミザクラ（バラ科）

春、ならやまの多くの種類のサクラが、はなやかに咲(さ)き終わるころ、地味にひっそりと、清楚（せいそ）に咲くサクラです。

昔から日本の野山に自生していたサクラで、ヤマザクラやオオシマザクラに似(に)ていますが、花柄（かへい）に毛があるところから、別名ケヤマザクラと呼(よ)ばれています。花は真っ白で、オオシマザクラより小さく、花びらと花びらの間にすき間があります。花と同時にのびる葉は、あざやかな若草(わかくさ)色です。

サイクリングロード沿(ぞ)いに生育するこの木は、毎年美しく花を咲かせ、道行く人々を楽しませてくれています。運の悪いことに、この場所は山の北側で日当たりが悪く、周囲(しゅうい)に常緑樹(じょうりょくじゅ)やササが生いしげっています。このカスミザクラは光を求めて、くねくねと曲がりながら伸(の)びていて、ようやくやや日の当たるサイクリングロードへせり出したところで、枝(えだ)に花をつけている状態(じょうたい)です。

カスミザクラという名前は、「花が咲いたら山にかすみがかかったみたいに美しい」という意味で名づけられたそうです。

愛好家たちは周辺の草かりをしながら、カスミザクラが元気に育って、ずっと花を咲かせてくれるよう願っています。

カナメモチ（バラ科）

ならやま自然の森に生えている木で、観察路沿(ぞ)いに数カ所見られます。私たちが赤岳(だけ)と名付けて親しんでいる小高い所がありますが、その南斜面(みなみしゃめん)のカナメモチは圧巻(あっかん)の眺(なが)めです。

春、5月ごろ、白い小さな花がぎっしりと木全体をおおうように咲(さ)きます。秋には赤い実がぎっしりと実ります。

▲若葉

常緑樹(じょうりょくじゅ)で、つやのある緑の葉が美しく、出始めの若葉(わかば)は赤くてこれもきれいです。葉も花も実も一年中楽しめる木です。

生垣(いけがき)として植えられることが多く、家の周辺や公園などでおなじみでしょう。よく似(に)たレッド・ロビンはカナメモチから品種改良してつくられた園芸種で、葉がやや大きく赤い葉がより美しく、こちらの方がよく植えられているようです。でも実際には区別はつきにくいです。

▲佐保自然の森のカナメモチ

カマツカ（バラ科）

鎌（かま）の柄（え）に使われたことから「カマツカ」と名づけられました。材質（ざいしつ）が堅（かた）くて折れにくいので、玄翁（げんのうく石を割るのに使う大きなかなづち〉）、鎌（かま）、鉈（なた）、斧（おの）などの工具や農具の柄(え)など、生活の中で身近に利用されてきました。ノミヅカ、ウシタタキ、ウシノハナギなど、全国各地で色々な呼(よ)び方をされています。

身近な里山や雑木林（ぞうきばやし）に点々と生えます。高さは 2～5m の落葉小低木、葉は長さ 3～9cm、縁（ふち）に細かくそろった鋸歯(きょし)があり、先は少し尖（とが）ります。秋は橙色（だいだいいろ）に紅葉（こうよう）して美しいです。花は 4～6月、梅の花を小さくしたような白花が、短い枝（えだ）の先に 20 輪ほど咲（さ）きます。実は 7～10mm ほどで、秋から晩秋（ばんしゅう）に赤くなります。

ガマズミ (ガマズミ科)

落葉低木ですが、高さは1.5～4mくらいになります。葉は対生で、卵形(たまごがた)～円形、先端(せんたん)は少しとがっています。長さは6～14cm、幅(はば)3～13cm 、ふちには浅い波形の鋸歯(きょし)があります。雌雄同株(しゆうどうしゅ)です。

5～6月に花が咲(さ)きます。白い小さな花がかたまりになってたくさんつきます。

9～10月には4mm くらいの丸い赤い実が鈴(すず)なりになります。このころの実は酸味(さんみ)が強いですが、初冬になると甘(あま)くなり、食べられます。実は果実酒にもなります。

なかまにコバノガマズミという木があり、よく似(に)ています。しかし、葉はガマズミより一回り小さく、花の数もガマズミほど多くありません。したがって実も少ないです。花期は少し早く4～5月です。

▲ガマズミ・花

▲ガマズミ・実

▲コバノガマズミ・花

▲コバノガマズミ・実

カラスザンショウ（ミカン科）

ならやまでは、何十年ものあいだ人の手がはいらず、荒(あ)れ放題になった里山を元どおりにするにはどのようにしたらよいか、みんなで検討（けんとう）し、ナラ枯(が)れの木や古くいたんだ木を、かぎられた範囲（はんい）内で切りだし、そのあとどのように森がよみがえるか試験をしています。

大きな木を切り出したあと、太陽の光がさしこむようになった場所をギャップといいます。そのギャップでいち早く芽を出し育つ植物をパイオニア植物といいます。カラスザンショウは、アカメガシワとならびパイオニア植物の代表です。樹形（じゅけい）は逆(ぎゃく)三角形で、ならやまでも開けた明るい場所でよく見かけます。

▲これが1枚の葉

▲特徴(とくちょう)のある鋭いトゲ

葉の先に1枚（まい）の小さな葉がつき、その下に左右に対になった小さい葉が続き、鳥の羽根のようになった葉をつけます。これで1枚の葉です。数と形から「奇数羽状複葉（きすううじょうふくよう）」がこの木の葉の特徴(とくちょう)なのです。また、若(わか)い木では動物に食べられることから身を守るため、茎(くき)だけでなく葉の裏(うら)にまで鋭(するど)いトゲをいっぱいつけていることも大きな特徴となっています。

葉をつぶした時にミカンに似(に)た強い酸味（さんみ）のあるにおいを発します。この葉をカラスアゲハ、モンキアゲハなども食べに集まってきます。実はムクドリやカラスなども好んで食べます。

キヅタ（ウコギ科）

つる性(せい)の木で、野や山に生えています。1 年中緑の葉をつけます。若(わか)い木の葉はきれこみがあり、大きくなった葉は卵(たまご)の形をしています。同じ木なのに違(ちが)う葉があることを見つけてください。葉の形は、多くの木はいつも同じですが、変化する木もあります。

つる性植物は、他の木のように太い幹(みき)になることをやめ、細く柔(やわ)らかいつるを伸(の)ばします。そのため自分自身を支(ささ)えることができなくて、ほかの木や石などに寄(よ)りかかったり、絡(から)みついて、光の方に伸(の)びる植物のことをいいます。伸びるための方法は、巻(ま)きついたり、とげや鍵(かぎ)で引っかけたり、巻きひげを絡めたり色々ですが、キヅタは付着根というヒゲのような根を木の割(わ)れめなどに食いこませて上に登ります。この根は自分自身を支えるためで木から栄養分をもらったりしません。ツルは、やがて堅(かた)く太くなってゆきますが、フジと違って寄りかかった木を絞(し)めあげることはありません。

取り付いた木が冬に葉を落とす落葉樹（らくようじゅ）ですと、上の方に葉のない枝(えだ)が広がり、幹(みき)にキヅタの緑の葉が巻きついており、驚(おどろ)くことがあります。花は冬に咲(さ)き、翌年(よくねん)5月に実が黒く熟(じゅく)します。

キリ (ゴマノハグサ科)

日本各地で栽培(さいばい)される落葉高木。高さ10mにもなります。幼(おさな)いころの葉は大きく、成長するにつれ小さくなります。葉の裏(うら)は星状毛(せいじょうもう)が多く、粘(ねば)りつくような感触(かんしょく)です。秋から冬にかけて、翼(つばさ)のある種を飛ばします。

ならやまの「佐保自然の森」にあるキリは自生です。5月になると、幹(みき)の頂(いただき)に大型(おおがた)の房(ふさ)になった円錐花序(えんすいかじょ)をつけ、大きな淡(あわ)い紫色(むらさきいろ)の花を咲(さ)かせます。見事です。

成長の早い木です。昔は女の子が生まれると、キリを数本植えておきました。お嫁(よめ)に行くころには立派(りっぱ)に育っており、そのキリでタンスを作って持たせる風習があったようです。国産材では最も軽く、琴(こと)などにも使われます。

65年ほど前、奈良女子大の教授(きょうじゅ)が、ならやまに隣接(りんせつ)する杉林(すぎばやし)に、キリを植樹(しょくじゅ)されました。わたしたち会員仲間の一人がお手伝いをしたと話しています。小学5年のころだそうです。ならやまのキリは、その種が飛んで自生したのでしょう。

キンモクセイ (モクセイ科)

秋、橙色(だいだいいろ)に近い金色の花が咲(さ)きます。香りのよさはジンチョウゲ、クチナシとならぶ三大香木(こうぼく)の一つです。香りが強く、近くにあることにすぐ気がつきます。

中国が原産地です。日本にある木はすべて、雄花(おばな)だけが咲く雄(おす)の木といわれています。花は咲いても相手の雌(めす)の木がいないので実はなりません。雄花にも雌(め)しべはありますが、退化(たいか)して小さくなっています。このためふやすときは挿(さ)し木をします。

名前は、木の皮が動物のサイの皮に似(に)ていて、「木のサイ」を意味するモクセイという言葉と結びつきました。

葉は対生につくのがモクセイ科の特徴(とくちょう)です。よく似たモチノキ科の葉は互生(ごせい)ですから違(ちが)いがわかります。

葉は先がとがった細い楕(だ)円形でかたく、少し波打った感じです。ほとんどの縁(ふち)はなめらかですが、たまには先に小さなぎざぎざが出ます。なかまのギンモクセイの花は白。ほとんどの葉にぎざぎざがあります。ならやまのはキンモクセイです。

クサイチゴ（バラ科）

20～60cmの落葉小低木で、日当たりのよい場所でよく見かけます。高さが低く草のように見えるので、クサイチゴの名がついていますが木です。 ならやまにもあちらこちらにあります。

茎(くき)や枝(えだ)や葉に短い毛がたくさんあり、葉の表面の筋(すじ)のみぞが少し深いのでふわふわしています。葉は3～5枚(まい)の小葉の奇数羽状複葉(きすううじょうふくよう)で、まわりに細かい鋸歯(きょし)があります。

細いトゲもたくさんついているので、うっかりさわると痛(いた)いです。4～5月に直径4cmぐらいの5弁(べん＝花びら)の白い花が咲(さ)きます。5～6月になると、花のあとに1cmぐらいの球状(きゅうじょう＝ボールのように丸い)のつぶつぶの実ができます。はじめは緑色ですが、真っ赤にうれてくると甘(あま)くておいしいです。

クサギ (クマツヅラ科)

落葉小高木で高さは4～8mです。葉には長い柄(へい＝葉身と茎（くき）や枝〈えだ〉とをつなぐ部分)があり、対生します。葉の形はほぼハート形で大きく、長さ8～15cm、幅(はば)5～10cm、表裏(ひょうり)両面ともにやわらかな毛が密生(みっせい)しています。縁(ふち)は平らです。葉には特有の臭(にお)いがあります。 名前は葉の臭気(しゅうき)からつけられました。

7～10月には次々とたくさんの花を咲(さ)かせます。花冠(かかん＝花弁の集合体)は白色、がくは赤紫色(あかむらさきいろ)、花にはいい匂(にお)いがあります。

実は濃(こ)い紺色(こんいろ)で丸く、秋に熟(じゅく)します。赤紫色の星状(ほしじょう)のがくが実を包むように見えるので、よく目立ちます。若(わか)い葉は山菜として食べられます。

クサギの花にはいろいろな昆虫(こんちゅう)がよく集まってきます。クサギカメムシというかなり大きなカメムシがいます。クサギに集まっていることが多いのでこの名前をもらったそうです。

▲花

▲葉

▲クサギカメムシ

▲果実

クスノキ（クスノキ科）

日本一太い木は、九州にあるクスノキです。鹿児島県の「蒲生(かもう)の大楠(おおくす)」です。胴(どう)回りは 24.2m、高さも30m あります。もちろん長生きしています。樹齢(じゅれい)1500年とも1600年とも推定(すいてい)されています。

クスノキはすでに、奈良時代に書かれた歴史書(れきししょ)「日本書紀(にほんしょき)」の中の神話に取り上げられています。「スサノオノミコト」は自分のひげを抜(ぬ)いてスギの木を作り、眉毛(まゆげ)を抜いてクスノキを作って、「スギとクスノキは船に使え！ と言ったと書かれています。

葉をもむとスーとした良いかおりがします。お薬になる原料が含(ふく)まれているのです。昔は虫除(むしよ)けの薬が作られていました。虫が近づかないので昔は仏(ほとけ)さまなど彫刻(ちょうこく)の材料としても使われました。法隆寺(ほうりゅうじ)にある仏像(ぶつぞう)はクスノキで作られています。クスノキ科の葉は、葉の表面のすじが下から三つに分かれて出ています。年中緑の葉がある常緑樹(じょうりょくじゅ)で、葉の縁(ふち)はすこし波打ち表側はツルッとしています。古い葉は春新しい葉に変わりますが赤くなって入れ代わります。5～6月に黄緑色の花が咲(さ)き秋に黒い実をつけよく目立ちます。木の膚(はだ)は板チョコを並(なら)べたようなごつごつした感じです

アオスジアゲハの幼虫(ようちゅう)が木の葉を食べて大きくなります。

クチナシ（アカネ科）

クチナシというかわった名前は、実が冬に橙色（だいだいいろ）に熟（じゅく）しても口が開かないことからつけられました。りっぱな碁盤（ごばん）の足はこの実の形をまねて作られていて、「横から口出ししないでね」のメッセージを伝えています。

実は食べても害がないので、昔から「きんとん」や「たくわん」などの食品に黄色の色をつけるのに使われてきました。

6月ごろ、甘(あま)い香りの真っ白な花を枝(えだ)先に1個(こ)ずつ咲(さ)かせます。秋のキンモクセイ、春のジンチョウゲとともに三大香木(さんだいこうぼく)とよばれ、良いにおいの花を咲かせる木の代表です。

花びらのもとの部分はアサガオのようにくっつき筒状（つつじょう）になっていますが、先は5～7つにわかれています。

常緑樹（じょうりょくじゅ）で、冬でもつやつやした濃(こ)い緑色の葉を対生につけます。ときに3枚(まい)の葉がまわりにつく「3輪生(りんせい)」になることがあります。葉のふちに鋸歯（きょし）はなく、側脈（そくみゃく）の部分がへこむ感じで、そのあいだはふくらみをおびるので、しわのように見えます。

クヌギ（ブナ科）

ならやまではコナラの次に多くみられるドングリのなる木です。幹（みき）を切っても切り株(かぶ)からまた芽が生え大きく育つので、10～20 年ごとにくりかえし切り出すことができます。燃(も)やすと火のいきおいが強く長もちするので、ガスや電気のない時代には、マキや炭にして燃料（ねんりょう）として幅(はば)広く使われました。

この木が出す樹液（じゅえき）は昆虫(こんちゅう)たちの大好物。昼のあいだはカナブンやスズメバチがよってきますし、夜になるとカブトムシやクワガタも集まってきます。

樹皮はゴツゴツしていて、長めの葉っぱの鋸歯（きょし）はトゲのようになっていますが、まん丸いかたちのドングリがいちばんの特徴(とくちょう)です。ドングリには色々な種類がありますが、クヌギのドングリはその代表格（だいひょうかく）で「どんぐりころころ」の歌や「どんぐりまなこ」の言葉もクヌギのドングリのイメージから作られたといわれています。

一つの木に雄花(おばな)と雌花(めばな)をつけますが、風に花粉(かふん)を運んでもらう「風媒花（ふうばいか）」で雄花は風に運ばれやすいように下向きに垂(た)れて咲(さ)きます。

ドングリは 2 年かけて大きくなる「2 年なり」のドングリです。

クリ　(ブナ科)

ならやまには人の手によって植えられたクリの木が所々で見られ、毎年秋にはたくさんの実がなります。クリもブナ科でドングリのできる木とおなじ仲間です。葉や幹(みき)を見るとクヌギに似(に)ているので、仲間であることがわかります

クヌギとの違(ちが)いは、クリの葉は鋸歯(きょし)の先までしっかり緑色をしていますが、クヌギの葉の先は色がぬけた感じになっていることです。

樹皮（じゅひ）にも違(ちが)いがあり、クリの幹(みき)の裂（さ）け目はクヌギより長くて幅(はば)広く、また浅く裂けるのが特徴(とくちょう)です。

また、クヌギは2年で実が大きくなる「2年なり」ですが、クリは夏に受粉(じゅふん)し秋に実のなる「1年なり」です。

クリはブナ科の木のなかでも花粉をおしべからめしべにとどけるのに虫の助(たす)けを借(か)りる虫媒花（ちゅうばいか）です。そのため、花は虫に目立つように、はじめ上向きに咲(さ)きます。また、夏のはじめの開花期には雄花（おばな）が虫をおびきよせる強いにおいを出し、遠くからでもクリの木のあるのがわかります。

クロバイ　(ハイノキ科)

高さ10mほどになる常緑(じょうりょく)小高木です。関東地方南部以西の温暖(おんだん)な山地や丘陵(きゅうりょう)に生え、ならやまでも見られます。

黒い灰(はい)が名前の由来。黒い灰の木の意味です。黒は樹皮(じゅひ)の色（灰黒色）からとされます。葉がハイノキに比(くら)べ濃(こ)い緑色で光沢(こうたく)があり、数も多いため、黒々と見えるからとの説もあります。この木の枝(えだ)や葉を焼いて灰を作り、布(ぬの)を染(そ)める時に染料(せんりょう)と混(ま)ぜて使うと、色落ちを防(ふせ)ぐことができます。

開花は新芽が伸(の)び始める4～5月ごろ。白い小さな花がブラシ状(じょう)に集まり、木全体を白く飾(かざ)ります。背景(はいけい)となる葉が密(みつ)で濃(こ)い緑であるため、花が遠くからでも浮(う)き上がるようによく目立ちます。

クロモジ（クスノキ科

枝(えだ)や葉にさわやかな良い香りがあるので、和菓子（わがし）用の高級つまようじに広く利用されています。そのつまようじのことも「黒文字」といいます。枝は緑色で黒い模様（もよう)があるのを文字にたとえて「クロモジ」と名づけられました。

高さは２～５m、山地にはえる落葉低木です。花や実は目立たない木ですが、春、葉よりも早く黄緑色の小さな花が集まって咲（さ）きます。花の後に緑色の丸い実をつけ、秋に黒く熟（じゅく）します。葉は互生（ごせい）し枝先に集まってつき、長さ５～9cm、縁（ふち）に鋸歯（きょし）はありません。新芽や紅葉（こうよう）の美しい木です。雌雄異株（しゆういしゅ）雌雄異花（しゆういか）です。

ケヤキ（ニレ科）

20m を超(こ)えるほどに大きくなり、大昔から大切に使われてきました。木に粘(ねば)りと重さがあり、強くて長く使えるというすぐれたところがあります。木を切った所の模様(もよう)のような線も、とてもきれいです。家など建てるときはとても素晴(すば)らしい材料です。

木が育っていくと、人が立ち上がって両手を広げたような形になります。公園や街路樹(がいろじゅ)でもよく見かけます。

春に新しく葉を出し茂（しげ）らせ花を咲(さ)かせ、秋に種を風の力で運んでもらい、冬には葉を落とす落葉樹（らくようじゅ）です。

ケヤキの花は、枝先の普通(ふつう)より小さい葉を5～7枚(まい)つけた枝元（えだもと）と開いた葉のわきに咲きます。秋には充実（じゅうじつ）した種のついた小枝ごと風にまかせてクルクルと飛ばします。木の枝の普通の大きさの葉、枝先についている小さな葉を見つけて下さい。

幹や枝は毎年太くなってゆきますが、幹が太るにつれて外皮が大きくめくれ、やがてはがれ落ちるようになります。はがれ落ちるまでのすきまに冬、虫などの小さな生き物がもぐりこみます。冬の寒さから身を守るためです。

コウヤボウキ　(キク科)

木とは思えない草のような小さい植物ですが、落葉低木です。キク科の木本は珍(めずら)しいです。

枝(えだ)は根元からたくさん出て、細長く曲がり、50～100cm ほどになります。1年目の枝には卵形(たまごがた)の2～5cm の葉が互生(ごせい)します。 2年目は短い枝に3～5枚の葉が束状(たばじょう)につきます。

9～10月に、1年目の枝の先に白い花を1つつけます。中心部は赤紫色(あかむらさきいろ)で、きれいな花です。花は小さい筒状(つつじょう)の花が13個(こ)前後集まっています。白い房状(ふさじょう)で、長さは15mm ほど、くるくるカールしてリボン状です。竹やぶの縁(ふち)や尾根(おね)道の木の下などに咲(さ)いています。

コウヤボウキの漢字は「高野ぼうき」です。昔、高野山でこの植物の枝を束ねて作った手ぼうきを使っていたことからこの名がついたということです。手ぼうきとは、卓上(たくじょう)などで使う小さなほうきのことです。

高野ぼうきはその後、カイコを飼(か)う養蚕(ようさん)農家や、絹織物(きぬおりもの)の原料になる繭（まゆ）を生産する農家が、カイコを飼う部屋のそうじなどにも使っていたそうです。

▲葉

▲花

左の写真はコウヤボウキの枝を使ってミニサイズの手ぼうきを試作したものです。

タカノツメとコシアブラ　(ウコギ科)

タカノツメは先のとがった円錐形(えんすいけい)になる冬芽が、タカの鋭(するど)い爪(つめ)を思わせることからこの名前がつきました。コシアブラは昔樹脂液(じゅしえき)を採(と)って「コシアブラ」という塗料(とりょう)を作ったことから塗料の名前が木の名前になりました。どちらも、ならやま里山林内の観察路周辺でよく見かけます。ウコギ科という同じグループの木で同じような場所に生えています。ならやまでは隣同士(となりどうし)に生えていることも珍(めずら)しくありません。違(ちが)いは、タカノツメが 3 枚(まい)の小葉を持ち、コシアブラは 5 枚の小葉を持つことです。葉の枚数の違いで簡単(かんたん)に見わけることができるので、観察にはうってつけです。

どちらの葉も、もともとは 1 枚の葉っぱだったのが、長い年月の間に切れ込(こ)みが入り、最終的には分かれそれぞれが小さな 1 枚ずつの葉のようになりました。このような葉を小葉といいます。タカノツメのように 3 枚の小葉でできているものを三出複葉(さんしゅつふくよう)といい、コシアブラのように5枚の小葉でできていて、手のひらのように見える葉を掌状複葉(しょうじょう〈＝手のひらのような〉ふくよう)といいます。

どちらも春になると若葉が山菜料理の材料となり、タラの新芽のように天ぷらなどでおいしくいただけます。

冬に葉が落ちる落葉樹(らくようじゅ)で、葉はうすくてやわらかく、日にかざすと日差しが透(す)ける（物を通して向こうのものが見えること）ような感じがするのも共通の特徴(とくちょう)です。

秋には黄色く色づき美しい黄葉が楽しめます。黄葉の後は枯(か)れ葉

色になり落葉します。カツラの葉と同じ甘(あま)い香りの成分が含(ふく)まれているといわれています。落ち葉の時期、雨上がりの観察路を歩くと、足もとからほのかに甘い香りがただよってきます。この香りは焼き芋(いも)のにおいにも似(に)ているといわれ、タカノツメなどは別名イモノキとも呼(よ)ばれます。落ち葉をファスナー付きのナイロン袋(ふくろ)に入れ、しばらく後どんな香りがするか試してみてください。

タカノツメの葉の鋸歯(きょし)は小さく、あまり目立ちません。コシアブラの葉のほうが少し大きく、葉のふちのギザギザもこちらのほうが目だちます。

５枚の小葉を持つ木には、ほかにトチノキがあり、コシアブラの葉にもよく似ていますが、コシアブラの葉は柄(え)の部分がはっきりしているのに対し、トチノキには小葉に柄の部分がほとんどなく、違いがわかります。

花の時期はタカノツメが少し早く 5～6 月ごろ、黄緑色の花びらと雄(お)しべの数がそれぞれ 4 個(こ)の花を数個～10 数個枝(えだ)先に付けます。コシアブラにつくのは真夏の 8 月ごろに同じく黄緑色の花ですが花びらとおしべの数が 4 個ではなく 5 個の花を多数球形に咲(さ)かせます。よく見ると花びらが外に反り返り、中の雄しべがむき出しになっているのが分かります。

小さくても懸命(けんめい)に咲いている姿(すがた)からは、たくましさと健気（けなげ：困難〈こんなん〉に勇敢〈ゆうかん〉に立ち向かうこと）さが伝わってきます。みなさんも植物のそんな姿にも目を向けてみてください。

コノテガシワ（ヒノキ科）

「カシワ」という名前ですが、葉の広がりが子どもの手のひらを立てたような形に似(に)ていることからつけられたそうで、「カシワ」とは関係(かんけい)ありません。写真のようにヒノキの葉に似た形をしている針葉樹(しんようじゅ)なのです。長さ2㎜ほどのうろこ状(じょう)で平べったい葉をしています。くすんだ緑色で、つやはありません。

木の葉はふつう横に広がるのですが、枝(えだ)がまっすぐ上に向き、葉はたて向きにつくという、とても珍(めずら)しい性質(せいしつ)を持っています。そんな性質から木の全体の形は水滴(すいてき)を大きくしたような形になり、長く年を重ねると丸い形などに自ら変え美しい姿(すがた)で育ちます。自然にそのような形になるので珍しがられてあちらこちらに植えられました。植物の葉は、裏(うら)表がはっきりしていますが、この木は区別がはっきりしていません。日が当たるところでは、枝を深く切ってもまた芽吹(めぶ)いて、元の形に戻(もど)ろうとします。長く形が変わらない性質から垣根(かきね)や境界(きょうかい)の目印、庭や神社、公園などでよく植えられています。

実は、秋に黒ずんだ茶色に熟(じゅく)します。1.5㎝ほどの卵（たまご）形に角が生えたような実ができます。

コバノガマズミ　(スイカズラ科)

丘陵(きゅうりょう)や山地で見られ、高さ2～4mになる落葉低木です。

ならやまでふだんはあまり目立ちませんが、4月中ごろ枝(えだ)先に直径(ちょっけい)5mm ほどの白い花をたくさん咲(さ)かせた時よく目立ちます。花の白さが、この時期の若葉(わかば)の緑とよく合います。

よく似(に)た仲間のガマズミに比(くら)べ、葉が細長くやや小ぶりであることから、コバノガマズミと名づけられました。西日本に多いようです。ガマズミの花が5月になってから咲くのに対しコバノガマズミは4月から咲き始めます。

葉は2枚(まい)の葉が向き合ってつく対生(たいせい)で、ルーペで拡大(かくだい)すると両面に星状毛（せいじょうもう）が密生(みっせい)しています。星の形のように一ヶ所から放射状(ほうしゃじょう)に毛が出ており、ビロード感覚(かんかく)の手触(てざわ)りがあります。

10月ごろ、数ミリの丸い実が真っ赤に熟(じゅく)します。たくさんの実は花に負けず美しく目立ちます。甘酸(あまず)っぱい実は小鳥たちが好(この)んで食べます。

コバノミツバツツジ　(ツツジ科)

高さ2～3mのよく枝(えだ)分かれする落葉低木です。丘陵(きゅうりょう)の雑木林(ぞうきばやし)やアカマツ林の縁(ふち)など、日当たりの良い乾燥(かんそう)した場所を好みます。

3～4月、若葉(わかば)が開く前に紅紫色(べにむらさきいろ・ピンク)の花を咲(さ)かせ、春の訪(おとず)れを感じさせてくれます。周りの木々が芽吹(めぶ)く前に鮮(あざ)やかなピンク色の花を咲かせるので、森の中でよく目立ちます。ならやまではあちらこちらで見られますが、特に松山平と呼(よ)ばれる所でアカマツと共に多く見られます。

花は直径 3cm ほどで、5枚(まい)の花びらがくっついていて合弁花(ごうべんか)といい、雄(お)しべは10本です。葉は花の後に開きます。3～5cmのひし形、3枚(まい)ひと組になって枝先に輪生します。冬の花芽は長さ1cmほどの楕円形(だえんけい)で褐色(かっしょく)の毛が密生(みっせい)し、葉の芽は紡錘形(ぼうすいけい)で小さめです。

ミツバツツジの仲間にはたくさんの種類がありますが、その中でも葉が小型(こがた)であるため、コバノミツバツツジと名づけられました。

サカキ（サカキ科）

神社に生えている常緑樹（じょうりょくじゅ）の枝(えだ)は、神聖（しんせい）なものとして神さまへのお供（そなえ）や、神社でおこなわれる儀式（ぎしき）に用具として使われます。このような使われかたをする木には色々な種類があり、それらを総称（そうしょう）してサカキと呼(よ)びます。

なかでもいちばんよく使われるのが、ここに紹介（しょうかい）するサカキで、そのまま木の名前となりました。

葉には少し厚(あつ)みがあり側脈（そくみゃく）が目立たず、ふちはギザギザのない全縁（ぜんえん）で、モチノキに似(に)ていますが、枝先(えださき)の芽がタカの爪(つめ)のようにまがり、長くのびるのが特徴（とくちょう）です。その芽の下に左右にそろった互生(ごせい)の葉をつけます。(上の写真)

初夏に、白っぽく、のちに黄色みをおびる花びら5つの小さな花を下向きにつけ、秋には黒紫(くろむらさき)色の丸い実をつけます。

ならやまには、少し小ぶりでおなじ仲間のヒサカキと隣同士（となりどうし）で生えているところをよく見かけます。葉の大きさ、鋸歯（きょし）があるかないかなど、実際(じっさい)に見くらべてください。

ササ類　(イネ科)

2007 年4月、私(わたし)たちがならやまへ初めて来たとき、サイクリングロードの両側はササでおおわれていました。まるでかべのようで、その向こうは見えませんでした。ひたすらササを刈(か)り取って田や畑、花だんや池などをつくりました。

▲2021 年夏のならやま観察路

今でも日当たりのよい所には、どんどんササが生え、ササ刈りは終わることがありません。

ササ類は、やっつけても、やっつけてもすぐ復活(ふっかつ)する手ごわい敵(てき)で、ならやまの木として親しむようなものではありませんでした。

しかし、ササ類もならやまの木々の仲間の一つで、鳥や虫たちのすみかになるなど、役立っています。私たちは、「ササ」とか「ヤブザサ」と呼(よ)ぶだけですが、名前があるはずです。

会員たちで観察し、調べてみたところ、ほとんどがメダケ属(ぞく)のササらしいとわかりました。「メダケ」と名前はタケのようですが、タケではなくササです。ややこしいですね。

▲ささ刈り作業

そのまっすぐな、かたい茎(くき)を工作や支柱(しちゅう)に使っていますが、以前はとりもちで虫取りをするときに使いました。戦時中は、出征兵士（しゅっせいへいし）の見送りの旗に使われたそうです。

サザンカ（ツバキ科）

サザンカはヤブツバキを少し小さくしたような葉形・樹形(じゅけい)です。葉をお日さまにかざしてもすじがはっきり見分けにくいことや、葉のぎざぎざがはっきりとあることなどが特徴(とくちょう)です。

花は晩秋(ばんしゅう)から冬（10月末～12月ごろ）でヤブツバキより早く開きます。花びらは開いた形で1枚(まい)ずつ散り落ちます。花芽は6～7月にかけてできますが、その後の成長期に休眠(きゅうみん)ホルモンが作られないので、同じツバキ属(ぞく)ですが早く咲(さ)きそうです。暖(あたた)かい地方の野山に生える常緑(じょうりょく)小高木です。園芸種では八重咲きやピンク、赤などの花をつける種類も作られています

ならやまにあるサザンカは、園芸種でしょうか？ 日本古来のヤブツバキとの違(ちが)いは？ そんなこだわりを持って現物(げんぶつ)を見て観察するのも面白いでしょう。

ツバキ類は庭木、生け垣(がき)、公園、街路樹などとしても植えられることが多く、日本人だけでなく広く世界の人々にも愛されている木の一つです。自生しているところは、ヤブツバキは青森県まで分布（ぶんぷ）していますが、サザンカは関東地方から南が中心です。

「チャドクガ」はツバキ類全体に発生しやすいので5～10月は、十分に注意してください。

サルトリイバラ　(サルトリイバラ科)

日本各地の明るい山野やヤブの中に生え、ならやまにも数多くみられます。トゲのあるつるをのばし、巻(ま)きひげでほかの植物にからみつくつる性(せい)の植物です。名前はサルもからめとられるという意味からつきました。

葉は丸みのある形でつやがあり、3～5本の葉脈（ようみゃく）がよく目立ちます。葉の大きさはまちまちで、場所によりおどろくほど大きくなります。西日本では柏餅（かしわもち）をつつむのにこの葉がつかわれました。秋になるとあざやかな赤い実をつけ、生け花などにも使われます。

別名、山帰来(さんきらい)ともいいます。むかし難病（なんびょう）にか

かり医者にも家族にも見はなされ、山にすてられた男の人が、おなかがすいてサルトリイバラの根を食べ、山で過(す)ごしていたら病気がなおり、山から帰ってきたのでこの名がついたといわれています。

サルトリイバラの根からは漢方薬も作られます。しかし、サポニンという毒(どく)を含(ふく)むので「山帰来」はあくまでもつくり話として、けっしてまねして食べないでください。

サワフタギ　(ハイノキ科)

山地の沢沿(さわぞ)いや尾根(おね)などに生える落葉低木です。沢に蓋(ふた)をするように茂(しげ)るところからこの名前がつきました。5～6月ごろに白い小花をたくさん咲(さ)かせます。

葉は大まかにいえば楕円形(だえんけい)で、長さは 4～7cm、幅(はば)は 2～3.5cm、先端(せんたん)はとがっています。葉の表面はザラザラし、裏面(りめん)の葉脈(ようみゃく)には毛が生えています。葉の縁(ふち)は細かい鋸歯（きょし）があります。

4～6月ごろ、シロシタホタルガというガの幼虫(ようちゅう=イモムシ)が、この木の若葉を食べて成長します。くっきりした水玉模様(もよう)が美しいイモムシです。

10月ごろには小粒(こつぶ)でほぼ丸い（6～7mm）、光沢(こうたく)のある青い実をつけます。実が熟(じゅく)すころになると野鳥のメジロや、渡(わた)りの途中(とちゅう)のキビタキなどがこの実を食べにやってきます。美しい実はすぐになくなってしまいます。

▲花

▲シロシタホタルガ幼虫

▲実

▲シロシタホタルガ

サンゴジュ　(ガマズミ科)

葉は対生または3輪生の単葉です。長さは 7～20cm、幅(はば)4～8cm の楕円形(だえんけい)で、表面につやがあります。縁(ふち)はほぼ全縁(ぜんえん)か少し波のようになった鋸歯(きょし)があります。葉柄(ようへい)は 1～4.5cm ほどあります。

枝先(えださき)に長さ 5～16cm、幅 8～16cm の円錐花序(えんすいかじょ)を出します。花序のつ け根には 2 対の葉があります。6月ごろに花が咲(さ)きます。直径が 6～8mm で白色、花冠(かかん＝花びらが集まったもの)は5つに裂(さ)け、やがて反(そ)り返ります。実は長さ 7～9mm ぐらいで夏から秋に赤くなりますので、海のサンゴになぞらえて珊瑚樹(さんごじゅ)と名付けられたともいわれています。観賞(かんしょう)用として人気があります。熟(じゅく)し切ると黒紫色(くろむらさきいろ)になります。

茎(くき)や枝は燃(も)やすと泡(あわ)のようなものを吹(ふ)き、別名アワブキと呼(よ)ばれます。水分を沢山(たくさん)含(ふく)んでいるので、延焼(えんしょう)しにくいことから防火(ぼうか)や防風(ぼうふうよう)用として植えられます。

似(に)たような葉の木は多いですが、葉柄を折って引きさくと、白い綿(わた)のような糸が出てくるのが特徴(とくちょう)でもあります。

萌芽力(ほうがりょく)があり、刈(か)り込(こ)みなどにもよく耐(た)えます。下の枝なども枯(か)れたりしないので、住宅(じゅうたく)の周囲(しゅうい)の垣根(かきね)などにもよく利用されます。

サンシュユ（ミズキ科）

漢字で書くと「山茱萸」(サンシュユ)と難(むずか)しい字です。茱萸(しゅゆ)とはグミのことです。秋にはグミのような赤い実がなるのでこう呼(よ)ばれます。

別名は「ハルコガネバナ（春黄金花）」といい、3～4月ごろ、葉が出る前に木一面に黄色の花をつけることからついた名前です。グミのような赤い実を珊瑚（さんご）になぞらえて、「アキサンゴ」とも呼ばれます。

サンシュユは落葉小高木、短い枝(えだ)の先に 5mm ほどの小さな花が集まって 2～3cm ほどの大きさの花房(はなふさ)を作って開花します。木全体に黄色の花が咲(さ)くと黄金色に光り輝(かがや)いて見えます。秋には紅葉(こうよう)と赤い実が同時に楽しめます。葉は長さ 4～10cm ほどで、葉の裏(うら)に毛が生えています。

サンショウ（ミカン科）

雑木林(ぞうきばやし)などに自生する高さ 3m ほどの落葉低木です。雌株(めかぶ)と雄株(おかぶ)があり、4月ごろ葉のわきに黄緑色の小さな花を咲(さ)かせ、雌株だけが実を付けます。葉は 5～9 対の小さな葉が集まって鳥の羽のようにつく羽状複葉(うじょうふくよう)で、若(わか)い枝(えだ)には対生する鋭(するど)いトゲがあります。葉と果実に独特(どくとく)のさわやかな香りを持ち、古くから食材として利用されてきました。

若葉(わかば)は木の芽と呼(よ)ばれ、緑があざやかで香りがよいため、やき物や煮物(にもの)料理のいろどりとしてそえられます。とくにたけのことの相性(あいしょう)がよく、この時期は人気が高まります。

5～6月ごろの柔(やわ)らかく未熟(みじゅく)な実は、昆布(こんぶ)とともに煮(に)つけた佃煮(つくだに)や、じゃことまぜたちりめん山椒(さんしょう)が有名です。

秋に熟した実の乾燥粉末(かんそうふんまつ)は、香味料としてウナギのかば焼きや七味唐辛子(とうがらし)の材料として用いられます。

葉や実を利用するため、民家の庭に植えられることも多いです。ならやまでは、観察路から少しはずれた所に自生しています。

ザイフリボク　(バラ科)

高さ5～10mの落葉小高木です。4月中旬(ちゅうじゅん)葉が出そろうころ、きれいな白い花を咲(さ)かせます。花びらは細長く、昔の武将(ぶしょう)が指揮(しき)に使った白い采配(さいはい)に似(に)ていることから名前がつきました。今でも先頭に立って指図することを采配を振(ふ)るといいます。

ならやまでは、春になるとサイクリングロード沿(そ)いに咲いていました。2017年、周りのクヌギやコナラの大木がナラ枯(か)れで倒(たお)れ、次の年から花を見なくなりました。巻(ま)き添(ぞ)えになったのでしょう。今は道から少し離(はな)れた山の斜面(しゃめん)で、ひっそりと咲いています。

冬芽は特徴(とくちょう)があります。赤みをおびた枝(えだ)先と、綿毛(わたげ)にふちどられた芽鱗(がりん)の美しさは３大美芽(びが)の一つといわれています。芽鱗は葉や花になる芽をおおっている部分のことです。

シモツケ　(バラ科)

ならやまのシモツケは3本ありますが、もとからあったのではなく後から誰(だれ)かが植えたものです。

シモツケ（下野）という名前は、昔でいう下野の国（今の栃木県）で発見されたからで、古くから栃木県でよく栽培(さいばい)されてきました。

落葉低木で高さは1m、株立(かぶだ)ちといって一つの株に、たくさん枝(えだ)が出てきて、こんもりした木になります。3～8cmぐらいの卵形(たまごがた)の葉が互生(ごせい)して、少し不ぞろいの鋸歯(きょし)があります。

花は5～8月に、小さなピンク色の花が枝先にかたまってつきます。少し香りもします。雄(お)しべが花びらより飛び出しています。

実は長さ2～3cmの球形のガクの中に5つずつかたまってつき、9～10月に熟(じゅく)すと、ガクが割(わ)れて細かい種がこぼれ出てきます。

シャシャンボ　(ツツジ科)

ならやまでは鳥観(とりみ)の丘（おか）や遊びの森をはじめ、あちらこちらで見られます。樹齢（じゅれい）がどれくらいかは分かりませんが、よそではあまり見られないくらい太い木も何本か生えています。

名前は漢字で「小小坊(ぼう)」と書きますが、ブルーベリーの仲間です。10月ごろ、5～6mm くらいのブルーベリーによく似(に)た小さな黒い実が熟(じゅく)すので、小小坊の字があてられ、その読みの「ショウ・ショウ・ボウ」がなまって「シャシャンボ」になったといわれています。

常緑広葉樹（じょうりょくこうようじゅ）で冬にも葉を落とさない照葉樹（しょうようじゅ）の一種です。照葉樹の多い森ではその下に草が育たず、昆虫(こんちゅう)や鳥などの生き物もあまり生息しないといわれています。

葉の裏(うら)のまん中の主脈(しゅみゃく)には小さな突起(とっき)があり、指でなぜるとひっかかるのが特徴(とくちょう)です。ほかにも樹皮(じゅひ)を見ると、たてに細かくさけ、ところどころ皮がはげ落ち、やけどのあとのような赤みをおび、いたいたしい感じがするのですぐわかります。

シャリンバイ（バラ科）

５月ごろ、白い５弁（べん）の花が枝（えだ）先にたくさん咲（さ）き、よい香りがします。花がウメに似（に）ており、互生（ごせい）の葉が車輪（しゃりん）のようにつくので、この名前になりました。

つやつやした厚（あつ）い葉は乾燥（かんそう）や大気汚染（おせん）に強く、中央分離帯（ぶんりたい）などによく植えられます。ならやまでは、鳥が種を運んできて自生したようです。秋に熟（じゅく）した実は赤紫（あかむらさき）色から黒色に変わり、表面に白い粉（こな）をおびたようになります。

葉は常緑（じょうりょく）で、裏（うら）の葉脈（ようみゃく）に特徴（とくちょう）があります。こまかい網（あみ）目がはっきりとわかります。葉の鋸歯（きょし）は目立ちません。ぎざぎざがない葉もまれに見かけます。葉と茎(くき)のつなぎ目の葉柄（ようへい）は、しばしば赤みをおびることがあります。

シュロ　(ヤシ科)

独特(どくとく)の姿(すがた)をした樹木(じゅもく)です。常緑(じょうりょく)小高木で、高さは5～7m です。

葉柄(ようへい)が幹(みき)につながる部分に、幹をおおう繊維質(せんいしつ)のシュロ皮と呼(よ)ばれるものがあります。シュロ皮は分解(ぶんかい)しにくく、水につけても腐(くさ)りにくい性質(せいしつ)があり、シュロ縄(なわ)として利用されます。繊維を束ねてシュロたわしやシュロほうきに加工されます。

葉の部分は葉柄(ようへい)が長く、扇(おうぎ)を開いたような大きな円形で、熊手（くまで）のような形にも見えます。

雌雄異株(しゆういしゅ)で、花は5～6月に咲(さ)きます。葉の間から太い軸(じく)が出て、粒状(つぶじょう)で、淡(あわ)い黄色の小さな花をたくさんつけます。

シュロの葉を使ってバッタを作る（工作）ことができます。今にも跳(と)びはねそうなバッタになります。

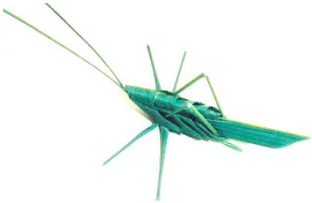
タワシ、縄、ほうきなどは、今は化学繊維製品(せいひん)になっていますが、昔はシュロで作っていたので、家庭でも庭や畑にシュロがよく植えられていたものです。

▲葉

▲樹皮

▲花

▲シュロの手ぼうき



▲シュロのバッタ

シラカシ（ブナ科）

関東地方に多い木ですが、関西地方でも山野に見られ、公園などにもよく植えられているドングリのなる木です。材木が白いのでこの名がつきました。よそにくらべるとならやまでは少ないように思います。

シラカシはアラカシの仲間で、よく混同（こんどう）されます。ドングリの殻斗(かくと＝帽子〈ぼうし〉の部分)の模様（もよう）もリング状(じょう)でおなじです。樹皮（じゅひ）も似(に)ていて見わけがつきにくいです。葉やドングリそのものに特徴(とくちょう)があるので、そちらで見わけましょう。

シラカシの葉は細身で。鋸歯(きょし)もアラカシにくらべて小さく、葉の裏側(うらがわ)に毛はありません。アラカシの葉の裏には細かい毛があるので、くらべるときはルーペ・10～20 倍ほどの拡大鏡（かくだいきょう）を使って観察しましょう。

ドングリの頭の方をよく見るとシラカシのドングリには、毛があって白っぽく見えますが、アラカシのドングリの頭の先は、その白っぽさがなく胴(どう)のまわりから頭の先にかけすっきりしています。

シリブカガシ（ブナ科）

ドングリのおしりがへこんでいることから、シリブカガシの名前がつきました。ならやまでは鳥がドングリを運んできたのか、数年前にタケノコ平近くで数本が見つかりました。まだ幼(おさな)くてドングリはできませんが、すくすくと育っています。

シリブカガシはマテバシイの仲間で、ドングリにはしぶみがなく食べることができます。フライパンで炒（い）り、殻(から)からとり出し、中身を食べると、かすかにクリのような味がします。

成熟（せいじゅく）して落ちたばかりのドングリの表面はロウのような成分で守られていて、白くよごれた感じに見えますが、ふき取ると宝石(ほうせき)のような光沢（こうたく＝つや）があらわれます。おそらくドングリの中で一番美しいのではないでしょうか？ もうしばらくすれば、そのドングリも見ることができるようになりますので、楽しみにしておいてください。

マテバシイとのちがいは、葉の側脈（そくみゃく）の数で、シリブカガシの側脈は左7本くらいですが、マテバシイはそれより多く10本くらいです。

また、シリブカガシの葉の裏側(うらがわ)は少し銀色に輝(かがや)いて見えます。

シロシキブ　(シソ科)

ならやまの花畑に生育する低木です。ムラサキシキブと同じ仲間の木で、ムラサキシキブの実が紫色(むらさきいろ)であるのに対して、白い実をつけることからシロシキブと名づけられました。

▲花

▲実

6月ごろに咲(さ)く花も白いです。秋には、丸い小さい実がたくさんなり、とてもきれいです。

私(わたし)たちの活動の初めのころ、この木の周辺を花畑にするために耕(たがや)すと、土の中からいろいろのゴミが出てきました。とりわけタタミは、掘(ほ)っても掘っても、ずるずると連なって出てきて、終わることがありません。タタミ表や糸の化学せんい、しん材の発ぽうスチロールなどの石油化学製品(せいひん)は、とてもじょうぶで、何年たっても土にかえることはないのです。手に負えなくて、とうとう重機をたのんで片(かた)づけてもらいました。

シロシキブはその時、うまく生き延(の)びることができたのです。側にあったコムラサキは、ゴミといっしょになくなってしまいました。こぼれるように紫の実をつけていたので、とても残念です。

シロミノカラタチバナ　(サクラソウ科)

ならやまの薄(うす)暗い所に生えている高さ 30cmくらいの小さな木です。お金に関係する一両、十両、百両、千両、万両の縁起(えんぎ)の良い木々のうちの百両に当たる木です。

これら5種のなかでも、シロミノカラタチバナは、とりわけ葉がすらりと細長く、凛（りん）とした気品があります。

2カ所に自生しています。どこかから鳥が運んで来たのかもしれません。野山の野生種なのか、近所の庭の園芸種なのかわかりません。ならやまというところは、あちらこちらからやって来た種が芽生えるところです。

▲実

夏に白い花が咲(さ)き、秋に実がなります。少し黄色を帯びた白い実です。ずっと冬まで実をつけています。

数年前にはカラタチバナといって、赤い実をつける木が生えていました。50cmくらいのものが 2 本見つかり、希少なものなので大事にしていました。夏に白い花をたくさんつけました。写真はその時のものです。秋に美しい赤い実をたくさんつけましたが、そのあとすぐ、ごっそりと掘(ほ)られて、なくなってしまいました。だれかが持ち帰ったようです。会員たちの悲しい思い出です。

▲花

ジンチョウゲ　(ジンチョウゲ科)

高さ1mほどの常緑(じょうりょく)小低木で、よく枝（えだ）分かれして丸い形になります。

葉は互生(ごせい)で4~9cmの長だ円形で、枝の先の方にかたまってつきます。肉厚(にくあつ)で葉の表面はこい緑色で、つやがあります。

2~4月に、枝先に小さな花が20個(こ)ほどかたまってつきます。これは頭状花序(とうじょうかじょ)といいます。

花には花弁(かべん)がなく、4つにわれた肉厚なガクがあります。ガクの外がわは紫紅色(しこうしょく)、内側は白色です。花は強いよいかおりがします。

雌雄異株(しゆういしゅ)で、実は1cmほどの球形で赤く熟(じゅく)し有害ですが、あまり見ません。室町時代に中国から雄株(おかぶ)だけ入ってきたらしいですが、最近は雌株(めかぶ)も入ってきましたので、赤い実が見られるかもしれません。

スイカズラ （スイカズラ科）

名前は「吸(す)い葛(かずら)」という意味で、細長い花筒(かとう)の奥(おく)に蜜(みつ)があります。子どもたちが花を口にくわえて甘(あま)い蜜を吸うのでこの名がつきました。

いくつかの別名があります。「金銀花」というのは、花が２個(こ)ずつ並(なら)んで咲(さ)き、咲き始めは白色で散るころには黄色に変わることからつけられました。また、「忍冬(ニンドウ)」というのは、冬の寒さに堪(た)えて緑の葉っぱをつけていることからこう呼(よ)ばれるそうです。

常緑(じょうりょく)または半常緑のつる性(せい)の低木。茎(くき)は分かれながら長く伸(の)びて、他の植物に絡(から) みつき茂(しげ)っていきます。花の長さは３～４cmで、５～７月ごろに咲きます。甘いいい香りです。実は５～７mmほどで、秋の終わりには青黒色でピカピカになります。

スギ　(ヒノキ科)

山の木の“代表選手”といえるほど、どこの山にもいっぱい生えています。そのほとんどは第２次世界大戦が終わってから植林されたもので、山全体がこの木ばかりのところもあります。

木の成長が早く、真っすぐできれいなため、建築材(けんちくざい)として非常(ひじょう)に役に立っています。しかし、飛び散る花粉(かふん)が花粉症(かふんしょう)の原因(げんいん)ともなっています。

長生きする木で、神社にもよく植えられており、樹齢(じゅれい)数百年といわれる大きな木が、どっかと腰(こし)をすえていることがあります。

葉は左右にとげとげがあるひものようなものですが、これは長さ１～２cmの小さな葉が寄(よ)り集まったものです。冬になるとその先に雄(おす)の花ができ、花粉をいっぱいまき散らします。実は直径2～3cmの球形で、まわりにはとげがいっぱいあります。

花が咲(さ)いてから１年後の１０月ごろに熟(じゅく)します。丸い実の中には小さな種がいっぱいつまっています。

▲葉と雄花

▲実

スモモ　(バラ科)

ウメやモモの仲間です。モモにくらべて酸味（さんみ）が強いので、この名前がつきました。ハダンキョウともいい、原産国は中国です。 ヨーロッパ原産のスモモは、「プラム」（英語）、とか「プルーン」（フランス語）といいます。

木の高さは、7～8mで、4月ごろ真っ白な花を咲(さ)かせます。 花の周りには、ミツバチたちが飛び回っています。スモモは、別のスモモの木の花粉(かふん)がないと実がつきませんので、ハチがきてくれるのはスモモの木も大喜(おおよろこ)びなのです。

スモモの実は、品種によってちがいますが、4～5cm、7～8月にかけて熟(じゅく)します。緑色の実が、赤くなり、濃(こ)い赤紫色(むらさきいろ)になったら食べられます。皮は酸(す)っぱいですが、中身は甘(あま)くておいしいです。

鉄分が多く含(ふく)まれていて体にいいので、生で食べるほかにジャムにしたり、乾燥(かんそう)させて菓子(かし)や料理の材料に利用されています。

ズミ　(バラ科)

春、丸い赤いつぼみがつき、やがて開花すると、真っ白な花が枝(えだ)いっぱいに広がります。まるで雪のようにはなやかです。秋には赤い小さな実がなり、ナシかリンゴのようなので、別名コナシとか、コリンゴとか呼(よ)ばれますが、実際(じっさい)はノイバラのような実です。酸(す)っぱい実という意味の酸実(ずみ)です。名の通り、まずくて食べられません。

生育地はリンゴと同じ、主に東日本の涼(すず)しい地方で、西日本では山の高い所でしか育たないそうです。不思議なことに、ここならやまで育っています。私(わたし)たちが活動を始めたとき、すでに成木でした。推定樹齢(すいていじゅれい)50年以上、自生とは考えにくいので、おそらく植えられたものでしょう。

生育場所は田んぼの近くで、竹林と大きなコナラがそばにあり、日当たりはやや悪いですが、湿(しめ)り気があり、夏の暑い日差しがさえぎられる所です。樹勢(じゅせい)が衰(おとろ)え、花が咲(さ)かない年もありました。会員による周辺整備(しゅうへんせいび)のかいもあって、ここ数年は毎年美しい花を咲かせ、道行く人々を楽しませてくれています。みんなで大事に守り育てたい木です。ズミは奈良県の絶滅寸前種(ぜつめつすんぜんしゅ)に指定されています。

センダン　(センダン科)

落葉高木です。普通(ふつう)は5～10mですが、20mに達するものもあるそうです。

葉は互生(ごせい)、奇数(きすう)の羽状複葉(うじょうふくよう)です。小葉（普通には葉に見える部分）が葉軸（じく）のように見える部分の左右に鳥の羽のように並(なら)んだのを羽状複葉(うじょうふくよう)と言います。小葉は長さ3～6cm、幅(はば)は1～2.5cmで、卵(たまご)を細長くして、先をとがらせたような形です。

房(ふさ)のように集まった小さな薄紫色(うすむらさきいろ)の白い5弁(べん)の花が5～6月に咲(さ)きます。

10～11月に1.5～2cm の楕円形(だえんけい)の薄い黄色の実ができます。実は、ひびやあかぎれに、樹皮(じゅひ)は虫下しに、葉は虫除(むしよ)けなどの薬用にされ、木は家具や楽器などに利用されます。

「せんだんは双葉(ふたば)より芳(かんば)し」という諺(ことわざ)があります。立派(りっぱ)になる人は小さいころからすぐれているというたとえです。しかし、この「せんだん」はビャクダン（白檀）という貴重(きちょう)な香木のことで、ここで取り上げているセンダンではありません。

センリョウ（センリョウ科）

マンリョウと同じく秋に赤い実をつけ、縁起物(えんぎもの)として正月飾(かざ)りにも使われる常緑(じょうりょく)の低木です。こちらの赤い実も野鳥が食べて種を運ぶのでしょう。ならやま林内のところどころで見かけます。中には白い実のなるセンリョウも見られ、紅白(こうはく)の取り合わせは特に縁起がよく、庭木としても好まれます。

マンリョウや百両と呼(よ)ばれるカラタチバナ、十両と呼ばれるヤブコウジは、どれもヤブコウジ属(ぞく)の仲間で、赤い実を葉の下に下向きにつけます。センリョウはセンリョウ属で、ヤブコウジ属とは違(ちが)う仲間で、赤い実を葉より上に上向きにつけます。

葉のつき方も、マンリョウなどは互生(ごせい)ですが、センリョウは対生の葉が節ごとに 90 度ずつずれてつく十字対生です。葉は細長い楕円形(だえんけい)で上半部にはあらい鋸歯(きょし)が目立つのも特徴(とくちょう)です。

夏に黄緑色の小さい花を咲(さ)かせますが、古い時代にできたガクも花びらもなく、ずんぐりした雌(め)しべの横に雄(お)しべ 1 本がついただけの原始的な形をしていて、生きた化石といわれています。赤い実をよく見ると実のてっぺんと横っ腹(よこっぱら)にほくろのような黒い点がありますが、それらは柱頭（雌しべの先）と枯(か)れ落ちた雄しべのあとです。探(さが)してみてください。

ソヨゴ　(モチノキ科)

ならやまにたくさん生えている木で、つやつやした葉が1年中茂(しげ)る常緑樹(じょうりょくじゅ)です。

葉の縁(ふち)は全縁(ぜんえん)で、ひらひらとフリル状(じょう)です。

根が浅いため、たおれやすく、台風の後など根こそぎ横だおしになることがあります。

材はあまりじょうぶでないので、丸太階段(かいだん)や杭(くい)の材料としては使えませんが、工作には使われます。

この木がたくさんあると、森の中がうす暗くなって他の木のじゃまになります。

「たおれやすい」「役に立たない」「じゃまになる」と、里山整備(せいび)の活動では間引かれることが多く、かわいそうな存在(そんざい)です。

しかし、春には、約4cmの花柄(かへい)の先に小さな白い花をいっぱい咲(さ)かせます。秋には赤い実をぶらんぶらんとつり下げて、私(わたし)たちの目を楽しませてくれます。雌雄(しゆう)があり、実をつけるのは雌(めす)の木だけです。

花柄(かへい)とは　花を支(ささ)えるための茎(くき)のことです。通常(つうじょう)緑色ですが、他の色がついていることもあります。また小さな葉がついている場合もあります。

タイサンボク（モクレン科）

タイサンボクは、「大山木」とも書き、「山のように大きくなる木」という意味からこの名がつきました。高さは、10～30mくらいになり、堂々(どうどう)とした姿(すがた)になります。

葉は、15～20cmの楕円形(だえんけい)で、厚紙(あつがみ)のようにかたくしっかりしています。表は濃(こ)い緑色でつやつやしています。裏(うら)には茶色の、ごく短い毛が生えています。

夏の初めに、直径30cmくらいの白い花が咲(さ)きます。ふつうは、高いところに咲くのでなかなか観察できませんが、良い香りがします。

この木は北アメリカの原産で、大きな庭園や公園に植える木として持ち込(こ)まれました。一年中葉が茂(しげ)り、堂々とした大木になります。

「ならやま」にあるタイサンボクは、令和元年をお祝いして記念樹(きねんじゅ)として植えたものです。

タチヤナギ　(ヤナギ科)

ならやま西池の北側の湿地(しっち)に孤独(こどく)に生えているのが、タチヤナギです。株立(かぶだ)ちの木なので、あちらこちらから幹(みき)が出ていて、樹形(じゅけい)はぐちゃぐちゃで、まとまりがありません。

落葉小高木で、春に葉をのばし、花をつけます。葉は長細い楕円形(だえんけい)、花は黄緑色の棒状(ぼうじょう)です。この木は雌株(めかぶ)で雌花(めばな)だけをつけます。あいにく近くに雄株(おかぶ)は見当たらないのに実をつけます。

とても古い木らしく、幹はもう皮だけになって、中心は腐(くさ)ってなくなっています。それでも枯(か)れずに毎年枝(えだ)や葉をのばし、花を咲(さ)かせるのは驚(おどろ)きです。この木のことを親しみをこめて「ど根性(こんじょう)ヤナギ」という愛称(あいしょう)で呼(よ)んでいます。1 年でも長く生き続けてほしいと願いながら、見守っています。

“がんばれ、ど根性ヤナギ!”

タラノキ　(ウコギ科)

山菜として有名な木で、たいへん人気がある落葉低木です。高さは2～5m ほどです。あまり枝分(えだわ)かれせずにまっすぐに立ち、幹(みき)には真横に伸(の)びるたくさんのトゲがあります。

葉は幹の先からたくさん出て、まるで大きなパラソルをひろげたようです。葉は羽状複葉(うじょうふくよう)といって小さい葉が鳥の羽のように集まって1枚(まい)の葉になっています。全長は50～100cm に達する大きなものです。葉柄(ようへい)は長さ15～30cm で、基部(きぶ=根元の部分)はふくらんでいます。

花は8～9月ごろ、枝先に長さ30～50cm ほどある大きな花序(かじょ)を出し、多数の小さな白い花を咲(さ)かせます。山に花がほとんどなくなったころですので、この大きな白い花はよく目立ちます。

新芽は「タラの芽」と呼(よ)ばれ、特に、そのてんぷらは山菜の中の絶品(ぜっぴん=ほかに比〈くら〉べようがないほどすぐれたもの)として珍重(ちんちょう)されています。

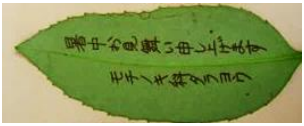
▲幹のトゲ

▲食用になる芽

タラヨウ　(モチノキ科)

一番の特徴(とくちょう)は葉っぱの裏(うら)に字が書けることです。小枝(こえだ)などで字を書くと、書いたところが黒く変色して、そのまま残ります。葉書の木とも呼(よ)ばれ、郵便局(ゆうびんきょく)のシンボルツリーになっています。郵便局へ行った時に気をつけて見てください。この木が植えてあることがあります。今でも字を書いて切手（きって）を貼(は)れば、定形外郵便として実際(じっさい)に送ることができます。

常緑高木(じょうりょくこうぼく)で高さ 10～20m。葉は大きくて厚(あつ)く、長さ 20cm ほどになります。縁(ふち)に細かい鋸歯(きょし)があります。雄(おす)の木と雌(めす)の木があり、雌の木には秋になると赤い実が鈴(すず)なりになります。花は初夏に咲(さ)き、どちらも黄緑色で多数集まって咲くので目立ちます。



ダイオウグミ (グミ科)

グミの中でも大きな実をつけるので「ビックリグミ」ともいわれる木です。また「唐(トウ)グミ」ともいいます。

木の高さは3mぐらいで、枝(えだ)にはトゲがあります。落葉性(せい)で、葉のうらは銀色に光って見えます。

4月に黄色い花をつけ、6 月ごろ 2 ㎝くらいの赤い実をつけます。うれると、とても甘(あま)くなり、そのままで食べることができます。

グミは、夏に実がなる夏グミと秋に実がなる秋グミがあります。ダイオウグミは夏グミのなかまです。

花
(4月)

実
(6月)

チャノキ　(ツバキ科)

チャノキはツバキのなかまです。その葉で日本茶や紅茶(こうちゃ)をつくるために植えられています。

原産地はインドやベトナム、中国西南部などの暖(あたた)かいところです。約900年まえに中国から日本に種が持ち込(こ)まれました。

木の高さは2m、常緑(じょうりょく)です。葉の長さは6～9cm、長円形です。葉の表はつやつやに光っていて、葉の縁(ふち)には、こまかいギザギザがあります。

11月ごろ、枝(えだ)の先の方に、2～3cm くらいの白い花がつきます。実は緑色で、しだいに茶色にかわると、3つにさけて、中にまるい種が見えてきます。

《5月には、チャノキの葉をつんでお茶をつくってみよう》

① 柔(やわ)らかい若葉(わかば)を摘(つ)んできます。

② きれいに洗(あら)って5分ふかします。

③「ざる」にひろげてさまします。

④ 手でもみながら、乾(かわ)かします。

⑤ よく乾いたら、おいしい新茶のできあがりです。

ツクバネウツギ　(スイカズラ科)

５月、ならやまのあちらこちらで白い花をたくさん咲(さ)かせます。花の形は変わっていて、根元から細い管が伸(の)び、その先がラッパのようになっています。ラッパの縁(ふち)は5つに分かれて半円を描(えが)き、なかなかおしゃれです。

花のつけ根には赤いがくがあり、5個(こ)のがく片(へん)が放射状(ほうしゃじょう)に並(なら)んでいる様子が、羽根つきの羽に似(に)ていることからツクバネウツギと名づけられました。

花が散ってもがくは残り、がくの下にできた実が熟(じゅく)していきます。

がく片とはがくをつくる小さい部分のことで、ツクバネウツギでは写真の赤い長細いもののことです。

ツクバネガシ（ブナ科）

正月の羽根つきに使う羽根を「つくばね」といいます。枝（えだ）先に集まってつく葉が似（に）ているので、この名前になりました。

日かげを好み、若草山(わかくさやま)に通じる山道で見かけることはありますが、あまり見ることのない珍（めずら）しい木です。ならやまでは、鳥観の丘（とりみのおか）に通じる観察路のわき道をおりた所に１本あります。おさなくて、まだドングリはできません。名ふだをかけています。

冬でも緑の葉をつけます。葉の表は光沢（こうたく）があり、細身で長く、少し裏側（うらがわ）にそる特徴（とくちょう）があります。鋸歯（きょし）のギザギザは先に少しだけ。ない場合もあります。

なかまのアカガシと混同（こんどう）されますが、アカガシの葉は鋸歯がありません。葉で見分けはつきます。共通点は「２年なり(花から実がなるのに２年かかる)」の風媒花（ふうばいか）で常緑樹（じょうりょくじゅ）であることです。

ドングリは区別がつかないぐらい似ています。オオツクバネガシというツクバネガシとアカガシの雑種（ざっしゅ）もあります。

トウネズミモチ　(モクセイ科)

ネズミモチによく似(に)た木で高さ 15mくらいになります。明治時代に中国から運び込(こ)まれ、排気(はいき)ガスに強いことで街路樹(がいろじゅ)としてたくさん植えられました。日当たりの良いところが好きですが、今では増(ふ)えすぎて嫌(きら)われものになっています。

葉は長さ 6～12 ㎝でネズミモチに比(くら)べ少し大きく、楕円形(だえんけい)で、両端(りょうたん)はとがっています。葉は厚(あつ)く丈夫(じょうぶ)で少しつやがあって、葉の表は濃(こ)い緑色ですが裏(うら)は薄(うす)い緑色です。

6～7月ごろ、小さな白い花が咲(さ)き、昆虫(こんちゅう)が集まります。実はだ円形で、11月ごろには熟(じゅく)して青黒く色づきます。この実を食べた鳥が、この種をふくんだフンをまき散らすので、あちらこちらで小さな苗(なえ)が芽を出します。

ネズミモチとは、葉の太い葉脈(ようみゃく)と枝分かれした支脈(しみゃく)がはっきりと見えることで見分けられます。

トベラ（トベラ科）

常緑(じょうりょく)の低木です。葉は互生(ごせい)の単葉です。卵(たまご)をさかさにして細長くしたような形で、長さ5～10cm、幅(はば)2～3cmです。葉は厚(あつ)めで、少し内側に巻（ま）き込(こ)んでいます。表面には光沢(こうたく)があります。雌雄異株(しゆういしゅ)です。

4～6月に黄白色の5弁(べん＝花びらのこと)の花をたくさんつけます。花には良い香りがあります。

実は雌株(めかぶ)にできます。直径1～1.5cmの球形で、11～12月に灰褐色(はいかっしょく)に熟(じゅく)し、3つにさけて、ねばねばした赤い種子が10粒(つぶ)くらい出ます。

庭木や道路の植栽（しょくさい）、公園木などとして利用されています。

ナツハゼ (ツツジ科)

落葉低木で、高さは2～3m。夏の終わりにハゼノキのような紅葉(こうよう)になることから夏ハゼという名がつけられました。葉は互生(ごせい)で、長さ4～8cm、幅(はば)2～4cm の楕円形(だえんけい)です。

5～6月に、たくさんのかわいい小さな花が下向きに並(なら)んでつきます。花の形は釣鐘（つりがね）形で長さは4～5mm、色は赤みを帯びた黄緑色です。

夏～秋に実ができます。実は6～7mm の球形で、初めは赤く、熟(じゅく)すと黒紫色(くろむらさきいろ)になり食べられます。少し酸味(さんみ)がありますが、甘(あま)くておいしいです。山での活動で、この木の前を通るたび、足を止めて「そろそろ熟したかな？ まだかな？」と楽しみに待ちます。ジャムにも加工できます。ブルーベリーとは近縁(きんえん=近い親類)関係にあります。

ナツフジ（マメ科）

夏に咲(さ)き、フジに似(に)ているという意味の名前です。土用(夏が始まる前の時期)のころでもあり、ドヨウフジともいいます。日本の固有種です。

つる性(せい)の落葉低木で、里山や林の中で何かに巻(ま)き付いて伸びてゆきます。上から見ると左巻(ま)きです。葉は互生(ごせい)の奇数羽状複葉(きすううじょうふくよう)で、小葉は長さ2～6cm。7～8月ごろ、長さ10～20cmの花の軸(じく)にフジに似た 1.5cmの淡(あわ)い黄白色のチョウ形の花をたくさんつけます。花の房(ふさ)は葉腋(ようえき＝葉のつけ根)からぶらさがっています。このように、下から上へ、あるいは周りから中心へ小花が並んでつくのを総状花序(そうじょうかじょ)と呼(よ)びます。

果実は長さ6cmの皮の厚(あつ)いさやでぶらさがり、中に直径8mmの平たい丸形の種が入っています。

ナワシログミ　(グミ科)

高さ 2～3mの常緑樹(じょうりょくじゅ)で、大木になることはありません。葉は厚(あつ)くて堅(かた)く、長さは 5～10cm、楕円形(だえんけい)で周りは少し波うっています。葉の表面は濃(こ)い緑色ですが裏(うら)は銀白色です。

10～11月ごろに香りの強い小さな黄色いラッパ状(じょう)の花が咲(さ)き、そのあと小さな俵(たわら)形の実ができます。翌年(よくねん)の 4～5月ごろには長さ1.5cmくらいになり、赤く色づきます。この実は食べられます。

たいていのグミは春に花が咲き、秋に赤い実ができ、冬には葉が落ちるのですが、このグミは仲間とは反対です。

▲花

▲花の後、成長する実

▲食べられる実

▲葉の表(上)・裏(下)

ナンキンハゼ（トウダイグサ科）

中国から伝わった落葉高木で、高さが15mくらいになることもあります。街路樹(がいろじゅ)や公園樹として植えられましたが、元気がよすぎて他の木を圧倒(あっとう)するので、近ごろは敬遠(けいえん)されています。

葉は長さ 5～8㎝、三角形で先が長く伸(の)び、イチョウのように長い葉柄(ようへい)があります。秋になると葉全体が赤くなり美しいです。

7月ごろに長い花穂(かすい)が伸びて、黄色の雄(お)花がたくさんつき、ハチやチョウが集まります。雌(め)花はその穂(ほ)の基部(きぶ＝根元の部分)につきますが、あまり目立ちません。

夏の終わりごろに緑色の球形の実がつきます。11～12月ごろに実は褐色(かっしょく)になり、割(わ)れて中から白い実が3つあらわれます。この白い実は冬になって葉が落ちても、枝(えだ)の上に長い間残っています。ムクドリやキジバトが好んで食べ、堅(かた)い種をフンとして落とすので、あちらこちらで小さな苗(なえ)がふえています。

▲葉と花序(かじょ)

▲雄花と実

▲紅葉

▲熟(じゅく)した実

ナンテン　(メギ科)

ナンテンは、「良い家庭」「福をなす」などのようにすてきな花言葉を持っています。なかでも「愛（あい）は増（ま）すばかり」は、夏に咲（さ）く白い花が赤色になり、冬には真っ赤に実る生長を愛の高まりに見て生まれたそうです

常緑低木（じょうりょくていぼく）で、自然界では1～3mほどに生長します。日本では南天（なんてん）と呼(よ)ばれ、昔から縁起（えんぎ）が良い木として玄関（げんかん）先に置かれることが多いです。鬼門（きもん＝北東）といわれる方角におき、魔（ま）よけの役をはたしていたのでしょう。

他にも難（なん）を転ずる難転の字をあてて、お年寄（としより）が転ばぬように寄(よ)りかかれる木としてトイレ近くに植えられていたようです。

ヌルデ (ウルシ科)

落葉小高木で、高さは5～6m。ウルシに似(に)ています。葉は9～13枚(まい)で奇数(きすう)の小葉からなり、羽状複葉(うじょうふくよう)で、軸(じく)の部分に翼(よく)というひれ(魚の背〈せ〉や腹〈はら〉、尾〈お〉についている小さな膜〈まく〉のようなもの)状(じょう)の葉がつきます。葉に翼のつく植物は珍(めずら)しく、ヌルデの大きな特徴(とくちょう)です。小葉の形は先のとがった楕円形(だえんけい)で、縁(ふち)には鋸歯(きょし)があります。

雌雄異株(しゆういしゅ)で、8～9月ごろに茎(くき)の先に白い、小さな5弁(べん)の花がたくさん房状(ふさじょう)について咲(さ)きます。雌花(めばな)は受粉(じゅふん)するとふくらみ、ほぼ丸い赤らんだ実になり、10～11月には褐色(かっしょく)になって熟(じゅく)します。ウルシほどではありませんが、まれに触(ふ)れてかぶれる人もあります。秋になると美しく紅葉(こうよう)します。

ヌルデの葉にはヌルデミミフシという大きな虫こぶができ、この虫こぶは黒い染料(せんりょう)の原料などに利用されます。

「ヌルデ」という名前は、幹(みき)を傷(きず)つけると白いぬるぬるした樹液(じゅえき)が出るからとか、この液を塗料(とりょう)として使ったからともいわれています。

ネジキ　(ツツジ科)

ならやまで普通(ふつう)に見られ、高さは 5mほどで冬に葉を落とす落葉樹(らくようじゅ)です。幹(みき)は薄(うす)い灰(はい)色で、全体に入る縦(たて)のしわ模様(もよう)が、成長にともなってねじれることからネジキと名づけられました。材そのものもねじれているため、かつて燃料(ねんりょう)をまきにたよっていたころには、割(わ)りにくい木として有名だったそうです。

葉は黄緑色でやや長い卵形(たまごがた)で、先端(せんたん)が少し突(つ)き出し、縁(ふち)は全縁(ぜんえん=ふちがなめらかでギザギザがない)です。5～6月にスズランのような白いつぼ状の花を咲(さ)かせます。一列に並(なら)んで1cm ほどの花を下向きにたくさんつけ、最盛期(さいせいき)には枝(えだ)全体が白っぽく見えるほどです。

冬になると葉を落とした若(わか)い枝(えだ)が赤く色づきます。冬枯(が)れの林の中でつやのある赤い枝と冬芽は美しく、温かみを感じさせます。生け花の材料として店に並(なら)んでいるのを見ることもあります。

近い種類のアセビと同様、葉に毒(どく)があるので、新芽などは食べられません。

ネズミサシ　(ヒノキ科)

常緑(じょうりょく)の針葉樹(しんようじゅ)で高木です。 高さは20m以上になります。 葉は針形(しんけい)で3組の輪生です。長さは2cm前後、針金のように細く、先は鋭(するど)くとがっています。葉は針の集合体のようで、葉先に触(ふ)れると痛(いた)いです。ネズミの通り道に鋭い葉のついた枝(えだ)を置いておくと、ネズミが寄(よ)りつかなくなるところから、この名前になったといわれています。

生育に適(てき)した土地は、日当たりの良いやせ地です。成長が遅(おそ)く、そのために年輪幅(ねんりんはば)がたいへん緻密(ちみつ)です。

雌雄異株(しゆういしゅ)で、4～5月に目立たない花が咲(さ)き、花の後には緑色の小さな丸い実ができ、翌年(よくねん)秋には褐色(かっしょく)になります。

トショウ（杜松）、ムロノキ（椋の木）という別名があります。トショウの名は主に盆栽（ぼんさい）で用いられます。

▲針のような葉

▲幹

▲実

ネズミモチ　(モクセイ科)

高さ5mくらいになる常緑樹(じょうりょくじゅ)で、公園や垣根(かきね)によく植えられています。どこでも生育できる強い木ですが、明るいところが好きで、たくさんの枝(えだ)を横に広げます。

葉は長さ7㎝前後、楕円形(だえんけい)で、両端(りょうたん)はとがっています。葉は厚(あつ)く丈夫(じょうぶ)で、少しつやがあります。平らな葉で、周囲(しゅうい)もなめらかです。葉柄(ようへい)は短くむらさきがかった茶色です。

6月ごろ、小さな白い花がかたまって咲(さ)き、昆虫(こんちゅう)がたくさん集まります。花が終わったあと、小さな楕円形の緑色の実がいっぱいつきます。11月になると青黒く色づき、冬の間も枝についたまま残(のこ)っています。

実の形がネズミのフンに似(に)ていることと、葉がモチノキに似ていることからネズミモチと名づけられたようです。

ネムノキ　(マメ科)

高さ10mくらいになる落葉樹ですが、枝(えだ)があちらこちらへ伸(の)びるので、スギのように真っすぐではありません。根に根粒菌(こんりゅうきん)を持っているので荒地(あれち)で真っ先にあらわれる木です。湿(しめ)った土地が大好きで、池や川の近くによく見られます。

小さな葉がいっぱい集まった羽状複葉(うじょうふくよう)で、夜になると葉が閉(と)じることから、ネムノキと名づけられました。葉は草花のオジギソウにそっくりですが、触(さわ)っても葉は閉じません。

6～7月ごろに枝(えだ)の先から花柄(かへい)を伸(の)ばし、その先にピンク色の花をいっぱいつけます。その形はとても変わっていて、にわとりのトサカのように広がっています。これは突(つ)き出した長いおしべが集まったものです。

9～10月には長さ 10cm前後の豆のさやがぶら下がり、その中に 10～15個(こ)の平たい豆ができます。

ノイバラ（バラ科）

野に生えるイバラという意味でノバラとも呼(よ)ばれます。ならやまにもあちらこちらにあり、1～4mの落葉低木で半つる性(せい)です。木は細長くて、かぎ状(じょう)にまがったトゲがあり、ほかの木にトゲをひっかけて伸(の)び、からみあってこんもりとなります。

葉は奇数羽状複葉(きすううじょうふくよう)で、小葉は3cmほどの楕円形(だえんけい)、まわりに細かい鋸歯(きょし)があります。

4～6月に白い5弁(べん)の2cmほどの花がたくさん咲(さ)きます。黄色い雄(お)しべがたくさんつききれいです。やさしい香りがして蜜(みつ)も多く出します。

秋には6～9mmの球形の実をかたまってつけ、赤く熟(じゅく)すとよく目だちます。

ノブドウ　(ブドウ科)

つる性(せい)の落葉低木で、フェンスや他の植物にからまって上へ伸(の)びていきます。葉はブドウやヤマブドウに似(に)ていますが、別属(べつぞく)です。

葉は手のひらのような形で、長さ8～11cm、幅(はば)5～9cm、3～5の切れ込(こ)みがあります。秋になると赤く色づきます。7～8月に淡(あわ)い黄緑色の小さな花をたくさんつけます。

秋、直径5mmくらいのほぼ円形の実をつけます。つやつやと光ってとてもきれいです。色は青や紫(むらさき)や白など、実によってさまざまです。本来は白色で、色づいた実は昆虫(こんちゅう)が寄生(きせい)しているからです。寄生しているのは主にブドウタマバエなどの幼虫(ようちゅう)です。ブドウという名がついていますが、まずくて食べられません。ただし、毒(どく)はありません。

▲変形の葉

ハリエンジュ　(マメ科)

ニセアカシアとも呼(よ)ばれ、枝(えだ)にとがったトゲがあり、長さ3～5cm の楕円形(だえんけい)の葉がいっぱいついています。

1枚(まい)の葉は、5～9対(10～18枚)の小さな羽状複葉(うじょうふくよう)で、葉が枝にくっつく箇所(かしょ)には山形の大きなトゲがあります。生育は早く、15mくらいの大木になります。

5～6月ころ、フジの花のように房状(ふさじょう)で、甘(あま)い香りのある白色のチョウ形の花が咲(さ)きます。この花からミツバチが集めた蜜(みつ)は高級品です。

荒(あ)れ地でも育つことから明治時代に北アメリカから移入(いにゅう)され、川の堤(つつみ)に植えられ、公園や街路樹(がいろじゅ)としても利用されました。元気が良すぎて周りの木を追い出すことから、最近では嫌(きら)われものになっています。

秋に枝から葉がぬけ落ちた葉痕(ようこん)は、形が非常(ひじょう)に変わっていて、ある動物の顔のようにも見えます。(P.161)

葉痕(何に見えるかな?)

ハンノキ（カバノキ科）

湿(しめ)った所に生える落葉高木です。用水路沿(ぞ)いにたくさん生えていましたが、日陰(ひかげ)を作って田畑の邪魔(じゃま)になったり、サイクリングロードにおおいかぶさるなどの理由で、だいぶ切られてしまいました。しかし、残されたものは大きく元気に生育しています。

早春２月ごろ、ならやまはまだ寒く、ほとんどの落葉樹(じゅ)が枯(か)れたように眠(ねむ)っているとき、ハンノキの枝先(えださき)を見上げると、イモムシのようなものがぶら下がっているのに気づきます。この褐色(かっしょく)の3㎝ぐらいのイモムシ状(じょう)のものは、やがて８㎝くらいに伸(の)びて、黄色い花粉(かふん)が飛び出してきます。雄(お)花です。

一方、雌(め)花は、よほど枝に近づかないとわかりません。雄花よりも少し上にある2㎜ほどの赤い丸いものが雌花です。さわるとねばねばしています。ここに風で飛んできた花粉がくっつくのですね。

春から夏に葉を茂(しげ)らせ、秋に黒い楕円形(だえんけい)の実をつけます。こげ茶色の細かい鱗片（りんぺん）が集まってできた実は、面白い形なので、木の実の工作によく使われます。

ヒイラギ（モクセイ科）

葉の鋸歯（きょし）がするどくとがりトゲ状(じょう)になっていて、昔から邪気（じゃき＝びょうきをもたらすという悪い空気）をはらう力があると信じられています。今でも節分の日には戸口にイワシの頭とともに枝(えだ)をかざる習慣（しゅうかん）が全国にのこっています。このトゲにさわると痛(いた)いので刺(さ)さるとヒリヒリいたむ木の意味からヒイラギという名前になったといわれています。ただこのトゲも老木になると鋸歯がなくなり全縁（ぜんえん）になります。

葉はモクセイ科の特徴（とくちょう）で対生です。モクセイ科の植物には、キンモクセイやネズミモチも含(ふく)まれますが、ヒイラギと同じくどれも対生で実の色も黒っぽい色をしています。それに対しモクセイ科によく似(に)たモチノキ科の植物は、どれも互生(ごせい)で実は鮮(あざ)やかな赤い色をしています。

ヒイラギは雌雄異株（しゆういしゅ）で雄(おす)と雌(めす)の木があり、もちろん実がつくのは雌の木です。どちらも秋に香りのある白い花を咲(さ)かせ、雌の木には翌年(よくねん)の初夏に黒っぽい紫色(むらさきいろ)の楕円形(だえんけい)の実がつきます。クリスマスに飾（かざ）られるクリスマスリースに使われるトゲのある葉はヒイラギに似ていますが、モチノキ科のセイヨウヒイラギで、実の色もあざやかな赤色でまったく別の種類です。

ヒサカキ　(ツバキ科)

低木で高さは 1～2m。葉はだ円形で光沢(こうたく)があり、葉のふちには小さなギザギザが並(なら)んでいます。冬になっても落葉はせず、いつも青々としています。この葉は、神さまや仏(ほとけ)さま向けの生け花としてもよく使われます。

3～4月ごろ、小枝(えだ)の周りにつぼのような形をした長さ 5mm くらいの小さな花をいっぱいつけます。雄(おす)の花は白色ですが、雌(めす)の花は紫(むらさき)色です。花は悪臭(あくしゅう)でガスもれのように臭(にお)います。実は緑色の球ですが、10～11月ごろになると黒紫色(くろむらさきいろ)に変わります。

▲花

▲果実

ヒノキ　(ヒノキ科)

ヒノキはスギに次いで山にたくさん生えている木です。天然の木は少なく、皆(みな)さんが見ているのはほとんどが植林されたものです。

スギに比(くら)べて成長は遅(おそ)いので、よくしまっていて堅(かた)くて上質(じょうしつ)の材がとれます。建築材(けんちくざい)として使われるばかりでなく、水にも強いので、雨のよく当たる場所や風呂場(ふろばの浴槽〈よくそう〉)でも活用されています。お母さんが毎日使っているまな板もそうです。また、お寺や神社を支(ささ)えている柱にはなくてはならないものです。

団扇(うちわ)のように大きく、平たい葉に見えますが、本当の葉は長さ２ミリ前後の小さなもので、これが何百も寄(よ)り集まったものです。

3～4月ごろに細枝(ほそえだ)の先に小さな茶色の花をつけます。開花期には雄花(おばな)の花粉(かふん)がいっぱい飛び散ります。スギと同じように花粉症(かふんしょう)の原因(げんいん)となっています。実は緑色の小さなものですが、10月ごろには5mm くらいになり、色も茶色に、そして堅(かた)くなります。実の中には小さな種がいっぱいつまっています。

▲実(秋)

ヒメウツギ　ユキノシタ科

1.5mぐらいの背(せ)の低い木で、日当たりのよい所を好み、株立ち(かぶだち=茎〈くき〉や枝〈えだ〉が一つの株から生えること)してよく枝分わかれするため、こんもりとした形になります。冬には葉を落とし、春にはまた新しい葉が出てきます。

葉は対生で、長さ4~8cm、幅(はば)1.5~3cmの長楕円形(ちょうだえんけい)で先がとがっています。ふちには細かい鋸歯(きょし)があり、表面に細かい毛があるのでざらっとしています。

5~6月に枝の先に白い小さな花を円錐状(えんすいじょう)にかたまってつけます。花弁(かべん)は5枚(まい)で、やや下向きに咲(さ)きます。たくさん咲くと木全体がまっ白に見えます。

種は小さく長さ 0.8mmの楕円形で、片側(かたがわ)に膜状(まくじょう)の翼(つばさ)があります。

フジウツギ　(フジウツギ科)

高さ 1.5mぐらいの木です。ならやまを整備(せいび)しはじめたころに植えられました。

花の色や咲(さ)き方がフジ(藤〈ふじ〉)に似(に)ていて、葉が対生でウツギに似ているのでフジウツギと名づけられました。

茎(くき)や枝(えだ)の断面は四角形で、稜(りょう＝角)があります。葉は先のとがった楕円形(だえんけい)で、縁には低く鋭い鋸歯(きょし)があります。

落葉樹(らくようじゅ)です。冬は枯(か)れ木のように見えますが、7～8月に紫色(むらさきいろ)の小さな花が房(ふさ)のようにかたまって咲きます。ひとつひとつの花は1cmほどの筒状(つつじょう)で、先が4つに分かれ外側に毛が生えています。よい香りがあり、蜜(みつ)が多いのでアゲハチョウなどがたくさん集まります。でも全草が有毒(ゆうどく)です。

フユイチゴ (バラ科)

冬に熟(じゅく)すキイチゴなので、フユイチゴ(別名カンイチゴ)といいます。

9～10月に白い五弁(べん)の花が5～10個(こ)かたまってつきます。実は集合果で、11～1月に直径1cmほどの球形の赤い実がつき食べられます。

低い山のふちや林の中にふつうに生える常緑(じょうりょく)小低木です。つる植物のように地表をはいまわり、高さは30cmぐらいです。

茎(くき)や枝(えだ)や葉のうらに褐色(かっしょく)のまがった短い毛がたくさん生えており、小さなトゲがついているものもあります。葉は5～10cmの円形でふちに細かい鋸歯(きょし)があり、表面はつやがあります。

ブルーベリー　(ツツジ科)

北アメリカが原産の木です。品種改良が進んで、世界に約450もの品種があります。一般的(いっぱんてき)に寒い所を好む木です。20年ほど前から、日本でもさかんに栽培(さいばい)されるようになりました。

落葉樹(らくようじゅ)で、1.5m くらいの低い木です。葉は互生(ごせい)で、長さは5～8cm、先がとがった卵形(たまごがた)で、鋸歯(きょし)があるものとないものとがあります。 3～5月に、小型(こがた)のスズランのようなつぼ形の花が咲(さ)きます。花びらは白やピンク色で、先端(せんたん)が浅く裂(さ)けています。

7～8月にかけて実がうれてきます。赤い実が黒紫色(むらさきいろ)になって、表面に白い粉(こな)が出てきたら食べごろです。おいしくなっていますよ。

実は甘(あま)く体にもいいので、そのまま食べたり、ジャムやジュースに加工したり、乾燥(かんそう)したりして利用されます。

ボタンクサギ　(クマツヅラ科)

中国原産の木。日本でも観賞用(かんしょうよう)に栽培(さいばい)され、ならやまには野生化した株(かぶ)があります。

高さ1～2mの低木で冬に葉を落とします。春に出る葉は大きな丸形で先が少しとがっています。裏(うら)に毛が密生(みっせい)しています。

7～8月に枝(えだ)先にピンク色の小さな花が、手まり状(じょう)に咲(さ)くのでアジサイのように見えます。近くに行くと甘(あま)い匂(にお)いがしますが、葉をちぎったりもんだりすると、くさい臭(にお)いがします。

ボタンのような花のくさい木ということで、牡丹臭木（ボタンクサギ）の名前がついています。

繁殖力(はんしょくりょく)はとても強く、地下茎(ちかけい)から芽を出して広い範囲(はんい)に茂(しげ)ります。

マグワ　(クワ科)

カイコが葉を食べる木として有名です。落葉高木で、高さは 3～10m、葉は互生(ごせい)、形は深い切れ込(こ)みのあるものから、切れ込みのないものまでいろいろで、うすくてつやがあり、鋸歯(きょし)があります。

雌雄異株(しゆういしゅ)で、小さなふさのような黄緑色の花が咲(さ)きます。実は楕円形(だえんけい)でイチゴに似(に)ているのでクワイチゴの名があり、熟(じゅく)すと、濃(こ)い紫(むらさき)色になり食べられます。

絹織物(きぬおりもの)の原料になるカイコのまゆを取るために、カイコを飼育(しいく)する農家はカイコの餌(えさ)としてマグワを畑に栽培(さいばい)しています。その畑では葉をつみ取りやすくするために木の高さを低く切りつめています。

なかまの木にヤマグワがあります。マグワによく似(に)ていますが、葉はマグワよりつやが少なく、先はするどくとがっています。マグワの実の表面には、少し毛羽立ちがありますが、ヤマグワの実は毛羽立ちが大きくて目立ちます。この毛羽立ちのようなものは、花柱というめしべの先の部分がのびたものです。

マグワやヤマグワにはクワコというカイコの祖先(そせん)といわれているガの幼虫(ようちゅう)がいたりします。この幼虫はカイコによく似ています。大昔の中国で、クワコを改良してカイコを作ったといわれています。

マダケ　(イネ科)

▲節の環(わ)が２本

直径15cm　高さ20mにもなります。古くから日本へ持ちこまれたといわれていますが、もともと自生していたとする説もあります。

弾力性(だんりょくせい)があり、曲げや圧力(あつりょく)に対する抵抗性(ていこうせい)が強いことから、弓、定規(じょうぎ)、ざる、かご、茶道具などの細工物・工芸品などに古くから利用されてきました。発明王エジソンは白熱電球の発光体として耐久性(たいきゅうせい)の良い日本のマダケを用い、白熱電球の実用化に成功しました。

マダケの皮は無毛で柔軟性(じゅうなんせい)に富むことから、プラスチック製品(せいひん)が普及(ふきゅう)するまでは、食品を包むのに利用されてきました。

よく似(に)たタケにモウソウチクがありますが、節をよく見ると見分けられます。節に環（わ）が2本あるのがマダケで、1本がモウソウチクです。モウソウチクの写真と見比(みくら)べてください。マダケのタケノコは5～6月に出ます。食べられますが苦みがあり市場にはあまり出回りません。

タケ類は花が咲(さ)くと枯(か)れます。マダケに花が咲くのは、120 年周期説が有力とされています。日本では1960年代にいっせいに花が咲き、マダケ林の約　1/3　が枯(か)れたそうです。その結果(けっか)マダケ林よりもモウソウチク林の方が多くなりました。

マユミ（ニシキギ科）

よくしなるので、昔は弓を作ったことからこの名前がつきました。マユミのマは真という字を当て、神聖(しんせい)なものを意味します。良い名前ですね。

夏のはじめに緑白色の花をつけ、秋に淡紅色(うすべにいろ)の実がなります。花弁(かべん)や雄(お)しべの数はそれぞれ4つで、実には4つの角があり、熟(じゅく)すと4つにさけます。枝(えだ)にも少し角ばった部分（稜：りょう）が4つあり、4に縁（えん＝深い関係、つながり）のある木です。

このような特徴(とくちょう)を「4数性(すうせい)」といいます。多くの植物で、かかわりのある数字がだいたい決まっています。例えば、サクラやアサガオの仲間は5に縁のある「5数性」、ユリやアヤメの仲間は3に縁のある3数性です。植物を観察するときには、花の色や構造(こうぞう)だけでなく、花びらやガク、雄しべの数などにも注目して見てください。きっと楽しい発見があるでしょう。

マユミは落葉樹(らくようじゅ)で細かい鋸歯(きょし)のある対生の葉は秋に紅葉(こうよう)し、しばしば葉脈(ようみゃく)に沿(そ)って緑色が残り美しい色合いとなります。日の当たり具合によっても変わるので、色の違(ちが)いにも注目して見てください。

マルバアオダモ　(モクセイ科)

ならやま自然の森と里山林に生育する落葉樹(らくようじゅ)で、葉はやや薄(うす)く羽状複葉(うじょうふくよう)です。マルバといっても、円形でなく、楕円形(だえんけい)の先のとがった葉です。マルバの意味は「鋸歯(きょし)がなく全縁(ぜんえん)」ということです。

春に白い細長い花びらの花をたくさん咲(さ)かせます。木の上にかすみがかかったようにきれいです。ただし、背(せ)の高い木（約 5～10m）で、花は枝先(えださき)の日当たりのよい高い所に咲くので、気をつけて見ないと出あえません。観察路を歩くときは、足元に気をつけて歩いてください。でもときどき立ち止まって、上を見上げましょう。春のならやまには、マルバアオダモはじめ、白やピンクや黄色のいろいろな花が咲いています。

同じ仲間のアオダモは、野球のバットの材料として有名ですが、このマルバアオダモはバットにはなりません。また庭木として人気の、シマトネリコも仲間の木です。

マルバヤナギ　(ヤナギ科)

落葉高木で雌雄異株(しゆういしゅ)です。高さは10mほどになり、幹(みき)もかなり太くなります。性質(せいしつ)は湿地(しっち)を好み、川や池のほとりなどでよく見かけます。耕作(こうさく)を放棄(ほうき)した水田跡(あと)などでも見られます。

ヤナギ類は細長い葉のものが多いですが、マルバヤナギは葉に丸みがあるので名前に「マルバ」がついています。葉の縁(ふち)には鋸歯(きょし)があります。葉の長さは5～15cm、幅(はば)は2～5cmです。

花期は4～5月で、ヤナギ類の中では最も遅(おそ)く、葉が開いた後に開花します。花は目立たない黄色みを帯びた穂(ほ)のような形で、やがて実がつき、それがはじけると綿毛(わたげ)のついた、ごく小さな種が空中に飛び出します。種のついた綿毛は「りゅうじょ（柳絮）」と呼(よ)ばれ、ふわふわと空中をただよいます。

幹から樹液(じゅえき)が出ることがあり、樹液を好む昆虫(こんちゅう)が集まっていることがあります。

▲葉の拡大

▲種子の付いた綿毛

▲幹

マンリョウ（サクラソウ科）

漢字で書くと昔のお金の単位の万両です。今なら何億円といったところでしょうか。一本の茎(くき)がすっと立ち上がり、その先に鋸歯(きょし)が波状(じょう)になった常緑(じょうりょく)で、対生の葉が丸く集まります。木は成長しても幹(みき)が太くなることはなく、数年で新しい枝(えだ)にかわります。大きくなっても１mほどの低木で、形がよく、庭木に好まれます。

秋にセンリョウより大きな赤い実を多数つけるので、大きさでも数でもセンリョウより単位が上のマンリョウの名前がつきました。

縁起物(えんぎもの)で、正月飾(かざ)りとしても大切にされます。紅白(こうはく)でそろえるとさらに縁起がよいので、庭先や日本庭園で実が白いシロミノマンリョウと合わせて植えられているのをよく見かけます。

センリョウの実は葉の上につき目立ちますが、マンリョウの実は葉の下に下向きにつくので、うっかりすると見逃(みのが)してしまいます。それでも鳥たちはよく知っていて、特にヒヨドリなどはこの実の赤い色に食欲(しょくよく)をそそられ好んで食べます。ただし、味の方はそれほどでもないのか、春先や夏ごろまで意外と長く赤い実が残っています。

鳥に食べられた実の種はフンに混(ま)じって色んな所に落とされ、仲間をふやします。ならやまの里山林内でも観察路沿(ぞ)いや林の中のあちらこちらで見かけます。夏のさかりの7月ごろ、アサガオのように根元でくっついた5枚(まい)の花びら（このように花びらがくっついた花を合弁花〈ごうべんか〉といいます）を外に反(そ)り返らせ、真ん中がそばかす模様(もよう)の白いかれんな花を下向きに咲(さ)かせます。

ミカンのなかま (ミカン科)

ミカンの仲間は、ミカン属(ぞく)、キンカン属、カラタチ属に分かれます。

日本では「ミカン属」が多く栽培(さいばい)されています。

ならやまには、「ハッサク」「ウンシュウミカン」「スダチ」「ユズ」「タチバナ」「レモン」などのミカンの木があります。

ハッサク

常緑(じょうりょく)の小高木で、葉は互生(ごせい)、長さは5~7cm、鋸歯(きょし)はなく、濃(こ)い緑色です。枝(えだ)にトゲはありません。5 月ごろに白い花を咲(さ)かせます。花弁(かべん)は 5 枚(まい)で、とても良い香りがします。

夏には、青い実がなり、秋の終わりに黄色く色づきます。10cmくらいの大きさです。12月に収穫(しゅうかく)して、3カ月ほどおいたら食べごろです。サクサクとした歯ざわりと、さっぱりした甘(あま)さのミカンです。 広島県尾道市(おのみちし)で生まれました。

ミカンの葉は、アゲハチョウの幼虫(ようちゅう)のたべものです。春から夏にチョウがきて1mm くらいの卵(たまご)をうみつけます。葉の裏(うら)をよく観察(かんさつ)すると、くろいタマゴや幼虫やサナギが見つかるよ。

▲ナミアゲハの幼虫(ようちゅう)

ウンシュウミカン

11～12月に5～8cmくらいの実がなります。皮がやわらかでむきやすく、とても甘(あま)いので、いちばんよく食べられているミカンです。 日本で生まれた品種です。

スダチ

実は３cmくらいで、とても良い香りがします。

9月に青い実のときに収穫して料理に使います。枝(えだ)に大きなトゲがあります。 徳島県で作られた品種です。

ユズ

実は7cmくらいで、酸味（さんみ）が強く、いい香りがするので、料理や飲み物に使われます。

冬にお風呂(ふろ)に入れて、ユズ湯にしますね。枝に大きなトゲがあります。

タチバナ

実は3～5cmくらいですが、食べられません。

花の香りが良く、京都御所(ごしょ)の紫宸殿（ししんでん）に植えられています。

文化勲章（くんしょう）は、この花をかたどっています。

ミツマタ　(ジンチョウゲ科)

落葉低木です。枝(えだ)が三つ叉(また)に分かれているので、この名前があります。3~4月ごろに三つ叉に分かれた枝の先に黄色い花が咲(さ)きます。花は毛糸などで作った飾(かざ)りの丸い玉のように密集(みっしゅう)して咲き、良い香りがあります。花が終わってから葉が出ます。葉は細長い楕円形(だえんけい)で、互生(ごせい)です。

ミツマタは和紙の原料として有名です。この木の皮から質(しつ)の良い紙ができるので、紙幣（しへい=紙のお金）の主原料になっています。 繊維(せんい)が大変強いのでたいへん強く、水に浸(つ)かっても裂(さ)けるようなことはありません。

ならやまのミツマタは、山中の日当たりの良くないところに生えています。そのため、背(せ)もあまり伸(の)びず、枝(えだ)も細いです。でも毎年きれいな花を咲かせています。

和紙の原料はミツマタのほかにコウゾなどがあります。

▲花

▲三つ叉に分かれた枝

▲葉

▲三つ叉でできた和紙

ミツバアケビ　(アケビ科)

アケビとほぼ同じ落葉性(せい)のつる植物です。アケビとちがって小葉が3枚(まい)であることから、ミツバアケビの名がついています

小葉の長さは2～6cm、幅(はば)は1.5～4cm で卵(たまご)形、先端(せんたん)は少しくぼみ、縁(ふち)は波のような鋸歯(きょし)になっています。また、花の色もアケビと違(ちがっ)て濃(こ)い紫色(むらさきいろ)です。その他のことはアケビとほぼ同じです。

アケビとともにつるは長くのび、丈夫(じょうぶ)で曲げやすいので、つる細工によく使われます。リースやかごなどを作ることができます。

▲つるで作ったかご

ムラサキシキブ（シソ科）

梅雨の雨にぬれ、美しい緑の葉をたくさん茂(しげ)らせているのはムラサキシキブです。枝(えだ)のあちらこちらに、薄紫色(うすむらさきいろ)の小さな花がいっぱい咲(さ)いています。

▲ムラサキシキブの大きな木

サイクリングロード沿(ぞ)いに生えていて、大きな木は4mぐらいになっています。落葉樹(らくようじゅ)で、葉は先のとがった楕円形(だえんけい)で、対生しています。

秋には紫色の小さい丸い実がなります。この美しい実から、平安時代に『源氏物語(げんじものがたり) 』を書いた紫式部(むらさきしきぶ)の姿(すがた)が連想されることで、名づけられたそうです。

▲ムラサキシキブの花

▲ムラサキシキブの実

同じ仲間の木に、園芸種のコムラサキがあります。その実は同じく紫色ですが、ムラサキシキブよりたくさんつきます。ムラサキシキブの実が葉腋（ようえき＝葉の付け根）につくのに対して、コムラサキの実は葉腋から5～6㎜ほど離(はな)れてつくので区別することができます。

花屋でムラサキシキブとして売られているのは、たいていコムラサキです。

メタセコイア（スギ科）

メタセコイアはスギの仲間ですが、冬は葉を落とします。針葉樹(しんようじゅ)は年中緑の葉を持つ常緑樹(じょうりょくじゅ)ですが、針葉樹ではメタセコイアとラクウショウが落葉します。春の芽吹(めぶ)きは明るい緑色ですが、秋には美しいレンガ色に変わり、やがて葉を落とします。別名「アケボノスギ」とも呼(よ)ばれます。環境(かんきょう)が良ければ高さは 50m にもなります。“ならやま”では、苗木(なえぎ)を２本植えて育てています。やがてきれいな三角形の形を作るでしょう。

近くの京阪奈記念公園沿(ぞ)いの広い道路の左右に植えられ、並木(なみき)の美しさが見られます。

大阪市立大学の三木茂博士(はくし)が、化石でメタセコイアを研究しておられ、葉のつき方の違(ちが)いから新しい種類のスギであることを発見されたのです。数年後、中国の研究者が湖北省の山奥(やまおく)で生きているメタセコイアを見つけました。葉のつき方の違いを見つけたという観察のポイントが発見のきっかけになったのです。

モウソウチク　(イネ科)

▲節の環(わ)が１本

日本のタケ類の中で最大で、直径 18cm 高さ 22mにもなる大型種(おおがたしゅ)です。日本へは江戸(えど)時代中期に中国から持ち込(こ)まれたという記録があります。

弾力性(だんりょくせい)や強度などでマダケにやや劣(おと)るものの、肉厚(にくあつ)で、入手のしやすさなどから、花器、ざる、かごの他、建築材料(けんちくざいりょう)や農業や漁業用資材(しざい)として広く利用されてきました。

タケノコは春一番に出て、大型で肉厚(にくあつ)、柔(やわ)らかくてえぐみがなく、春先になくてはならない食材の一つです。ならやまでは4月はじめの収穫期(しゅうかくき)は大人気の一品です。

プラスチック製品(せいひん)の普及(ふきゅう)による竹材需要(じゅよう)の減少(げんしょう)や、中国産の安いタケノコの輸入(ゆにゅう)が増(ふ)え、モウソウチクの林はあまり手入れされなくなりました。竹の生命力は旺盛(おうせい)で、放置された杉林(すぎばやし)や里山林、休耕田(きゅうこうでん)などに広がり、竹林が目立つ斜面(しゃめん)も見受けられます。竹林内は落ち葉がたまることや、やや薄暗(うすぐら)いことから生物多様性(せいぶつたようせい)が損(そこ)なわれ、環境(かんきょう)問題化しつつあります。里山整備(せいび)では、竹林の整備も重要な要素(ようそ)の一つです。

モチツツジ　（ツツジ科）

日本固有（にほんこゆう）のツツジで、日当りのよい低山地に生える木です。春の終わりころ「ならやま」の山の中に入ると、この花があちらこちらに咲（さ）いています。手入れがされていない時は、大木の影（かげ）になり日光不足で花が咲きませんでしたが、今はよく手入れがされているので花を楽しむことができます。

常緑（じょうりょく）低木ですが、春葉と夏葉があり、夏葉は小さくて冬を越（こ）すことから、半常緑樹（はんじょうりょくじゅ）と区分されることもあります。

高さは 0.6～2m、葉は互生（ごせい）し長さ 3～6cm、枝先（えださき）に集ってつき、薄（うす）くて毛が多いです。花は 4～５月ごろ、ひとつの花芽から直径 5cm ほどの大きくて見応（みごた）えのある淡(あわ)い紅紫色（べにむらさきいろ）の花を数輪咲かせます。花びらの一部に濃（こ）いピンク色の模様（もよう）があり、雌（め）しべ 1 本、雄（お）しべ５本です。晩秋（ばんしゅう）に暖（あたた）かい日が続くと咲いていることもあります。枝や葉、萼(がく)には腺毛(せんもう)がたくさん生えていて、触（さわ）るとネバネバします。

ヤクシマオナガカエデ（ムクロジ科）

屋久島（やくしま）固有（こゆう）種の落葉高木です。ならやま里山林の山裾(やますそ)から彩（いろどり）の森にかけて整備し、1997年に宇陀市（うだし）のモミジ研究家の矢野正義さんが、屋久島で採取（さいしゅ）した原種から育てた苗木を譲(ゆず)り受けて植樹しました。秋には黄葉（こうよう）がとてもきれいで、素晴らしい景観が生まれました。

カエデの葉は普通（ふつう）、イロハモミジのように手を広げたような形ですが、この木は分裂（ぶんれつ）しない葉や浅く分裂する葉もありますので、よく見てください。

若い枝（えだ）は黒みがかった緑色、樹皮（じゅひ）は緑色で黒い縦（たて）じまが入ります。

3～4月にかけて花が咲（さ）き、やがてプロペラのような羽がついた種がブドウの房（ふさ）のように垂（た）れ下がります。翼（つばさ）は、ほぼ水平に開きます。植物園などでも、あまり見かけないと思います。春に咲く花、秋は麓（ふもと）を彩る黄葉を見にきてください。

ヤツデ　(ウコギ科)

常緑(じょうりょく)低木です。よく見かけるのは人の背丈(せたけ)より少し大きいくらいの高さのものです。手を広げ、指をいっぱいに開いたような形の大きな葉が特徴(とくちょう)です。

野球のグローブのような形の葉が8つに分かれている「八つ手(やつで)」ということから名がついています。しかし、実際(じっさい)は5~9片(へん)に分かれていて、9片のものが最も多いのです。葉が8片に分かれているということではなく、「八」はたくさんという意味で、縁起(えんぎ)が良い数字だからという説もあります。

茎(くき)は数本集まって出て、それぞれがほぼまっすぐ上に伸(の)びます。10~11月に茎の先に球状(きゅうじょう)に集まった白い花をつけます。実は直径3mm ほどの黒い球形です。

庭木として植えられているのが普通(ふつう)で、ならやまに生えているものは鳥が種子を運んできたものと思われます。

ヤブコウジ　(サクラソウ科)

ならやまでも林内のヤブの中で地下茎(ちかけい)をのばし群生しているのがところどころで見られます。サクラソウ科の中のヤブコウジ属(ぞく)でマンリョウとおなじ仲間です。木の高さは大きくても30cmくらいでおそらくならやまで見る木の中では一番小さな木だと思われます。山林のヤブに生え、花がミカンの古い栽培種(さいばいしゅ)の柑子(こうじ)に似(に)ているのでヤブコウジという名前がつきました。

葉は長楕円形(ちょうだえんけい)で先はとがり、ふちには細かい鋸歯(きょし)があります。葉のつき方は対生ですが、枝(えだ)先に 4～5枚(まい)輪生状(りんせいじょう＝茎〈くき〉の 1 節に葉が 3 枚以上輪のように生えること)につきます。秋に葉の下に下向きにつく赤い実の数も5個(こ)以下とマンリョウ、センリョウ、さらに百両と呼(よ)ばれるカラタチバナより少ないので別名「十両」と呼ばれています。

日本には昔からあったようで、古くは「ヤマタチバナ」と呼ばれ万葉集の歌にもよまれています。また冬でも枯(か)れない緑の葉と赤い実の美しさが古代から愛され、祝い事の飾(かざ)り物にも使われてきました。江戸(えど)時代には、正月の縁起物(えんぎもの)として松竹梅とともに飾(かざ)られ、現在(げんざい)も年末には「十両」の名で花屋さんにならびます。

夏に咲(さ)く小さな白い花は花びらがくっついた合弁花(ごうべんか)ですが切れ込(こ)みが５つ入り５枚の花弁(かべん)のように見えます。花も実も葉っぱをかき分けないとなかなか見つかりません。ならやまでぜひ探(さが)してみてください。

ヤブツバキ (ツバキ科)

ツバキ類は大変多くの園芸種があります。このため「ヤブツバキ」と記すときは、日本に大昔からあるツバキのこととして使われます。冬から春先（2～4月）にかけて花が咲(さ)きます。この時期は花が少ないので、花粉(かふん)を運ぶハナアブなどの昆虫(こんちゅう)をひとりじめできます。甘(あま)いミツでメジロやヒヨドリの野鳥も呼(よ)び、受粉（じゅふん＝実が実ること）の手助けもしてもらえます。そのために花は目立つ赤い色と蜜(みつ)を用意しているのです。

花びらの下半分や 中心の黄色の雄(お)しべの下半分が筒(つつ)のようにくっいています。花がまとまった状態(じょうたい)で落ちるのはこのためです。葉はかたくて厚(あつ)みがあり濃(こ)い緑色で年中「てかてか」しています。太陽の光にかざすとすじがよく見えます。日陰(ひかげ)でも育つ性質(せいしつ)を持っています。「ならやま」の林の中にヤブツバキは少ないですが、園芸種はあちらこちらにあります。観察するときは「チャドクガ」に注意しましょう。幼虫(ようちゅう)は毛に毒(どく)があり触(ふ)れると大変です。葉が、かじられていたら要注意です。

ヤマウルシ　(ウルシ科)

落葉低木で、高さは3mほどです。葉は枝(えだ)の上部に集まって互生(ごせい)し、長さ20～45cm、奇数羽状複葉(きすううじょうふくよう)で、小葉は13～17枚(まい)、下の葉ほど小さくなります。成木の葉は大部分が全縁(ぜんえん)です。幼木(ようぼく)の葉には鋸歯(きょし)があります。葉は秋に紅葉(こうよう)します。

雌雄異株(しゆういしゅ)で、5月ごろに黄緑色の花をつけ、秋には小さな粒(つぶ)のような実が、たくさん房状(ふさじょう)になります。

この木に触(ふ)れるとかぶれ、皮膚(ひふ)に炎症(えんしょう)ができ、ひどいかゆみが生じることがあります。これは樹液(じゅえき)に含(ふく)まれるウルシオールという物質(ぶっしつ)が原因(げんいん)です。

ヤマコウバシ　（クスノキ科）

この木は落葉樹(らくようじゅ)なのに、枯（か）れ葉は冬になっても落ちないのが最大の特徴（とくちょう）です。冬の間、冷たい風にも雪や雨にも耐（た）えて、しっかりと枝（えだ）について落ちないため、近年は受験生のお守りとして人気があります。

不思議はまだあります。雌雄異株（しゆういしゅ）なのに、雌株（めかぶ）だけで実をつけます。日本では雄株（おかぶ）は見つかっていません。実は１０～１１月に熟（じゅく）して黒くなり、中に１つの種子が入っています。

山にある香(こう)ばしい木という名前のとおり、枝や葉を折ったり､揉(も)んだりするといい香りがします。

高さは３～5m、葉は互生（ごせい）で長さは 5～10ｃｍ、全縁（ぜんえん）で波打ちます。４～５月にかけて黄色い小花を咲（さ）かせますが､あまり目立ちません。冬芽は大きく混芽(こんが)といって､ひとつの冬芽の中に葉と花がいっしょに入っています。春には枯れ葉の間から新芽が顔を出します。

ヤマザクラ（バラ科）

サクラという名前はサクラ類という全体を指す言葉です。日本のサクラはヤマザクラ、オオシマザクラ、など10種類の自生種があります。それらから数百種類の栽培(さいばい)品種が生まれています。

ヤマザクラは昔から日本にあり、江戸(えど)時代以前はサクラといえばこの種をいいました。寿命(じゅみょう)が長く大木にもなり、推定(すいてい)500 年になる木もあるそうです。

落葉高木で秋の紅葉(こうよう)もきれいです。特徴(とくちょう)は葉柄(ようへい)に2つの腺体(せんたい)と呼(よ)ばれるいぼ状(じょう)の突起(とっき)があり、葉の縁(ふち)は鋸歯(きょし)になっていますが、細かくて目立たちません。花は赤い若葉(わかば)と同時に開きます、葉柄(ようへい)や冬芽に毛はありません。葉の裏(うら)は白みを帯びています。樹皮(じゅひ)は光沢(こうたく)のある紫褐色(しかっしょく)で、横長の皮目(ひもく)があります。

ヤマハゼ　(ウルシ科)

和ろうそくの原料の木蝋(もくろう)を取るハゼの仲間です。木蝋は実から取ります。木蝋を取るハゼは江戸(えど)時代に琉球(りゅうきゅう=今の沖縄県)から移入(いにゅう)されるようになりましたが、それまではヤマハゼから木蝋を取っていたそうです。

木の姿(すがた)はヤマウルシによく似(に)ています。落葉小高木で、高さ5～8m、幹(みき)は直径10cmほどになります。雌雄異株(しゆういしゅ)で、5～6月に黄緑色の小さな花をたくさん房状(ふさじょう)につけます。

実は小さな、やや扁平(へんぺい)の球形で、直径は7～8mm、房(ふさ)のようにたくさんつきます。熟(じゅく)すと黄褐色(おうかっしょく)になります。 秋には美しく紅葉(こうよう)します。

葉は互生(ごせい)で長さ20～40cmの奇数羽状複葉(きすううじょうふくよう)で、4～6対の小葉からなります。小葉は長さ4～13cm、幅(はば)2～5cmの卵(たまご)のような長楕円形(ちょうだえんけい)で、鋸歯(きょし)はありません。先は長くとがっています。

樹皮(じゅひ)にはウルシオールという物質(ぶっしつ)が含(ふく)まれていて、ウルシほど強くはありませんが、触(ふ)れるとかぶれることがあります。

ヤマフジ（マメ科）

4月終わりごろから5月初めにかけて、野山に薄紫色（うすむらさきいろ）の花を咲(さ)かせます。ブドウのような形をした花のかたまりは 15 ㎝くらいの長さがあり、垂(た)れ下がります。一つ一つは蝶（ちょう）のような形の花です。つる性(せい)の木で日光が当たるところを好む植物です。ならやま自転車道からもよく見ることができます。自分では身体を支(さ)えることができない性質(せいしつ)で、他のものに巻(ま)きついて成長します。つるを伸(の)ばし上へ上へと登り、葉を広げます。つる植物の代表的な木の一つです。

フジは日本に古くからある植物で、つるが右巻(まき)と左巻の 2 種類あります。近くで見られたらどっちかな？ と見てください。

葉は、写真のような形で長さ 20 ㎝前後の大きさがあり、これで 1 枚(まい)なのです。秋には紅葉(こうよう)し、やがて葉を落とし冬を迎(むか)えます。

実は秋には熟(じゅく)して大きく黒色になり、平たく硬(かた)い皮に包まれています。硬い皮を鞘（さや）といいます。やがて熟すと包まれていた豆は、鞘がねじるように割(わ)れて遠くへ飛ばされます。10m 以上も飛ばされることがあります。

フジ蔓(づる)は、ねじれても強いのでいろんな使い方をしてきました。大昔から紐(ひも)や綱(つな)に使ったり、編(あ)んで衣服を作ったりしてきました。工夫をして上手に生活に使っていたのです。

ヤマボウシ（ミズキ科）

街路樹（がいろじゅ）として見かけるハナミズキは、日本からアメリカに贈(おく)られた桜(さくら)のお礼に、大正時代アメリカから贈られてきた木です。別名をアメリカヤマボウシといいます。ヤマボウシはそれと同じミズキ科の木で、昔から日本にある在来種(ざいらいしゅ)です。

どちらも初夏に大きくめだつ花を咲(さ)かせますが、4枚(まい)からなる白い花びらのように見えるものは、葉が花びらのように変形した苞（ほう）と呼(よ)ばれるもので、花びらではありません。その証拠（しょうこ）に、苞の下にガクがありません。ガクももとは葉が変形してできたものです。それが苞として残り、花びらのように見えているのです。

本当の花は 4 枚の苞の真ん中にあり、小粒(こつぶ)でたくさんの花を咲かせます。ヤマボウシつまり「山法師」の名前は、真ん中の花の部分を僧兵（そうへい＝延暦寺では山法師と呼ばれた）の頭、白い苞を頭巾（ずきん）に見立ててつけられた名前です。

ヤマボウシとハナミズキの違(ちが)いは、苞の形の先が尖(とが)っているのがヤマボウシ、へこんでいるのがハナミズキです。葉が出る前に花が咲くのがハナミズキ、葉が出てから咲くのがヤマボウシです。秋に熟(じゅく)す実についても、それぞれ形が異(こと)なります。味もヤマボウシは甘(あま)くておいしく食べられますが、ハナミズキは食べられません。どちらも葉は対生で冬に葉を落とす落葉樹(らくようじゅ)です。ヤマボウシには常緑(じょうりょく)の種類(トキワヤマボウシ、ジョウリョクヤマボウシなど)もあります。

ヤマモモ　(ヤマモモ科)

多くは枝先(えださき)に複数(ふくすう)の葉が束になっている常緑(じょうりょく)の高木です。高さは10mほどになります。葉は堅(かた)く、つやのない深緑色(ふかみどりいろ)、長さは10cmくらいの長楕円形(ちょうだえんけい)で、成木の葉は全縁（ぜんえん）ですが、幼木(ようぼく)は鋸歯(きょし)のあることが多いです。

雌雄異株(しゆういしゅ)で、3~4月に房状(ふさじょう)の小さな桃色(ももいろ)の目立たない花が咲(さ)き、6月ごろに暗赤色(あんせきしょく)の実ができます。実はほぼ球形、表面は小粒(こつぶ)のビーズを一面に並(なら)べたような感じで、食べられます。

▲食べられる実

▲雄花

ユキヤナギ (バラ科)

ユキヤナギはヤナギの仲間ではありません。細い枝(えだ)がヤナギのようにたれ下がり、小さな白い花が枝いっぱいに咲(さ)くようすが、雪をかぶったように見えるところから名前がつきました。

木は1～2mと低く、根もとからたくさんの枝が生えます。葉は互生(ごせい)で、2～4cmの長い卵形(たまごがた)で先がとがっています。上半分に小さなぎざぎざがあります。秋には紅葉(こうよう)します。

4月に8mmほどの小さな白い五弁(べん)の花をたくさん咲かせます。、散った花びらのようすが地面に小米(こごめ=くだけた米)をまいたように見えることから「コゴメバナ」とも呼(よ)ばれます。

5～6月に長さ3mmほどの小さな実が5つかたまってつくので星形に見えます。

ユズリハ　（ユズリハ科）

春、枝（えだ）先に鮮（あざ）やかな黄緑色の若葉（わかば）が生え、その下に花が咲（さ）いて、古くなった葉が下に垂（た）れ下がり、落葉します。この様子から古くは「ユズルハ」といって、親が成長した子にあとを譲（ゆず）るのにたとえて、子孫繁栄（しそんはんえい）を象徴（しょうちょう）する縁起（えんぎ）の良い木とされ、正月飾（かざ）りなどに使われます。庭木や公園などによく植えられています。

高さは 10m ほどの常緑（じょうりょく）高木で、雌雄異株（しゆういしゅ）です。葉は長さ 20cm ほど、楕円形（だえんけい）です。表面は濃（こ）い緑色で裏（うら）は白っぽく、葉柄（ようへい）は紅色（べにいろ）で、枝先にらせん状（じょう）につきます。花は 5～6 月に咲き、実は 10～11 月に熟（じゅく）し、黒褐色（こっかっしょく＝黒みを帯びた褐色）になります。小鳥が好んで食べますが、この実にも毒性（どくせい）があるので、口に入れないようにしてください。

ラクウショウ　(スギ科)

落ち葉の形が鳥の羽のようです。ラクウショウの漢字は「落羽松」です。葉の形が似(に)ているメタセコイアと間違(まちが)われやすいです。ラクウショウは長さ1cmほどの繊細(せんさい)な葉が枝(えだ)に対して互い違い(たがいちがい)に生える互生（ごせい）です。メタセコイアの葉は、向かいあわせに付く対生。葉の付き方の特徴(とくちょう)を見れば、違いはすぐ分かります。

ならやまのラクウショウは植樹(しょくじゅ)したものです。以前、サクラを植えた場所が雨水などの溜(たま)りやすい地形で、育たなかったことがあります。このような土地で育つ木として選んだのがラクウショウです。まだ若木(わかぎ)ですから写真のような気根は出していません。樹齢(じゅれい)を重ね、地上に気根が顔を出すころには、鍾乳石(しょうにゅうせき)を思わせるような不思議な光景が見られるでしょう。

気根は植物の呼吸(こきゅう)を助ける役目を担(にな)っており、地中の水に根を張(は)るラクウショウに酸素(さんそ)を送っているのです。呼吸根や湿根（しっこん）とも呼(よ)ばれます。 木質(もくしつ)は適度(てきど)な精油分(せいゆぶん)を含(ふく)み、軽くて耐久性(たいきゅうせい)に富みます。湿気に強く腐(くさ)りにくいため、土木建築(けんちく)、造船(ぞうせん)など様々な分野で利用されています。

▲気根

リキュウバイ　(バラ科)

落葉低木です。4～5月に緑がかった5枚(まい)の花弁(かべん)の白い花をつけます。花の形はウメやサクラに似(に)ていますが、花は少し大きく、少し異(こと)なったおもむきがあります。ウメやサクラとはあまり近い関係にはありません。

名前は茶花として好まれることから、千利休にちなんで利休梅と名づけられたようです。

主に庭園や公園に植えられています。 中国中北地方の原産で、わが国には明治末期に伝わりました。

レンギョウ (モクセイ科)

落葉低木で、公園や垣根(かきね)によく植えられています。

高さは1～3mくらい、たくさんの枝(えだ)を出します。枝は直立するものと、たれ下がるものとがあります。地面に接触(せっしょく)した枝には、そこから根が生じます。早春の3月から4月にかけて黄色い4弁の小さな花を枝いっぱいにつけます。

中国原産で、わが国には江戸（えど）時代初期に伝わったようです。

植栽（しょくさい）以外の用途(ようと)としては、漢方薬の原料に用いられています。利尿（りにょう＝尿を出やすくする）、解毒（げどく＝毒成分をなくすること）、消炎（しょうえん＝炎症をなくすること）の効能(こうのう)があるとされています。

リョウブ (リョウブ科)

高さ3～7m の落葉小高木です。特徴(とくちょう)は樹皮(じゅひ)が多様な形ではがれて落ち、幹(みき)は茶褐色(ちゃかっしょく)のなめらかな木肌(きはだ)になることです。サルスベリの木肌(きはだ)に似(に)ています。山の中は地味な樹皮の木が多いので、その美しい幹はひときわ目立ちます。

葉は互生(ごせい)で、長さ10cm、幅(はば)3cm ほど、卵(たまご)をさかさにしたような楕円形(だえんけい)です。縁(ふち)には細かい鋸歯(きょし)があり、枝(えだ)先に集まってつきます。若葉(わかば)は山菜として食べられます。

7～8月に直径5～6mm の白色の花を、無数といえるほどたくさんつけます。

花には蜜(みつ)を吸(す)いにやってくる昆虫(こんちゅう)がたいへん多いことが知られています。

リョウブの漢字は「令法」です。この木の若葉(わかば)が食べられるので、穀物(こくもつ)がほとんど実らない食料不足のときに備(そな)えて、この木を植えておくように法令で命じられたことによります。

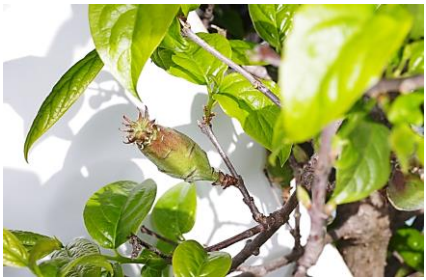
ロウバイ (ロウバイ科)

ロウバイは、1月に黄色の花を元気よく咲(さ)かせ、とても良い匂(にお)いのする冬の人気者です。花びらが「ロウ」でできているように、透(す)きとおって見えるので、この名前がつきました。

木の高さは3~5mの落葉樹(らくようじゅ)です。花は、直径が2cmくらい、周りの花びらは黄色で、中心の花びらは赤紫色(あかむらさきいろ)です。葉のつき方は対生、長さは7~15cmの長円形で、先はとがっています。葉の表をさわると「ざらざら」しています。

5月には3cmほどの実になりますが、中には10~20個(こ)の種が入っています。

ロウバイのなかまに、花の中心まで黄色いソシンロウバイがあります。



▲ソシンロウバイの花

虫えい(虫こぶ)

小さな昆虫(こんちゅう)が木の芽や葉、枝(えだ)などの中に潜(もぐ)りこんで生活することによって、木の一部が異常(いじょう)に膨(ふく)れ上がって変形した部分を虫えいといいます。その形や色は虫によってそれぞれ特徴(とくちょう)があります。

虫えいを作る昆虫は、アブラムシ類が多いですが、非常(ひじょう)に小さなハチ（タマバチ）やハエ（タマバエ）も虫えいをつくります。

※ 以下は虫えいの名前(虫えいを作るハチやハエの名前)の順です。

クリメコブズイフシ（クリタマバチ）

クリの新芽がふくらんで赤味がかった虫こぶになります。虫こぶは直径 15mmくらいで丸い形をしています。虫こぶの中はいくつかの部屋にわかれ、それぞれの小部屋で1頭ずつ分かれて住んでいます。また、虫こぶから小さな葉が広がっていることもあります。虫こぶは野生のしば栗(くり)には必ずいっぱいついていますが、栽培(さいばい)している品種では少ないか、あっても虫こぶは小さいです。

クヌギハケツボタマフシ（クヌギハケツボタマバチ）

クヌギの葉の表側に、直径 4mm前後でやや平たい球状の黄褐色(おうかっしょく)の虫こぶがつきます。球の上は少しへこんで褐色でその周りには白色の毛の輪があります。その外側には赤褐色の毛が輪になっていて、さらにその外側には白い毛があります。1枚(まい)の葉にたくさんの虫がかたまってつきます。

クヌギハヒメツボタマフシ（クヌギハヒメツボタマバチ）

クヌギの葉の表側に、直径 3mm前後でやや平たい球状のピンクがかった赤色の虫こぶがつきます。球の上はわずかにへこんでいます。

クヌギハマルタマフシ（クヌギハマルタマバチ）

クヌギの葉に直径6mm前後の球のような黄白色または茶褐色(ちゃかっしょく)の虫こぶがつきます。

クヌギエダイガフシ（クヌギエダイガタマバチ）

クヌギの枝にクリのイガのような虫こぶがかたまってつきます。大きさは 10～15mm、球形で周りにはトゲがいっぱいついています。茶色になると非常(ひじょう)に堅(かた)くなって押(お)さえても壊(こわ)れません。

ナラハヒラタマルタマフシ（ナラハヒラタタマバチ）

コナラの葉脈(ようみゃく)の上に直径8mm前後で球のようなピンクがかった赤色の虫こぶがつきます。

葉の表よりも裏側(うらがわ)に多くつきます。

ナラメリンゴフシ（ナラメリンゴタマバチ）

春先、新芽が開き枝(えだ)が伸(の)びかけたときによく見られます。枝の先端(せんたん)の芽がふくらみ、淡(あわ)い緑色で、陽があたる面は赤くなって美しい。大きなものでは直径 4cm にもなります。

一つの虫こぶ内で多くの幼虫(ようちゅう)が仲良く集団(しゅうだん)で住んでいます

イヌツゲメタマフシ（イヌツゲタマバエ）

葉のつけ根に直径 1cm 前後の丸い球ができます。最初は緑色ですが、だんだん紫(むらさき)色がかってきます。球の中はいくつかの部屋に分かれて、そこに一匹(ぴき)ずつ幼虫が住んでいます。成虫になって出て行った後も虫こぶは褐色(かっしょく)でミイラのようになってくっついています。

ノブドウミフクレフシ（ノブドウミタマバエ）

秋に青色や赤紫(あかむらさき)色に色づくノブドウの実にはすべて虫が入っているといわれていますが本当だろうか？ 私は違(ちが)うと思います。虫が入っている実はサイズがかなり大きいし、それほど多くはありません。

エノキハトガリタマフシ（エノキトガリタマバエ）

春に葉が開くと同時に葉表や葉裏(うら)に円すい形の虫こぶがたくさんできます。高さは 5～6mm、直径は 3～4mmほどで、内部は中空で、白色のウジが一匹(ぴき)ずつ入っています。5～6月ごろになると虫こぶはぽろぽろと葉から離(はな)れて地上に落下します。

ソヨゴメタマフシ（ソヨゴタマバエ）

葉のつけ根にある芽がふくれて直径1cm くらいの球形の虫こぶになります。

できたときは緑色ですが、成虫がとびだしたあと褐色(かっしょく)になり堅(かた)くなっていつまでも枝(えだ)に残ります。一つの虫こぶ内は小部屋に分かれ、何匹(なんびき)かの虫がいっしょに住んでいます。

アオキミフクレフシ（アオキノミタマバエ）

4～5月ごろ、赤い実が枝(えだ)についていれば中に黄色のウジが住んでいます。実の形はきれいな楕円形(だえんけい)ではなく、変形してヒョウタン形をしており、色は緑色と赤色のツートンカラーで美しいです。

ヌルデミミフシ（ヌルデシロアブラムシ）

ヌルデの葉に果実のような大きな黄緑色（少し赤味がかる）の袋(ふくろ)があらわれます。袋の中は中空で、最初は一匹(いっぴき)のアブラムシしかいませんが、袋の中で子供(こども)を産んで増(ふ)え、秋には大家族となって外へ飛び出してゆきます。

ケヤキハフクロフシ（ケヤキヒトスジワタムシ）

5月ごろ、ケヤキの葉に長さ1cm前後の袋のような物がいっぱいくっつきます。この中にはアブラムシの家族がたくさん住んでいます。しかし夏前にはみんなそろって引っ越(こ)しをしていなくなります。

ハルニレハフクロフシ（オカボノクロアブラムシ）

アキニレの葉の表に赤色（または黄緑色）のきれいな袋(ふくろ)のようなコブがあらわれます。大きさや形はいろいろですが、よく発生します。

袋の中にはアブラムシが住んでいます。

エゴノネコアシ（エゴノネコアシアブラムシ）

6～7月ごろ、エゴノキに黄白色のグローブのような形をしたものが見られます。これは芽が変形したもので中に小さなアブラムシがたくさん住んでいます。形が猫(ねこ)の足に似(に)ていることからこのような名前がつけられました。

ヌルデハイボフシ（ヌルデフシダニ）

ヌルデの葉に小さなイボ（直径 2mm前後）のような突起(とっき)がいっぱいあらわれます。見ただけでゾクゾクと気持ちが悪くなりそうです。

葉の裏(うら)に目に見えない非常(ひじょう)に小さなダニが寄生(きせい)しておこったものです。

葉痕(ようこん)

冬が近づくと山や林の木は、葉をつぎつぎに切り落として冬越(ふゆご)しの準備(じゅんび)に入りますが、葉が枝(えだ)にくっついていたところ(葉痕)が、面白い形をしている木があります。林の中に入って観察してみましょう。

葉痕が動物の顔の形をしています。

▲オニグルミ

▲ニセアカシア

▲カラスザンショウ

▲センダン

葉痕が首輪のように枝を取り巻(ま)いています。

▲タラノキ

▲コシアブラ

▲ヌルデ

▲クワ

面白い形をしているでしょう!
葉がなくなって枝だけになっていますので観察しやすいです。

冬　芽

夏の間茂(しげ)っていた森や林の木々は、冬が近づくと葉をつぎつぎに切り落として冬越(ふゆご)しの準備(じゅんび)に入り、木々は太い幹(みき)と枝(えだ)だけになってさみしくなります。しかし、何もない林の中で眠(ねむ)っているような木でも、翌年(よくねん)の春を目指して新しい芽の準備をしています。

▲コナラ

▲クヌギ

▲アジサイ

▲タカノツメ

▲ネジキ

▲クロモジ

▲サカキ

▲ウメ

森が地球の生物の命を支える
地球の酸素(さんそ)は森が作る

生き物は、動物も植物も空気を呼吸(こきゅう)して生きています。空気中の酸素を吸(す)って、体の中でできた炭酸(たんさん)ガスを吐(は)き出しているのです。この空気中の酸素は誰(だれ)が、どのようにして作っているのでしょうか。

約 24 億年以前の地球には、酸素は存在(そんざい)しませんでした。その後、葉緑素を持ったバクテリアが出現し、酸素を作り始めます。続いて葉緑素を持つ植物が出現(しゅつげん)します。やがて、3 億 5 千万年前になると、大森林が地球を覆(おお)うようになり、木々は大量の酸素を作り続けます。おかげで、地球は多くの生物が住む「命のあふれる星」になりました。

今でも、空気中の酸素のほとんどは森林が作っているのです。
その仕組みを説明しましょう。

①森の木は根が「水」を吸い上げて、幹(みき)を通して葉に送ります。

②葉は裏側(うらがわ)にある孔(あな＝気孔〈きこう〉)から「炭酸ガス」を取り込(こ)みます。

③葉の中では「葉緑素」が「太陽の光エネルギー」を利用して「水と炭酸ガス」から、木の栄養になる「ブドウ糖(とう)」を作り、あまった「酸素」を空気中に出します。これを「光合成」といいます。

(炭酸ガス)＋(水)⇒(光合成)⇒(ブドウ糖)＋(酸素)

≪太陽の光≫

地球上の森が一年間に吸収(きゅうしゅう)する炭酸ガスは、約 100兆トンで、同じ量の酸素を出しています。また光合成で作られたブドウ糖は、樹木(じゅもく)の幹や枝になって、何十年、何百年も残ります。

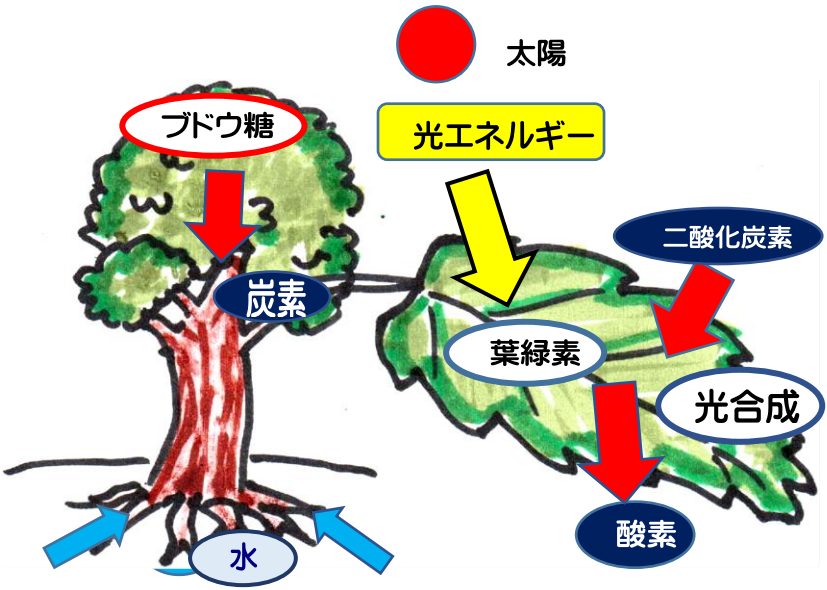
このようにして、1 年間に森林が幹や枝などに蓄(たくわ)えるエネルギーの量は、約 10^{18} kJ(キロジュール)だといわれています。これは世界中が、一年間に石油や石炭、天然ガスを利用して使っているエネルギー量の 10 倍になります。 森の力って、スゴイ! 驚(おどろ)きですね。

森の灯台

木々たちの働き

木材は建物や家具、燃料（ねんりょう）など、私たちの生活には欠かせません。でも、もっとすごいことに、地球上で酸素(さんそ)を必要とする生物すべてを守っているのです。太陽の光エネルギーと木々たちの葉緑素（ようりょくそ）による光合成が、二酸化炭素（にさんかたんそ）をきれいな酸素に変えてくれています。ぐんぐん生長する若（わか）い木ほど、たくさんの酸素をつくることができます。地球上の酸素は光合成をする植物や微生物（びせいぶつ）、特に樹木（じゅもく）によってつくられているのです。

葉は裏(うら)にある気孔（きこう）で呼吸（こきゅう）していますが、気孔は空気が通り抜(ぬ)ける時、空気中に含(ふく)まれる悪い物質(ぶっしつ)を取り除(のぞ)くフィルターのような働きもしてくれています。緑が豊(ゆた)かな街ほど空気が澄(す)んでいるのは、車の排気(はいき)ガスなどで汚(よご)れた空気を木々がきれいにしてくれるからなのです。また、交通量が多い都市の公園で木々が茂(しげ)っていると、騒音（そうおん）がやわらぐことにも気がつくでしょう。平たくて広い葉が、音を吸収(きゅうしゅう)しているのです。公園がやすらぎの場であるのも木々のお陰です。



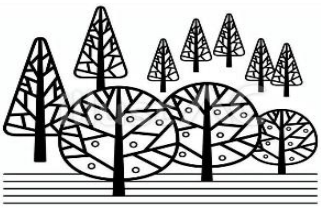
森と林の違いって？

森と林はどう違（ちが）うのでしょうか。字体からすると、森は木が三つ、林は木が二つ。で、森の方が木が多い、というのは少し冗談（じょうだん）めいています。実は森と林の違いはあいまいで、はっきりしないのです。

農林水産省の定義（ていぎ）では、自然にできた樹木（じゅもく）の密集地（みっしゅうち）を「森」、人工的に作られた樹木の密集地を「林」としています。自然にできた樹木の密集地でも「密林（みつりん）」といったり「原始林」「雑木林（ぞうきばやし）」といったりします。逆(ぎゃく)に人工的に作られた樹木の密集地でも「鎮守（ちんじゅ）の森」「市民の森」「憩（いこ）いの森」といったりします。

森の語源(ごげん)は「盛（も）り」といわれ、木々がこんもり盛り上がっている様子、つまり様々な木が生い茂（しげ）る場所を指します。太陽の光があまり届(とど)かず、人の出入りも少ない印象(いんしょう)です。

林は「生やしたまま」が語源とされ、木は生えるままに任（まか）せているのでしょう。森に比べて小規模（しょうきぼ）で、同じような木が並(なら)ぶ場所のようです。森よりも光が差し、気軽に散歩できそうです。いずれも印象ですから厳密（げんみつ）な区別ではありません。



森の灯台

常緑樹と落葉樹

冬になるとサクラやカエデなどいろいろの樹木(じゅもく)が葉を落として枝(えだ)だけになっていますが、枯(か)れてはおらず春になるとまた新しい葉が出てきます。このように冬に葉を落とす木を落葉樹(らくようじゅ)と呼(よ)びます。一方、冬になっても青々と葉が茂(しげ)っているカシやツバキなどは常緑樹(じょうりょくじゅ)と呼びます。

落葉樹は寒さが苦手で寒い冬を越(こ)すために葉を落として縮(ちぢ)こまります。けれども、枝先に残っている小さな芽が春に元気にのびるための大切な栄養分は、葉が枯(か)れる前に幹(みき)や枝に移動させて蓄(たくわえ)ているのです。

常緑樹は寒さにも強くてそのまま冬を越(こ)します。でも、葉が永久に枝にくっついていたら、2～3 年するとたくさんの葉で木が埋(うず)まってしまうのではないでしょうか？ 大丈夫(だいじょうぶ)です。心配はいりません。常緑樹は春に新芽が伸(の)びて新しい葉ができると、冬を越(こ)した古い葉を一気に振(ふ)るい落とします。5～6月ごろが多いですが、これで葉の入れ替(か)わりが完了(かんりょう)です。

このようにすべての木の葉は毎年新しく入れ替わって、いつも元気のよい葉を茂らせているのです。

▲常緑樹と落葉樹

▲メタセコイア

▲サクラ

森の灯台

広葉樹と針葉樹の違いって？

字のとおり、形は平らな葉が広葉樹(こうようじゅ)で、幹(みき)は太くて多くは枝分(えだわ)かれします。一方、先のとがった細い葉が針葉樹（しんようじゅ）で、幹は真っすぐ伸(の)びます。

広葉樹の体内構造(こうぞう)は複雑(ふくざつ)で、細胞（さいぼう）ごとに機能(きのう)が分かれています。人の体に例えると、筋肉(きんにく)と血管がそれぞれの役を果たしているのです。根から幹を通して葉へ水分を送るのは導管(どうかん)の担当(たんとう)、体を支える筋肉(きんにく)にあたるのは主に木の繊維（せんい）です。養分の貯蔵（ちょぞう）機能も発達しています。

これに比べて針葉樹の細胞(細胞)と組織(そしき)は単純（たんじゅん）です。大半の種類の木は仮導管(水分の通路）が占(し)めており、これが体を支(ささ)える役も担（にな）っているのです。

建材としても、それぞれに特徴(とくちょう)があります。内装材（ないそうざい）に使う広葉樹は重くて硬(かた)いのが主流。強度があり、傷(きず)つきにくいからです。針葉樹は縦（たて）に真っすぐ切り出しやすく、軽くて扱(あつか)いやすさから柱や梁（はり）に多用されます。

生活の場の利用でも異(こと)なります。薪(まき)の場合、広葉樹は着火しにくいが、火がつけば長持ちします。調理用は広葉樹が適(てき)していると言われるのは、熾火（おきび）といって炎(ほのお)や煙(けむり)がなく、薪の芯(しん)が真っ赤に燃(も)えるからです。針葉樹は割(わ)りやすく、燃えやすいが火が尽(つ)きるのも早いです。

日本の文化は木の文化

日本では、千年以上前から木を活用した文化を築（きず）いてきました。住宅（じゅうたく）、学校、寺、神社、劇場（げきじょう）などの木造建築（もくぞうけんちく）を初め、仏像（ぶつぞう）や船など幅広（はばひろ）く木を活用した生活文化が発展（はってん）してきました。世界最古の木造建築といわれる法隆寺（ほうりゅうじ）などに代表されるように、千数百年たっても創建（そうけん）当時の姿（すがた）を今に伝えている文化があります。

その法隆寺のそばで生まれ、寺や神社の再建（さいけん）や修理（しゅうり）に生涯（しょうがい）携（たずさ）わってきた宮大工の西岡常一（にしおかつねかず）さんは、「木に学べ」ということを口癖（くちぐせ）にしていました。そしてこんな言葉を残しています。「（法隆寺を）世界で一番古い木造建築だからって見に来るんじゃ意味がありません。古いだけがいいんやったらそこらに落ちている石の方が古いんや。法隆寺は千三百五十年、石ころは何億年や。だから、古いからここに見に来るんじゃなくて、我々（われわれ）の祖先（そせん）である飛鳥時代の人たちが建築物にどう取り組んだか、人間の魂（たましい）と自然を見事に合作させたものが法隆寺ということを知って見にきてもらいたいんや」。

木そのものについて「個性（こせい）を殺（ころ）さず、癖（くせ）を生かす。人も木も、育て方、活かし方は同じだ」「木を買わずに山を買う。山の環境（かんきょう）を見て木の癖(くせ)を考える。木は育った方位のままに使う」「木は大自然が生み育てた命ですな。木は物やありません。生き物です。木も人も自然の分身ですがな。この物言わぬ木とよう話し合って、命ある建物に変えてやるのが大工の仕事ですわ」などと語っています。木の文化の中で生きている私（わたし）たちも木と対話することが大切なようです。

森の!&?灯台

木にはどうして年輪があるの？

木の断面(だんめん)の中心部分から表皮の方へ広がる輪のような成長輪という模様(もよう)があります。春から夏にかけて成長する早材という白っぽい層(そう)と、秋から冬にかけて成長する色の濃(こ)い晩材(ばんざい)という層です。成長輪のうち、1年ごとに帯状(おびじょう)にあらわれる円が年輪です。

円は外側へ新しくつくられます。外側ほど新しい年輪です。冬の間、木は成長しません。したがって1組の早材と晩材を足した円が年輪の1年というわけです。その数が樹齢(じゅれい)です。みなさんも丸太を見たら数えてみてください。爪(つめ)を立てると、早材はスカスカで晩材は堅(かた)いでしょ。細胞(さいぼう)の寸法(すんぽう)の違(ちが)いが年輪に現れているのです。

年輪は普通(ふつう)、温帯から寒帯の木に刻(きざ)まれます。熱帯雨林は季節の区別がないので、一部の例外を除(のぞ)いて年輪はできません。1年と1年の間隔(かんかく)が狭(せま)いのや広いのがあるのは、気象条件(きしょうじょうけん)の影響(えいきょう)です。長生きしている木は、数百年、数千年の気候変動を記録しているといえます。短期の高温や乾燥(かんそう)で成長を妨(さまた)げられた場合は、偽(ぎ)年輪と呼(よ)んでいます。

◎丸太の木を見かけたら、年輪を数えて何歳(なんさい)の木なのか当てましょう！

◎早材の層が厚いと、その年は気温が高い日が多くて雨量も十分だったように予想できます。

木々たちとともに

日本では1300年以上も昔から木を活用した生活と文化を築(きず)き、今日まで受けついできました。仏像(ぶつぞう)をはじめ住宅(じゅうたく)、学校、寺、神社など木造物(もくぞうぶつ)が身近かすぎて、木への思いやりを忘(わす)れがちです。木は私たちの暮(く)らしに、なくてはならない存在(そんざい)なのです。ならやまの木々を見直すことから始めることにしました。

ならやまで活動する14人の仲間が編集(へんしゅう)委員として執筆(しっぴつ)に携(たずさ)わりました。新型(しんがた)コロナウイルスが地球を襲(おそ)い、里山再生(さとやまさいせい)活動も長期間の自粛(じしゅく)をせざるをえませんでした。今さらのように自然の驚異(きょうい)をかみしめながらの取材と執筆(しっぴつ)でした。構想(こうそう)から3年、編集(へんしゅう)に2年。ならやまで育つ150種以上の木々の姿(すがた)が記録できました。わたしたちの仲間です。未来を担(にな)う子どもたちが森林の大切さを学ぶ機会になればと願っています。

この図録(ずろく)は、「**トヨタ環境(かんきょう)活動助成プログラム**」のご支援(しえん)があって本にすることができました。深く感謝(かんしゃ)します。

編集委員会 委員長 鈴木末一

委 員 青木幸子 阿部和生 岡田安弘 菊川年明 木村 裕
千載輝重 辻本信一 徳地恵男 西谷範子 古川祐司
守口京子 山本隆造 吉川利文 (五十音順)

見つけよう自然のなかま - ならやまの木々たち -
令和4年3月30日印刷 令和4年3月30日発行
発行 奈良・人と自然の会 印刷 冊子印刷ドットコム

この図録は正確な記述を心がけて作成しましたが、見解・学説・伝承などについては、異論もあることをご了承ください。本文中の漢字表記については、主な読者が学童であることを想定し、小学校での履修漢字を基準に記述しました。文章・写真などの無断転載を禁じます。

トヨタ環境活動助成プログラム

TOYOTA Environmental Activities Grant Program

奈良・人と自然の会